
例えば名無しの英雄譚

零月零日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例えば名無しの英雄譚

【Nコード】

N5888P

【作者名】

零月零日

【あらすじ】

平凡にして平均の俺は、特別を求めてxと契約、その策略から異世界に飛ばされた。日本の形をした世界、そこでは魔法と科学が対立し、戦争が近づいていた。契約により力を手にしていた俺は、科学と魔法、その両方を使ってその地で自由気まま好き勝手に活動始める。俺が元の世界に戻る条件、この罰ゲームのクリア条件は、――天下統一だ――

プロローグ

緑が深く生い茂り、マイナスイオンがどんな物か知らないが、きつとそれが大量にあるだろう森だ。

昔の日本はきつとこんな感じだったんだろう、そう俺は思った。

「さうて、今日の晩飯を狩りに行くか」

そんな事をのたまつて、森の中を闊歩している俺は手ぶらである。腰のベルトに挟んであるエアークンが唯一の武器。

服装も、学生服でとても山登り、というか『狩り』に適した物ではない。

けれど、残念ながらこれ以外にまともな服が無いので仕方ない。パジャマもあるが、それは家の中で着るもので汚したくない。

「まったく、異世界なんて気がしないよな……」

俺は異世界の森の中を闊歩しているのだが、その理由は至極どうでも良い。

今は晩飯のおかずを狩らねばならぬのだ。

「……つと」

草の茂みがカサカサと音を立てたので、ピタッと息を止め、茂みを伺う。

その距離、十メートル弱か。それならば、一秒で事足りる。

一週間前まで学生だったとは思えない動きだ、そう自分でも思っ
てしまいが、待っていてもご飯は出てこない、お金で生き抜く事の
出来ない世界なのだから、当然と言えば当然だ。

あの音からすると、恐らくウサギのような小動物だろう。

ウサギの肉は、鶏肉のようで美味しかった。

じゅるり。

思わず涎が垂れて来てしまい、慌てて拭う。

捕らぬ狸の皮算用だ、ここは焦らず、確実に仕留めねばならない。
悪く思ふなよ、ウサギ。

「獅子搏兔^{しうしはくう}！ ライオンは、ウサギのような小動物だろうと捕まえるのに全力を尽くすのだ！」

轟！ と俺は土煙を上げてその茂みに突進。

叫んだりしているが、音速並の早さの突進、それは聞こえてはい
ないはずだ。

茂みに右手を突っ込み、一瞬でその生き物を引きずり出した。

「ふっ、俺の感も冴えた物だな。ウサギよ……弱肉強食、諦めてく
れ」

俺の手には、首根っこを捕まれてパタパタ暴れるウサギの姿が。
その可愛い仕草に思わず、助けてやろうかな？ などと思っ
てしまいが、すぐに否定する。

先ほどの人外の動き、何のリスクも払わず出来る事ではないのだ。

腹が異常に減る。

一週間前、この異世界に来てすぐの俺は、ウサギの可愛さに思わず逃がしてしまったのだが、その夜の腹の鳴き声は尋常な物ではなかった。

木の根をかじり、その苦みに悶え、やつとの事飢えを凌いで俺は悟ったのだ。

「悪いなウサギ、俺は死にたくないし、まだ死ねないんだ」

慌てたようにばたばた暴れだすウサギに、俺は言い聞かせる。

「諦めろ。苦しまないよう、一瞬で殺してやるから」

でも肉が固まってまずくなるので、首根っこを掴んで家の方まで持って帰る事にした。

しきりに暴れるウサギ。心無しか、人間臭い動きだ。

「やけに暴れるな、このウサギ」

肉体が強化されているのでまったく痛くないが、さっきから蹴りを決めてくる。

まあ、このままだったら明らかに死ぬのは目に見えているし、当然かもしれない。

しかし、いい加減鬱陶しくなってきた。

さっきから俺の腹を蹴るな。

「ウサ公……そんなに早く死にたいのか？」

昨日まで捕まえたウサギ達は反抗もせず、ただただ俺の目をじっと見て、諦めたようにぶらぶらと揺れていたと言っのに。

というのも、この一週間で俺がこの森の王者になっているからだ
が。

三日前だろうか、この森を統べる地竜を叩きのめし、俺は名実と
もにこの森の王者となったのだ。

地竜には悪いが、その鱗だの骨だのなんとなく高く売れそうな部
位は加工してお持ち帰りさせてもらった。

その頃から、明らかに俺は日本の学生という身分を捨て去ってい
る。

人間離れた動きをするのは異世界譚のテンプレだが、それとは
少し違う。

元の世界に帰るには、そういう事をしなければならないのだから。

何も好きで動物虐待をしている訳ではない。

竜が動物なのかは知らないけど。

と、そんな過去の回想をしている間にも、ウサ公は俺を熱心に蹴
飛ばしてくる。

生きるのに必至な事は良い事だけど、自分の立場を考えようか。

「さてウサ公、どうやって死にたい？」

ビクツとウサ公は震え、ばたばたと手を動かし始める。

まるで弁解しているような態度だが、それなら最初からするな。

「いいかウサ公。お前の命は俺の掌の上なんだよ。生殺与奪は俺に
ある。まあ、生を与える気はないんだが」

ばたばたと必至で止めてくれとアピールするウサ公。

「とりあえず、今日の晩飯はウサギの鍋に決定なんだ。抵抗すればするほど、痛い目に会うぞ?」

それでも尚暴れるウサ公。

「はあゝ。いいかウサ公、この世の中はなあ」

俺は左手でエアークンを抜き、ウサ公を目の高さまで持ち上げ、諭すように??。

瞬間、持ち上げたウサ公が人間に変わった。

「
.....
」

俺とそいつは何も言えなかった。

目の高さまで持ち上げていたから、必然的に目と目が合った。

ウサ公は、美少女に変わっていた。

透き通るような長い銀髪、深い藍色の瞳、端正な顔立ち。

初めて会ったというのに、なんだか懐かしい気持ちになる。

いや、俺が人に出会ったのが一週間振りだからだろう。
その子も、ポカンとしていた。

「……ふつ。なかなか賢いウサギじゃないか。人間に化けるなんて、只者じゃないな。ウサ耳も残さずに変身するとは。確かに、これだったら普通の人間じゃ食べる気は失せる。不覚にも可愛いと思ってしまったからな。だが??俺は騙せないぞ! 俺はこの程度でお前を食べる事を断念したりしない!」

「ちよつ、ちよつと待ってください! 私是人です!」

慌てたように両手を振るウサ公??もとい少女。

左手で持っているエアークンに何やら得体の知れない恐怖を感じているようで、ちらちらとそちらを見ている。

「なんと……。人語も理解し、流暢に喋るとは。異世界のウサギ……、恐るべし。だが、バニーガールでないウサギなど、恐るるにたら???」

「ちゝがう!」

ばたばた暴れだす少女。……おや?

「……………」

俺は静かに驚いていた。ウサギ相手にしても失礼だと思い、声を上げては驚かなかった。

元々あまり感情を表に出さないこともあったが。

少女の服装は、さながらRPGに出てくるような黒を基調としたローブだった。

二の腕や太腿の部分に大きな露出が目立ち、少女の綺麗な白い肌が惜しげも無く晒されている。

少女の手には、さながらRPGに出てくるような、武器としての機能を持った装飾が施された杖があった。

長刀と杖を合わせたような、それでいて気品を漂わせる一品。

少女の髪や瞳は、まぎれもなく自然のモノだった。

髪は染めたモノではないと一目でわかる艶やかさと輝きを放っている。

あれ？ いくら何でも、ウサギがここまで完璧に人に化けるのは、あり得ない？

この世界は普通に魔法があるけど。

って事は、もしかして……。

「私は！ この森に住む魔女にウサギにされたんです！ 逆です！ 逆！」

「……………」

「私は！ ラザウェル王国第一王女、レーン・リア・ラザウェルです！」

「……………」

困った。どうしよう。

いきなり王女様の名前を言われても、実はここがどんな国のどう
いう場所なのか知らない俺は、何も反応出来ない。

とりあえず言葉が通じる事ありがたい話だ。

俺が異世界人とバレると、きっと碌な事にはならないだろうが、
既に口走っているのでバレているような気もする。

しかし、何も言わないと怪しまれるし??というか、今すぐ先の
無礼を詫びなければ!

首が飛ぶ!

エアーガンをベルトに挟め、俺はぱつと膝をついた。

「すいません! 王女様とはつい知らず、ご無礼を働いてしまいま
した! なにとぞ、命ばかりはお助けを!」

プライドもへつたくれも無い。

日本人は変に他人を敬うと言われているが、多分こういう事じゃ
ないだろうか。

何も知らない俺は少女の言葉を鵜呑みにするしか無いので、とり
あえず王女として扱い、慣れない言葉遣いとなってしまう。

というか、多分コレ本物の王女様だ。

装備とか醸し出す空気がそれっぽい。本物見た事無いけど、きつ
とそうだ。

やべえな、俺が元の世界に戻るためには、少なくとも国に喧嘩を
売るのはまだ早い。

というか、なるべくならそんな事にはならない方が良い。

暴君王女だったら……、間違いなく死ぬ！ ギロチンが……。

「え？ ……まあ、不可抗力ですし、許しますよ？」

と、少女は俺の手のひら返しに若干驚きながら、にっこりと笑みを浮かべる。

ひくひくと笑みが引きつっているけど。

……良かった。とりあえず、賢く良いお姫様のようだ。

処刑とか冗談でも言ったら、間違いなく殺されると解っているようにでいらつしやる。

音速で捕まえたあの時の恐怖はまだ残っているようだ。

「えっと、その……そのかわり、良かったら街まで送ってくれませんか？」

「勿論、俺で良ければ」

恭しく騎士の如く跪く俺。俺の態度の変化にとても驚いている少女。

まあ、ウサギと人の扱いが違うのは当たり前でしょう。

お姫様に恩を売っておいて、悪い事は無いでしょう。

「では、付いて来てください」

俺は王女様の一步先を歩くように進みだす。

自慢じゃないが、この一週間でこの森の全体図は飲み込んだ。

人里に降りた事は無いが、それでも街道には出た事はある。

「……あの。食べないんですか？」

「……姫様。何をおっしゃって？」

道なき道を歩いていると、不意に姫さんがそんな事を尋ねて来た。

「いえ……。それなら、良いです」

「……………そうですか」

一体何が言いたいのだろう。…………あ。

もしかして、人に戻ってから言った『食べる』って意味、誤解してる？

姫様ならそういう話も耳にするかも知なく、政略結婚とかあるし、結構可愛いし。

「……時に姫様、何故このような森に一人で？ 長年住んでおります私でも恐れる、凶悪な地竜などが住む危険な地域です。護衛の一人も付けず歩くのは、危険かと」

長年住んでないし、地竜は一撃で屠っているので嘘ばかりの台詞。というか、魔女に会いに来たって、どんなシチュエーション？

「来た時は護衛が居たんですが…………その、魔女に…………」

姫様は俯き、言葉を濁してしまう。

うわゝ、怖い先客が居るみたいだな、この森。

「そうですね。…………申し訳有りません。思い出させてしまいましたか？」

「いえ！ それは、私の背負うべき事です。お気遣い、ありがとうございます」

「もったいなきお言葉、ありがとうございます」

そんな事を言いながら森を歩いていると、街道が見えて来た。

街道は、石の舗装がされた幅ハメートルの立派な道。

右手には国境みたいな高い壁が見え、左手には城壁に囲まれた都市がある事がわかる。

大きな城が見えるが、多分アレが首都だろう。
いやに国境に近くないか？

「では、後少しですね」

「……は、はい」

と、何故か体を強張らせる姫さん。

それを見ると、なんというか、初めて街道を歩く俺としても、何だか気を引き締めなければならぬ気がする。

俺が人里に降りなかったのは、異世界もので定番の、黒髪が何らかの意味を持つ、と言った状況にならないようにするためだ。

黒髪は魔王とか、黒髪は不吉とか。

しかし、姫様が対して驚かない所を見ると、どうやらそんな事は無いようである。

これで安心して街にいけるな。いい加減、調味料のストックがヤバイ事になっていたので丁度良い。

しかし、街道で身を竦める理由が俺には解らなかった。

まあ、すぐ解ったが。

「よう兄ちゃん、新婚旅行？ いいね、羨ましいぜ。俺達も仲間に入れてくれよ」

「な、ちゃんと可愛がってやるから。安心しろよ、姉ちゃん」

「『ぎやははははは』」

山じゃないし、盗賊だろう。そいつらが道を遮るように現れた。新婚旅行中のカップルなら、その愛の道をも妨げられただろう。姫様が恐れたのは、こういう事か。

盗賊は十人ほどいて、中には女性もいる。

そして、嬉しい事に黒髪もいる。

これで俺が黒髪だからという理由で弾圧される事は無くなったはずだ。

しかし、比較対象が盗賊と言うのはいただけない話である。

なるほど、『食べないのですか？』って、俺もこいつらと同じだと思われたのか。

くそ、俺はそんな奴ではない。

「黙れ」

俺は問答無用で右手でエアーガンを抜き取り、近くの男に狙いをつけた。

「あ？ んだよそれ」

どうやらこの世界にこのような武器は無いらしく、男も姫様も首を傾げる。

まあ、魔法が主流みたいだからだろう。火薬よりも火の魔法なんだろう。

といつても、エアガンって火薬使わないか。

「大人しく道を開けてくれれば、怪我をせずに済むが？」
「あの……」

姫様が何か言いたそうにしているが、それを左手で遮る。

こんな奴らがいるから、俺の品性が疑われたのだ！ 俺はケダモノではない！

？？いや、確かにウサギを素手で狩るのは野蛮だし、獣紛いの事
だけださ。

「舐めてんのか小僧！ 俺たちや？？へぶっ！！」

無視して引き金を引き、何かが男を吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされた男と、自分の手の武器を交互に見る残った盗賊、
それと姫。

非道？ いやいや、大人しく道を開けると言っただし、問題ないだ
ろ？

「で？ 君等はどうする？」

「どうぞどうぞ、どうもお手数おかけしました」

そう言って素直に道を開け、土下座して見送ってくれる彼らに驚
いてしまった。

てつきり、『覚えてやがれ！』とか言って逃げると思ったのに、
ここまで見事な手のひら返しとは。

あれ？ 既視感が。

あれ？ 先ほど俺がした事って……。

俺が振りかざしたのは実力で。姫様が振りかざしたのは権力で。あれ？　なんだろう、泣きたくなって来た。惨めだな……。

「どうしたの？」

頂垂れてしょぼんとしてると、下から覗き込むように俺を見てる姫様。

藍色の瞳がじつと俺を見つめてくる。

はあ、可愛いな。

「なんでもないです……。行きましょう」

俺はエアーガンをベルトに挟み、先を歩くと、姫様は興味深そうにそれを見ていた。

「それ、何ですか？」

「これですか？」

そう言っただけ俺はエアーガンを指差す。

コクコクと頷く姫様がリスみたいで可愛かった。

「俺の国にある護身用の武器ですね」

「……国ですか。あなたは、どこ出身なんですか？」

どうやら異世界だのなんだの言っていたのは覚えていないみたいだった。

「……ここより遙か北にある名もなき村です。もう、俺以外は皆死んでしまいました」

下手に固有名詞を出すとボロが出そうなので、なるべく抽象的に話を進める。

ここが学生服で寒くない所から、北海道より緯度が低いと判断してみた。

「ご、ごめんなさい！ 私、その、知らなくて……」

「気にしないでください。あなたが悪い訳ではありませんから」

「そ、そうですか……。ありがとうございます」

とりあえず、俺の無知を知られるとまずいので、死んだと言ってみたが正解だった。

街の壁は高く、魔物とかの襲撃に合ってもびくともしないように見えた。

「……では、俺はここまでです」

俺は恭しく礼をして、踵を返す。

このままではお城に招待されそうなので辞退させてもらっ

「え？ あの……」

「俺はあの森の木こりです。街に用はありませんので」

背後で呂律の回らなくなっているお姫様を置いて、俺は来た道に戻る。

と、不意に制服の袖をつままれた。

「あの……せめて、お名前だけでも」

「お礼は要りませんよ？ 間違ってお姫様をウサギ鍋にしようとした人間ですから」

「いえ、そうじゃではなく……」

なんだろう、何が言いたいんだろう。

まあ、名乗れば離してくれるか。

適当に誤摩化すでしょう。このお姫様はいい人だろうが、この国が良いとは限らない。

じっくりと潜伏場所を選ばせてもらおう。

俺は姫様の手を払い、姫様の顔は見ずにこういった。

「俺の名前は無いんですよ」

これがまさか間違って解釈されるとは、さすがに俺も気付かなかった。

プロローグ（後書き）

初めましての方は初めまして。 零月零日です。

この物語は、作者の作品『例えば勇者の模造品』と一部繋がっておりますが、こちらだけ読まれても十分楽しめるように書くつもりです。

感想・意見・指摘などありましたらどうぞ。

序章（改）（前書き）

そこそこ付け足しました。

主人公の意味不明さが若干カバー出来ると思っています。

序章（改）

俺は普通の日本人だった。

いや、ある意味では最も普通でない人間だっただろう。

俺という人間を一言で表すなら、『平均』。もしくは『平凡』でも可だ。

身長……170・8cm。体重……63・8kg。容姿……中の中。テストの成績……ちょうど平均点、もしくはその小数点を切り上げたもの。

俺は何でもまんべんなく出来るが、決して上手くはない。

良く言えば『万能』、悪く言えば『器用貧乏』、『代替可能』。

平均に捕われ、平凡に呪われた人生だった。

俺が何かを頑張った記憶は勿論ある。それが長続きしなかった訳ではないし、決して俺の努力が少なかった訳じゃない。それなのに、俺は『才能』と言う一言に敗北した。

俺がどれほど頑張ろうと、俺の頑張りを嘲笑うかのように他の奴らが『才能』を開花させ、俺を追い越す。

それが一度ではなく、何度もあった。

俺は自分の存在理由を見失っていた。

俺でなくても、俺より上手い奴らがそれをやるのだから、俺がやる必要は無いだろう。

そう、俺は思った。

俺でなければ出来ない事は無いのだろうか……と。

自分に特別な存在理由を求めたのだ。

だから俺は、x xと契約した。
そいつは言う。

『お前には心が有るか？ 何があってもこの誓いを貫き通す、揺るぎない心が』

その時、俺は知らなかったのだ。
それが、どういう意味なのかを。

x xは言った。

「これは罰ゲームだ」

俺の飛ばされた異世界は、どうやら日本と同じ形の島。平行世界の日本だと俺は踏んでいる。

文字はひらがなとカタカナ、それに漢字だ。アルファベットは無いようだ。

まあ、文字と地域の特徴が解る以外は、異世界だ。

魔法と科学で対立をしているのだ。

西日本と東日本で帝国と王国に別れて、現在は戦争に突入しそうな状況。

また、千年前に日本列島全てを巻き込む大きな戦い、戦乱時代があり、その当時の技術と文化レベルの遺跡が各地に点在し、その戦いによって地形がかなり変わっている。

ちなみに、戦乱時代で文化と技術は廃れた。

俺が今居る、魔法を支持するラザウェル王国は、中世ヨーロッパと江戸時代前半を足して二で割った感じだろうか。

科学を支持するギルバート帝国は、言った事も見た事も無いので知らない。

恐らく、魔法と対立出来るのだから、結構進歩しているのではないかと思われる。

また、住人も日本とは違う。

金髪碧眼を持つ人があるし、魔族という存在が普通にいるようだ。

黒髪が異端ではないのありがたい。

魔物が存在し、それを討伐して利益を得るギルド商会もあるらしい。

その異世界で俺に与えられた力は、二つ。

一つは、こちらの世界で寝ている間に、元の世界に戻り、物を持ち帰る力『世渡り』。

俺は魂だけで元の世界を彷徨い、そこにある物の概念を持ち帰っている。

その際、自分が持ち上げている物しか持ち帰らないのが玉にきずだろう。

魂だけのため、元の世界では自分の姿は誰にも見えない。

だから盗みほうだーげふんげふん。何でも無い。

というか、この契約の結果、俺と言う人間は元の世界で抹消されてしまっている。

このゲームが終わるまで、俺には帰る場所は無いと言う事だ。腹をくくれと言う意味だ。

もう一つは、『創造魔法』と呼ばれる魔法を扱う能力。

何かを創り出す魔法で、この世界の全ての魔法の基本らしい。

魔法はイメージで、それを具現化させる事だかららしい。

例えば炎の魔法では、炎を想像し、それを魔力で創り出している。まあ、属性とかあるみたいだが、俺には関係ない。

『創造魔法』は全ての魔法の基本、威力では劣るだろうが、全て賄えるのだ。

そしてこの魔法は、俺のオリジナルのようだ。

はつきり言って、考えようによってはチートに成り得る力だ。

勿論、発想力の乏しい者では『創造魔法』は使いこなせない。

実際使ってみたが、全然上手くいかなかった。

イメージが湧かないのだ。

手から魔法を飛ばそうと思ったのだが、生かせん速さと威力が足

りなかった。

そのため、俺は日本からエアーガンを持ってきて、高速で魔力を発射するイメージの媒介としている。

だから、仮にエアーガンを奪われたとしても、何も痛くない。

最後に、俺が元の世界に戻る条件だが……。

俺がこの異世界で試されているのは、俺の技量。いかにして人の心を掴み、支持を得るか。

そして、元の世界で叶えるはずの夢を叶える事。

俺がこの世界で夢を叶え、満足するようならば、俺には奴の力を得る資格が無いと言う事だ。

この世界がもし奴の作り上げている世界ならば、俺はクリアしなければ存在ごと喰われるのだ。

用は、一度手に入れたものを手放せるのか、叶えた夢は嘘だが良いか？ というゲームだ。

心折設計のゲームだな。

罰にしか思えない。

このゲームのクリア条件。

それはつまり……世界平和……いや、これは日本だ。ならば。

――天下統一だ。

序章（改）（後書き）

能力説明章です。

そのため、何度が書き換えられるかもしれません。
あらかじめご了承ください。

第一話 異世界の諸事情

「ほら、さつさと歩け！ 奴隷の分際で生意気なんだぞ！」

「嫌っ！ 助けて！」

昼食を買い求めていると、そんな声が聞こえて来た。

俺が姫様をこの城下町に送り届けて、三日ばかり経っただろうか。俺は頻繁にこの街に寄るようになっていた。

というのも、この前倒した地竜の部位を売りに来ているのだった。

「あれま、またやってるよ。コレで何度目かね……」

店内のおばちゃんが、やれやれと溜息をつく。何やら日常茶飯事、とは言わずとも既に何度も似たようなやり取りが行なわれたようだった。

「おばちゃん、アレ何？」

「ん、あれ。あんたもしかして、ああ言うの見るのは初めてかい？
ありゃこの先の街に店を構える奴隷商人だよ。どっからか連れて来た子供を売ってるんだよ」

「へえ……怖いですね。田舎者なんで知りませんでしたよ。おお、怖い怖い」

茶化すように言ったのが、おばちゃんは気にも止めず黙々と料理し続ける。

職務精神旺盛な事だ。

「……奴隷、ね」

俺は野次馬根性丸出しで声がした方に目を向ける。

そこには、いかにも盗賊と言った風情の男が、あちこち土で汚れてしまった少女を引つ張っていた。少女の首には鎖。

その様子を、天下の往来だと言うのに誰も気にせず、通り過ぎて行く。

「都会は怖いね……。さすが魔都市東京」

一瞥もくれず通り過ぎて行く人や、ちらちらと見るが見るだけの人。

集団心理とは恐ろしい物だ。

誰かが助ける、そう思って誰も何もしないのが、都会というものだ。

最も、助ける事の出来ない人間が出しゃばっても何も生み出さないというのもある。

この件に関しては、後者のようだが。

「はいよ、兄ちゃん。いつもありがとうね。サービスしといたよ」

「おっ、ありがとうございます。これからも贖にしますよ」

「ははっ、台詞を取られちゃったね。でも言わせてもらっよ。??
今後とも御贖に」

営業スマイルのおばちゃん。その笑顔、全く見蕩れない。

俺は笹の葉で包まれたおにぎりを受け取り、それを懐に入れる。
しかし、おにぎりを一つサービスしてもらっても困……らないか。

「さてと……」

俺はおばちゃんの店から離れ、未だに騒いでいる奴隷商人（とその奴隷）の元へと脚を向けた。

近づきその二人をまじまじと見てみる。

商人の方は、恐らく儲かると踏んで盗賊から奴隷商人になったのだろう。気品の香りもしない野郎だった。というか、なんか見た事ある。

奴隷の方は、十四、五歳の少女で、恐らくどっかの村娘さんだろう。綺麗な短めの金髪で、幼さが残っている顔立ち。どこことなく臭さが滲んで見え、とてもじゃないがお屋敷暮らしには見えなかった。

「いいか、お前は奴隷だ！ 貴重な商品に手を上げたくはないが、これ以上騒ぐなら？？あ？ なんだお前」

と、あまりにもジロジロ見ていたため、商人が俺に気がつき、睨みを利かせて来た。

まあ、そうなる事を狙ったんだが。

「おいおい商人さん。客に向かってその口ぶりは無いんじゃないですか？」

「きゃ、客！？ 兄ちゃん、この奴隷を買って？ って、あの時

の兄ちゃん!？」

「そうですが、何か問題でも有りますか？」

二つの意味で返事をし、俺は軽く笑みを浮かべる。

「……………」

啞然とする商人と、どことなく睨むように俺を見る少女。

どうやら、先ほどジロジロ見ていた所為で、俺が何のために自分を
買うのか想像でもしたのだろう。奴隷となった時点で、遅かれ早
かれそうなる運命だと言うのに。

睨まなくても良いじゃないか……。

「い、いやいや、滅相もない。ただ……その、少々五月蠅い娘だが
？」

「結構。そちらの方が好都合です」

「あつ、なるほど。……なかなか粋な趣味で」

何かなるほどのなのか俺には解らなかったが、とりあえず、少女
の俺を見る視線が俺の心に突き刺さり、痛くなつて来ていた。

日本人は精神攻撃に弱いんだよ……。

「ええ。値段の方は、これくらいで……」

俺はそつと商人の手に金貨を押し付ける。地竜の部位を売り払つ
た時にもらったお金だ。

この世界では、金貨と銀貨と銅貨があるらしく、銀貨一枚でいたい日本円で一万円。

銀貨二百枚で金貨一枚。と言う事は、この奴隷のお値段は???二百万円。

けど、人一人の命が二百万円とは、安いものだ。

「……っ！ 兄ちゃん、こりゃちよつと……」

「後日そちらの方へまた伺いますんで、その時に安くお願いしますですよ?」

「くくく、兄ちゃん。なかなかやり手だな……」

「いえいえ、それほどでも。では、頂いてもよろしいかな?」

「ご自由にお召し上がりください」

商人は俺に鍵を渡し、顔をニヤ付かせながら街へと歩いて行った。ちなみに、今のほとんどの会話が小声でやり取りされ、さすが魔都市東京、ほとんどの人が見向きもなかった。

「さて、お嬢ちゃん」

俺は男にもらった鍵を手で弄びながら、恨めしそうに俺を睨んでいる少女を見る。

あまり人目に付きたくないのでもはや手遅れだが、なるべく騒がないで付いて来てほしい物だ。

俺は少女の鎖を左手で握り、右手で少女の肩を掴んで、商人の歩いて行った方向とは逆、つまり少女が引っ張られて来た方へと歩き出した。

すんなりと少女は脚を前に出してくれた。

「……どうするつもりですか？」

少女が睨むように俺の顔を見て尋ね、俺は答える。

「ご想像にお任せしよう」

少女が家畜でも見るような目で俺を見たのは、一生俺の記憶から離れないだろう。

「さて、ここらで良いかな？」

「!？」

街の門をくぐり抜け、鬱蒼と木々が生い茂った森の中へ少女を連れ込み、俺は不意に立ち止まった。鍵で少女の鎖を解く。

「さて、これで誰にかに見られる事も無い」

俺のその台詞にビクツと少女の体が震え、そして??。

「ごめんなさい!　どうか、見逃してください!」

と、少女は土下座した。

おお、日本の文化、ド・ゲ・ザ!

まさかこんなところで見られるとは、それも少女??じゃないな。何言ってるんだ、俺。

「とりあえず顔を上げてくれ。というと、君にはこの先、生きて行く当てが有ると?」

「そ、それは……えっと」

目を逸らし、考え込む少女。はい、無いんですね。解ります。

「残念だけど、それじゃあ俺は君を連れて帰るよ」

「じゃ、……じゃあ?」

勿論、生きて行く当てが有るようなら、自由にしようと思っていた。

しかし無いのなら、それは見捨てる事と同義だ。

少女の体が再び竦み上がり、体を縮こまらせる。

「といっても、別に慰み物にしようとは思わないけど」

「……え?」

何をそんなに驚いているのかね? なんだい、俺はそんなに女に飢えているように見えたのか? やべっ、泣きたくなくて来た。

この前の姫様といい、この子といい、この異世界はどうなっているんだ。

「別にそういう理由で君を買った訳じゃないんだ。だから、ある程度信頼してほしい」

「嘘っ! じゃあ、どうしてこんな所に連れ込むんですか!」

「え？ 何？ 期待してたの？」

「ちっ、違います！」

「いや、だって俺が嘘付く理由なんて無いじゃん。それなのに嘘だなんて断定するなんて……」

「わ、わ、解りました！ 信じますから！」

「よろしい」

はあー、と少女は大きな溜息を付く。

「では、昼飯にしよう」

俺は懐からおにぎりを取り出し、一つ差し出した。
全部はやらん、半分だ。

「……え？」

「いや、だから昼飯だ」

「……………え？」

「なんだよ、要らないのか？」

「いえっ！ 要ります要ります！ ？？げほごほ」

少女は慌てておにぎりにかぶりつき、むせ返った。

第一話 異世界の諸事情（後書き）

感想お待ちしております

第二話 奴隷の少女

「さてと、とりあえず服は後日また買いに行くとして、とりあえず今日は家に帰ろう」

「……家？ えっと、どこに？ なんて街から出たんですか？」

「そりゃ、俺の家が森の中にあるから」

「も、森！？ この森って、あの魔女が住んでるって有名な……」

少女は顔を強張らせ、青い顔になる。

ただでさえ栄養失調でやせこけていると言いつのに、その所為で絶望に染まった顔になった。

「そうなの？ 少なくとも、俺はそんな人見た事無いけど」

「危険です！ 金貨が有るんですしたら、街に家を買いましょう！ 普通の家ならすぐ買えますから！」

「えー、だって街なら目立つだろ？ 俺は恥ずかしい」

「自分の命とどっちが大事なんですか！？」

「……多分その『自分の命』って、君の命だよな。大丈夫、魔女なんか怖くない」

実際に魔女に合った事は無いが、せいぜいウサギにされるだけだろつ。

そして俺みたいな奴に喰われるのだ。

「魔女じゃなくても、凶暴な地竜が住み着いてます!」

「それなら倒したから問題ない。そのお金で君を買ったんだし」

「ふえっ?」

あまりの驚きで、変な声を上げる少女。顔もぼかんとしている。そういえば、地竜の部位を売った店でも、こんな顔された。そうそう、珍獣でも見るような目だ。

……泣いて良いかな。

「ああ、君。もしかして俺の事舐めてる? なら見せてやろう、俺の魔法の凄さを!」

「えっ、いや別にそんな??」

「ほい」

俺が人差し指を空に上げると、景色が歪むのは同時だった。

「え?」

「はい到着」

少女は驚いたようだ。

それもそのはず、俺がやったのはル　ラみたいな魔法。

もしかすると、この異世界には一瞬で移動する魔法が無いのだからか？

魔法はイメージ、その発想が無ければ確かに使える物ではない。

「……これは？」

そう言っただけ少女が指差すのは、俺の家。

現代にあるような、普通の二階建ての一般住宅。

エアガンや今着ている制服、それは俺の力、『世渡り』で持ってきた物だが、さすがにこの家は無理だ。

そこで『創造魔法』と『世渡り』の応用である。

まず、『世渡り』で自分の家の間取りの書いた本を持って帰ってくる。

あとは材料を集め、『創造魔法』で創れば良いのだ。

この『創造魔法』、ある種面倒な物である。

最初、家を『創造魔法』だけで作り上げようと思ったのだが、どうにも上手くいかなかった。というのも、ゼロから一を生み出した場合、ちよつとでも気を抜くと霧散してしまうのだ。

そのため、今この家にソファなどの家具は一切無い。

形だけでも良い所である。

電気は無いし、水道も通っていないければ、ベッドも無い。

材料は木と釘、それに壁紙だ。釘と壁紙しか持って来れなかったのだ。

この『世渡り』も全能ではなく、俺が持ち上げている物しか持つ

て来れない。重い物は持って来れないと言う事だ。

おまけに、一日に一回の制約付きだ。

本日は味噌と醤油、それに砂糖と胡椒、コンソメを持ち込んでい
る。

だって、昨日街を見に行ったら、塩しか無かったんだ。
味気ない料理は、かなり苦手なのだ。

「……あなたは、何者なんですか？」

「遠い国から来た旅人、かな」

訝しむ少女を押すように、俺は家に入る。
まだワックスを塗っていないので、床はざらざらしている。

「とりあえず、お風呂に入ってもおう」

「オ、フロ？」

「お風呂。温湯浴みて言うのかな？ あれ、温泉無いの？ そんな習慣無い？」

「いえ、ありますけど……。魔物がたくさん住む山奥にしか温泉は
ありませんし、湯浴みは貴族みたいな上流階級の方しか……。あな
たは、貴族なんですか？ こんな立派な家に住まれていますし」

「いやいや、自分の国では普通だと思ってた。マジか……」

やばい、早速カルチャーショック。

日本と同じ形の土地だから、同じくお風呂くらい有ると思ったの

に……。

まだ大衆化してないだけだ、きっと。

いっそ、温泉でも掘って経営するか。同じ日本で育ったのだ、きっとこの気持ちよさはまる。そして俺は儲かる！

うん、しばらくそれで軍資金を溜める事にしよう。

「そっか、ありがとう……えっと、名前は？」

「私……ですか？ ……リース、です」

「そっか、よろしくリース」

「……………何なんですか、あなた？」

リースは呆れたように俺を見つめる。

「普通、奴隷にはあんな豪華な食事なんて与えませんし、自由にもしません。どうしてなんですか？」

おにぎりが豪華な食事？ ……ふざけるなよ。

「それは俺の台詞だな。お前等、人の命をなんだと思ってる？」

「私は……奴隷です。人ではありません」

リースは俯き、認めたくないが奴隷だと認めようとする。
俺はリースの額にデコピン。

「はっつ」

「アホ。一体何がどう他の人と違うつて言っただ？ だいたい、さつきは見逃せとか行ったくせに、何を言ってるんだか。結局、お前は どうしたいんだよ」

「……………」

と、リースは泣きそうな顔で俺を見上げてくる。

「俺に意見を求めるな。お前の自由だ。返答次第で殺したりはしないから、言ってみろ」

「…………… ひく、ひく」

と、リースの水色の瞳に雫が浮かび上がり、何故か泣き始めてしまう。

やばい、俺なんかまずいことした？

「え…………、ど、どうした？」

「ひつく、だつ、て、初めて…………、だから…………。人…………、として、扱ってもらうのが。…………皆、物みたいに…………売られちゃって…………」

「…………… そっか」

俺はしゃがみ込んで、リースを抱きしめ頭を撫でてあげる。

「もう大丈夫。俺はそんな事はしないから。怖かったんだろ？ 我慢してたんだな、偉い偉い。好きなだけ泣いて良いから」

「うわあああああ」

きゅっとリースを抱きしめ、俺は思い付く。

この世界で初めてやる俺の征服だ。

リースは泣き止むと、疲れていたのかすぐに寝てしまった。

先日買って来ていた毛布をかけてやり、俺は外に出る。

「本当は、自由に生きてほしいんだけど……、これはな。独り立ち出来るまで、俺が責任持ちますか」

さて、征服開始だ。

なんとなく、ロリコンと言われても弁解出来ない気がして来た。

第二話 奴隸の少女（後書き）

感想・指摘お待ちしております。

第三話 温泉

温泉。

それが気持ちいいのは、日本人なら誰でも解るだろう。そして、

「ふああああ」

と気持ち良さそうに声を漏らしているリースがいた。やはり、お風呂は気持ちいい物だ。

場所は俺の家。

リースにはお風呂の入り方を説明してある。シャンプーの使い方やシャワーの説明が面倒だったが、リースは賢くすぐに理解してくれた。

風呂はこの世界に存在していないため、持ち込んでいる。風呂を持って来るとき、その重さで死にかけたのは良き思い出。風呂だけでは我慢出来ず、その中にシャンプーとかシャワー、タオルやバスケットを入れた所為だろう。

そこまでして持って来る価値はあったと思っている。俺は木の香りが立ちこめるリビングで考え込む。

さて、温泉を経営しようと思ったが、どうしたものだろう。

最初から湧き出ている物を使うのが簡単で手間もかからないが、それだと魔物が近くににいるらしい。

魔物がいるのは、恐らく魔物も温泉の効能を受けるからだろう。地竜を倒せるから多分どんな魔物でも倒せると踏んでいるのだが、それはあまりにも野蛮だ。

そんな事をすれば生態系も狂うだろう。

地竜の代わりに俺がこの森に居るからここは問題無いが、他の場所ですぐ下手な事をすれば収拾がつかなくなってしまう。

ただの公衆浴場を創るといのが簡単だ。

誰でも来られるような場所なら確かに儲かるだろうが、しかしそれでは問題がある。

俺が従業員に使うとしてるのが、奴隷だと言う事だ。

誰でも来られるようにすれば、当然、奴隷に反感を感じる輩も来るだろう。

それにいちいち対応するのは面倒だ。

どうしたものだろう。

「すごく気持ちよかったです!」

と、タオルで頭を擦ってリースが風呂場から現れた。

汚れが落ち、見違えるようだ。

これで正装していたら、普通に貴族の令嬢に見られるだろう。

「うん、良かった良かった」

「しゃんぷーとか言うのも、良い匂いでしたし、しゃわーというのも、気持ちよかったです。……本当、あなた様は何者ですか?」

「あー、様付けは止めてくれ」

「では、なんとお呼びしましょう」

はて、俺は一体なんと名乗った物だろうか。

とりあえず、リースとは長い付き合いになりそうだから、教えておくか。

「……えっと、俺の名前は無いんだ」

「ナイン、ですか？ ナイン……変わった名前ですね」

あれ？ なんかものすごく勘違いしてない？
ちゃんとした日本語の名前もあるのに。存在消されているから微妙だけど。

……あゝ、もういいやそれで。

「な、……ナイン？」

「……ん。よろしく、リース」

そう言って頭を撫でてやると、照れくさそうに頬を染めるリース。
………うわあ、可愛いな。

いや、俺はロリコンじゃないから。

「さて、どうした物かな」

「どうしたのですか？」

「ん？ いや、お風呂、気持ちよかったんだろ？ それなら、それで商売しようかと思ってさ」

「なるほど……。でも、どうやってですか？」

俺は自分の国………というか現代の日本の浴場を説明する。

リースは興味深そうにそれに聞き入り、話の途中から目を輝かせていた。

「ナインの住んでいた所は、すばらしい所ですね！ 皆普通にこういうお風呂に入っているのですか……」

「そう。けど、ここには公衆浴場みたいな文化が無いのか……。受け入れられないか」

「いえ、それは大丈夫だと思いますよ」

「ん？」

「浴場は有りませんが、河で沐浴をしますから」

「あ、そうか」

そう言えば、沐浴があるのか。

その延長線上だと思ってくれば良い訳で、恥ずかしければ来なければ良いのだ。

「でも、どうやってそんな建物を……」

「それなら問題ないんだな。ナインだけに」

「……………ぷっ」

リースが笑い、俺は立ち上がる。

「どうしたんですか？」

「いや、晩ご飯を作ろうかと思ってね」

そう言つて俺はキッチンへ向かい、鍋を取ってくる。

無洗米と各種サイズの鍋、フライパンを持ち込んだのはここに来てから二日目。ウサギ事件の後日だ。

腹が減つては戦が出来ないのだ。

今では幾分かウサギの干し肉、街で買つて来た野菜が多少ある。適当に味噌を入れて煮込めば、鍋になるだろう。

さすがにキッチンは現在風では無理があると思い、江戸時代のものに変えてみた。

『創造魔法』で電気を創る事は創れたが、電気のアンペアやボルトの関係で、電子機器は動かすのが無理だった。

かまどに囲炉裏、それと流し。

ちなみに、水道は無いが……。

「わたし、水と火の魔法なら使えますよ」

「あ、じゃあ鍋に半分くらい水入れておいて」

魔法は便利だった。

空気中の酸素と水素、この世界では水のマナらしいが、それらが結合して水が出来上がるらしく、これは消えてなくなりはいない。

『創造魔法』は全ての魔法の基本であり、当然水も創り出せた。

しかし俺の『創造魔法』、どうやら食物に関しては生み出せても無意味のようなのだ。

来た当初、プリン（俺の好物だからだが）を創つて食べたのだが、食べた感じはしなかった。

どうやら、俺の体内に入った瞬間、霧散したらしい。

食べ物もゼロから創り出せれば、元手無しで異世界の料理を出す
定食屋も出来ただろう。

逆に、食材があれば、それも出来るか……。

温泉に料理。旅館でも経営するか。

「美味しいです！ 生まれて初めてこんな料理食べました！」

「そりゃ良かった。たんと召し上げれ」

「はい！」

という感じに、味噌煮込み鍋がその日の晩ご飯だった。

ちなみに、どうやら味噌はこの世界にあるらしいが、奴隷は芋が
主食で食べた事は無かったようだ。

「すーすー」

リースは食べ終わるとすぐに寝息を立てて寝てしまった。
慣れない事ばかりで疲れたのだろう。

俺は街で買って来た毛布を掛けて、家の外へ出る。

夜のこの世界は明かりが少なく、空には綺麗に星と月が見え、平
行世界だなあと再び思った。

「さて、問題は土地……かな。あまり目立たず軍資金を溜めたいし
……」

科学と魔法、とりあえずその両方を知りたいのだ。あまり魔法サ
イドに依存したくない。

土地……ああ、心当たりがあるじゃないか。

「あつ、あんたは、あの時の！」

「久し振りですね、盗賊さん達」

俺は盗賊さん達と再び相見えていた。

懲りずに街道で盗賊行為に精を出していた盗賊さん達は、暗かったからか解らず俺に金品を要求、今現在その顔は引きつっている。多分、俺のようなチートが相手でなければ、かなり強い部類なのだろう。

上等そうなレザープレートで身を包んでいる。

街のすぐ側で追いはぎをやると言う事は、そういう事ではないだろうか。

「ど、どうしたんです？ 奴隷の方は街で……」

「いやいや、そうじゃないんだ。一つ交渉をしようと思ってな」

「こ、交渉？」

前回吹っ飛ばしたのがリーダーだったらしく、リーダーを先頭に盗賊達は街道に正座している。

そこまで怯えなくても良かろうに。

まあ、その方が話を進めやすいのだが。

「この前、俺が連れていた女の子が居ただろ？ あれ、実は王女様

なんだよね」

「お、王女!？」

盗賊さん達の顔がさーっと青ざめる。

どうやら彼らでも王家に手を出そうとは思わないらしい。

『やべえよ、地の果てまで追いかけて殺される……』などと
呟いている所を見ると、王家の力は絶対のようだ。

そして、この盗賊達はどうか賢そうである。

まあ、俺の一撃で敵わないと悟り手のひら返しをする辺り、そう
だとは思っていたが。

別に親近感が湧いた訳じゃないんだからね、ナインだけに。

「さて、このままでは君達は捕まるだろう。知らずとはいえ、王家
に手を出したんだから」

「????!」

盗賊さん達の顔は、もう青くならない。代わりに、体が震え出す
と言つ症状が見られるようになった。

「そこで、俺から一つ提案が有るんだ」

「そ、それは俺達を助けてくれると!？」

「それは君たちの誠意によるね。もし協力してくれるのだったら、
それなりの報酬も出すし、君達を助けられるだろう」

「ほ、本当か!？」

盗賊達の顔がぱつと輝く。面白い奴らだ。

「ああ。……実はな、俺はこの街道で商売を始めたんだ」

「しょ、商売？　というと、おいは？？」

「バカか。……そう言えばお前等、なんで盗賊なんてやってるんだ？」

「そりゃ、俺達は学がねえ。真っ当に働いて暮らして行けねえから……」

「と言う事は、真っ当に働ければ盗賊家業からは足を洗う、ってことか？」

「当たり前でさあ！　そりゃ、あの時はあんまりにも美人だったもので、獣になっちまりましたが……。でも！　俺達だって好きでこんな事をしてはいねえ！　奴隷だって、他の商人達に比べればかなり優しく扱ってまさあ！」

「……………」

やばい。なんか良い奴だ。

これで裏切られたら笑い者だが、その時は笑えば良い。俺も笑うしか無いだろう。

そして報復するので問題ない。

「いいだろう。俺はお前等を助けるのに手を尽くそう」

「本当ですか、兄貴!？」

兄貴? どういう事だろう。

強いからと言う理由だけで慕うのだろうか。

「当たり前だ。……お前等、今の言葉は本当だろうか?」

「「「あたぼうよ!」「」」

「嘘をつけば、どうなるか解るよな?」

「「「吹っ飛ばされるんですね!」「」」

「時に、俺は奴隷を差別しないんだが、どう思う?」

「「「さすが兄貴! 見習わせていただきます!」「」」

「俺はお前達を奴隷扱いしない。だからお前達もこれからは、奴隷の待遇を良くしろと言ったら?」

「「「勿論、今すぐにでも奴隷を解放します! 一生付いて行きます、兄貴!」「」」

やばい……、本当に面白い奴らだ。

兄貴と呼ばれるような事をした覚えは無いが、仁義と言う物だろうか?

付いて来てくれるのならば、俺も出来るだけ優遇しよう。

俺の世界征服は、どつやら底辺の地位から始める事になりそうだ。

第三話 温泉（後書き）

異世界ものの醍醐味、お風呂に焦点をおいてみました。
盗賊がなんか凄い事になってますが、どうしてこうなったのか解り
ません。

第四話 魔法少女の調査（前）

一体どうしてアタシがこんな事をしなければならなかったのだろっ。

「はあ……」

「なあに、俺様が付いてんだ。怖がるなよ、リン」

うざったい声だ。ツンツンと尖った金髪、生理的にムカつく顔立ち。

荘厳な鎧に身を包んだいけ好かない男、それが近衛隊長、キースに対するアタシの感想。

アンタと一緒に居る事でアタシは気落ちしているのだと気付け。

「なんでキースが出張って来んの？ 近衛隊長でしょ？ 姫様の護衛をしる」

ジト目で睨んでいるのに、どこ吹く風といったキース。

「解ってんだろ？ 街道には『ルーアン盗賊団』が居を構えてんだ。おまけに場所は『チヨダの森』の入り口だろ。並の魔法じゃ無効化される、あの地竜だって住んでんだ」

「……正確には、全部過去形でしょ。自慢げに見せつけやがって。キースはただその剣の試し切りがしたいだけでしょ？」

ミスリル鉱石すらも貫くと言われる地竜の牙で創られた剣、簡単な魔法なら霧散させる竜の鱗で創られた盾を、キースはそれと無く

見せびらかす。

場所は街の外、街道上。

アタシは、とある仕事でこの道の先にある、とある建物に向かっていた。

王国魔法騎士のアタシに与えられた仕事は、最近起こった異変の調査だ。

事の発端は、レーンが魔女に協力を要請しに一人で森に行った事。レーンの実力から考えれば、それは対して危険な事ではないのだけど、問題は帰って来たレーンの話していた事と、それからこの王都トウキョウで起こった異変だ。

見た事も無い護身用の武器。

それから放たれた圧縮されたマナが『ルーアン盗賊団』のリーダー、通称『絶壁のグレン』を軽く吹き飛ばした事。

それを軽く操る、森に住む木こりだと言う黒髪の少年。

レーンの言葉でなければ、まるで信用出来ない話だ。

実際、魔女に錯乱の魔法でも掛けられたのかとも思ったが、そのような痕跡は見当たらなかった（代わりに凶悪な呪いの片鱗を見たが、それについては話してくれなかった）。

『ルーアン盗賊団』は王家が本気を出さなければ討伐出来ないよな、かなり名の知れた盗賊団だ。

その手口は残忍でもないし、他の盗賊団に比べれば優しい。

そして、決して王家に実害を出そうとは思わないのだ。要するに、ずる賢い。

おまけにそのリーダー『絶壁のグレン』は、近衛隊長のキースと肩を並べる程の腕だ。並の傭兵では手も出せない。

今現在戦争になろうとしてるこの国では、対処に困る盗賊団だった。

……それが木こりに負ける、ねえ。

その木こりの少年に話を聞けば良いのだろうが、特徴の無い顔立ちだと言う。

黒髪など、決して多くはないが少なくもない。

おまけに名前は無いんだとか。意味が分からない。

その時点では、その事に対してレーンも深く追求はしなかった。

『ルーアン盗賊団』にしても、今回の事件ではレーンに害はなかったから見逃されたが、もし有ったとすれば国の歴史を変えるような事件になっていただろう。滅亡の歴史の発端に。

『チヨダの森』に住む木こりの少年の事など、その付属品にか過ぎなかった。

だが恐らく、レーンは心の片隅には止めていたのだろう。

お礼をしたいとかで。

助けてもらった話は、騎士の中では一番仲がいいアタシにだけ教えてくれた事だ。

レーンの実力は、この国でもトップクラス。それでも『ルーアン盗賊団』を一人で相手取るには厳しい所だろう。

助けてもらった事を自身のプライドが許さず、アタシにしか打ち明けられなかったのだ。

深窓の令嬢みたいな見た目と裏腹に、結構好戦的な性格なのはあまり知られていない。

それから一週間後、アタシに最近起こった異変の調査という仕事
が与えられた。

ここ最近、街でおかしな噂というか話が蔓延していたのだ。
そして、アタシは知る事となった。

調査の対象となったのは、レーンが森から戻ってきて数日経った
頃に城下町で起こった事件。

『チヨダの森』に住む地竜、それで創られた武器や防具が何十も
出回り始めたのだ。

今アタシの隣に居るこのバカも、ちゃっかり手にしているソレだ。

地竜は、魔法を無効化する鱗で身を包み、ミスリル鉱石を貫く牙
を持つ、王家でも下手に手を出せないような魔物だ。

その鱗や牙は、単品で一生遊んで暮らせるレベルの高値で取引さ
れ、命知らずの戦士がそれを狙って挑戦したと言う話は何度か聞く
が、その戦士の消息を知る者は誰もいなかった。

おまけにそれを武器に加工する事は並の鍛冶屋では不可能で、熟
練された魔法使いが一緒になければできないと言う。

で、その地竜の武器や防具が何十も出回ると言う事は、それは地
竜が倒されたと言う事だ。

一体誰が？ という話になる。

そして聞き込みの結果、それらを売り払ったのは黒髪の少年だっ
たと言う。

どこの店主に聞いても、皆口を揃えて、特徴の無い少年だった、
と言った。

特徴が無い事が逆に特徴になっていた。

さらに同時期に、もう一つ街で異変が起こっていた。

『ルーアン盗賊団』が足を洗い、奴隷市場を乗っ取り、そのまま雲隠れしたと言う話だ。

まったく意味が分からなかった。

王女様に手を出したと気付き雲隠れしたと言う事は推測が付くが、何故奴隷市場を乗っ取ったのがさっぱり解らない。

おまけに、この街から引き払う時にやたらと丁寧に扱っていたのか。

迷宮入りの謎だ。

が、それも思わぬ所で繋がった。

街の大通りに面する定食屋のおばちゃんが、その事件の前日に、黒髪の田舎から出て来た少年が奴隷を買っていたと言う証言をした。また黒髪か……と思った。

そしてさらに、『三十人分のご飯を毎日用意してくれないか？』と頼まれたと言う。

それまで一人分の食事しか頼まなかった少年に、不思議に思いおばちゃんが尋ねると、『ちよつと仲間が増えたんでね』と答えたと言う。

「それであたしやピンと来たんだ！　きつとあの子が裏で『ルーアン盗賊団』を懲らしめたんだよ！　そして奴隷を皆引き取ったんだ！」

と言うのがおばちゃんの推理。

時系列的にそれはあり得ない話ではなかったが、しかし同時に恐ろしい事件だとも思った。

近衛隊長クラスを軽く吹っ飛ばす『護身用の武器』。

地竜の武器を売り払って得た、何十人もが一生遊んで暮らせるレベルの大金。

消えたたぐさんの奴隷。

これらを結びつけ、導き出された答えは??。

一人一人が近衛隊長を凌駕する、最強最悪の武力集団。

『護身用の武器』。

それすなわち、一般人でも簡単に武装できるという事。

そして、『護身用』でしかなく、決して兵器ではないと言う事。

兵器と呼ばれる物になれば、近衛隊長だろうと簡単に殺されるだろう。

地竜の部位を売り払い、それを生み出す資金が手に入っている。

地竜の牙や鱗などを売り払った事から、それを凌駕する、恐るべき兵器を生み出せるのだろう。

そして、引き取られた奴隷。

奴隷と一般人の違いなど、生まれた時の身分以外に何も無い。

むしろ、過酷な経験をしているだけ、奴隷の方が肉体的にも精神的にも強いだろう。

たったの一週間で、最悪の武力集団が出来上がった。

そして、近衛隊長、いや、地竜すらも倒す黒髪の少年。

正直、『絶壁のグレン』を一撃、それも軽く吹っ飛ばしたこの少年は、国の脅威だ。

もしもアタシの予想通りなら、この国は少年の手のひらの上だ。

そして、最後の異変。

この調査を始めてから出来たと言う、街道沿いにある『公衆浴場』なる場所。

そこに毎日のように通い詰める人々。

なんでも、温かいお湯で身を清める場所らしく、とても気持ちいいとか。

噂では、疲れや傷を癒してくれるらしく、そして格安らしい。

場所が街道沿いで『チヨダの森』付近のため危険だと思われたが、『ルーアン盗賊団』が足を洗った今、その脅威は無い。

別の盗賊団が街道に居を構えようとしたらしいが、『ルーアン盗賊団』が何故か追い払ったらしい。

その『公衆浴場』なる所の主が、黒髪の少年だと言う。

そして、その噂を聞きつけたレーンが、興味を示したのだ。

行ってみたい、と。

最悪だ。

一度でもその『公衆浴場』に行った者は、その虜となり毎日ではなくても二、三日に一回は通うと言う。

恐ろしいくらいの依存性だ。

もしもレーンがその『公衆浴場』なるものの虜にでもなってしまうえば、その少年はこの国を制圧した事になるだろう。

表で市民を味方につけ、裏では強力な奴隷??もとい兵士で脅しを掛けるのだ。

この問題は、ラザウェル王国存続の危機だ。

だからアタシは、姫様の安全確認と言う名目の下、その『公衆浴場』の視察へと向かったのだ。

その少年の意図を聞き出し、もしも国に害を出すような人物であったなら、抹殺するためだ。

その少年の実力は知らないが、無詠唱魔法に関しては国一番、失敗するとは思えない。

これは命令ではなく、アタシの独断だ。

だから、本当なら一人で行きたかったんだけど。

「なんでキースが付いて来るの? もう『ルーアン盗賊団』はいないのよ?」

「女の子を一人で外に出せるかよ」

「試し切りしたいだけでしょ?」

「それもある。……けど、気付いてないと思ったのか?」

「な、何よ?」

キッと睨むようにキースはアタシを見る。

やばい、こいつが真面目な顔をする時は、ほんとに真面目な時だ
けだ。

「今日一般人の街の出入りが禁止になってる。お前、噂の『公衆浴
場』に仕事で行くんだろ？ 一般人の規制をしてるところを見ると、
調査つてとこか？ 俺も興味が有るんで付いて行かせてもらおう。
他言無用で頼む」

大きな溜息を吐き、アタシは頂垂れた。

まあ、頼りになるかどうかと言えば、なるのがム力つく。

いざとなった時は、その剣を振るってもらう事になるかもしれな
い。

もし失敗すれば、これもまた国の滅亡の一步になるかもしれない
けど……。

その時アタシは、まだ知らなかったのだ。
その少年の考えていることが。

第四話 魔法少女の調査（前）（後書き）

ストーリー展開が遅いかもかもしれません。

進める時は一気に進ませてしまう予定なので、ご了承ください。

感想・意見・指摘など、お待ちしております。

第五話 魔法少女の調査（中）（前書き）

一人称では有りません。

思っ所が有り、三人称とさせて頂きました。

第五話 魔法少女の調査（中）

二人は呆然と立ち尽くしていた。

「……リン。俺は二週間前ここを通ったんだが、その時にはこんな建物無かったぞ。俺様、夢でも見てるのかな」

「残念。幻術系の魔法じゃないわよ。正真正銘、確かに本物よ」

二人の目の前に有るのは、豪邸と呼べそうな大きな建物だ。その右手に、騎士団の兵舎と並ぶ大きさの建物がついでの用に付けられていた。

どこの貴族の家だよ、とキースが呟き、リンは小さく震えた。

（何よコレ、規格外も良い所じゃない！　こんなのを二週間経たずに建てるの！？　この異常な早さは魔法だけど……あり得ない。少なくとも、アタシには無理よ……）

扉は両開きで、ノッカーは付いていない。

「……入るか？」

「当たり前でしょ」

怖じ気づいたように聞き返すキースにリンは鋭く返し、扉を開けた。

「「「いらっしやいます」」」

「……………」

入った瞬間、六名もの従業員らしき人達に声を掛けられ、頭を下げられた。

床には薄めの絨毯が敷き詰められ、ホールのような場所が入ってすぐ目に入る。奥行きがかなりあり、建物の天井には光の魔石があり、夜でも昼と変わらない明るさを保つようにされていた。

中央にはゆつたりとした椅子が複数あり、そこで何人かの先客が寛いでいた。

トウキョウの町人の出入りは禁止したが、他の街からここに来る人はどうしようもないのだ。

(……凄く金がかかってる。光の魔石は高い割に長持ちしないし、あの椅子も上等な布を使つてて高そう)

「二名様でしょうか？」

と、その内の一人、短い緑色の髪の少女が二人に尋ねる。

少女の格好は全体的に短めの服で、太腿が艶かしく露出していた。

「ええ、そうよ」

後ろで何故か帰ろうとしているキースの腕を掴み、リンはなるべく気丈にそう返した。

「当浴場は寛ぎの場ですので、武器等の持ち込みは禁止となります。その受付にお預けになってください。また、土足では上が

れませんので、あちらで靴をスリッパに履き替えてください」

そう言っ て左手にある受付を指差す少女。

受付は武器と靴を受け取るため広く、場所をかなり占有していた。

「武器を取り上げるのか!？」

せっかく手に入れた地竜の武器を取られると聞き、キースは顔をしかめる。

「いえ、お預かりするだけです。お帰りの際にお返しします」

「すりっぱ、って?」

リンは聞き慣れない単語に、首を傾げる。

「コレです」

そう言っ て少女が持つて来たのは、踵と靴ひもの無い、靴のようなもの。皮革でできているようだった。

「……どうすんだよ。武器取り上げられちまうぞ」

キースが少女に聞こえないように小声で尋ね、リンは諦めなさいと肩をすくめ、自身の杖を預けた。

「お前は魔法使いだからいいだろうけど、俺は戦士なんだよ……。剣は俺の魂だ」

とぶつくさ文句を言っ ていたキースだが、素直に受付に剣と盾を渡した。

キースが鎧と靴を預けている間に、少女は説明を続けた。

「料金は六歳以下の方は無料、十五歳以下は銅貨二枚、大人の方は三枚となっています」

「良かったなリン、子供料き?? いった!! 足踏むなよ!」

「アタシは十六歳だ! バカにすんな!」

リンは顔を真っ赤にして、まだ履いていた靴でキースの足を踏みつけた。

「すみませんお客様。ここは寛ぎの場ですので、乱暴な行為はお止めください」

「あつ、ごめんなさい」

リンは謝りながら靴を預け、スリッパに履き替える。そして自分の分の料金を受付に渡す。

「この野郎」

キースも痛そうに足を引きずりながらスリッパを履き、料金を受付に置いた。

「では、当浴場の説明に移らせていただきます。まず、向かって左手が男湯で右手が女湯です。青の暖簾がある方が男性で、赤の暖簾が女性です。温泉の入り方は、ご存知でしょうか?」

「私は知らないわ」

「俺もだな」

そうですか、と少女は言い、近くにいた少年の従業員を呼ぶ。

「こちらの方に入浴の仕方を教えて」

といってキースに少年を付き添わせ、少女はリンを女湯の方へ促す。

と。

「ちょっと待つて。あそこに見える『医療室』って何？　もしかして……怪我とかするの？」

リンは少女を止め、ホールの左隅にある扉を指差す。

そこには『医療室』と書かれたプレートがあり、その下にでかかど。

『騎士の方お断り』

と書かれていた。

少女は笑みを浮かべて答える。

「いえ。のぼせてしまう方や、元々怪我をなさっている方が利用するだけです。基本的には沐浴と同じですので」

そういつて少女が暖簾を潜ってしまったため、リンは聞けなかった。

(……『騎士の方お断り』って、どういう事?)

リンが暖簾を潜り、その先にある扉を開けると、広い脱衣所があった。

壁際に棚、そこに何十個もの籠があり、その中に先客の者だろう衣服が入れてあった。

ホールであり他のお客様を見なかったのは、どうやら皆こちらにいたからだとリンは気付いた。

「こちらで服を脱いで、その服はこちらの籠に入れてください」

リンは少し驚きながら、それを悟られないように素直に服を脱いだ。

「服、盗まれないの?」

彼女の服は、反射の魔法が自然に発動するように縫い込まれた口ブで、かなり高価な物だった。おまけに、新たに創となると一月はかかる代物だ。

「はい。脱衣所の方にも従業員は居ますので、安心してください」

「……そう」

少女の言葉通り、入り口の方に二人の少女が居て、じっと見る訳ではないが、それとなく籠を見ていた。

自分の着替えをじろじろと見られるのは癪だが、それは仕方ないかと思うリン。

「では、こちらです」

そう言って少女は服を脱がず、奥にある扉を横にスライドした。

湯気が扉から溢れ出し、数秒後、広々とした空間がそこには広がっていた。

タイルが床一面に張られており湯水で濡れて光り、天井には光の魔石が鑲められている。

壁には富士山の絵が描かれ、風流を感じさせる。

「……………」

リンは無言になってしまっていた。

ただ、リンが無言になったのはそれらが理由ではない。

小さな池を思わせる、広々とした湯船がそこにはあり、マナが練り込まれた澄んだ温水がそこを満たしていた。

エメラルドグリーンの輝きを放つ水面が、怪しく誘うように揺れている。

「足下が滑りますので、ご注意ください。まずこちらで体を流してから入浴してください」

そう言って少女は湯船から離れ、壁際へと向かう。

湯船に釘付けになりながら、リンは少女の後追う。

壁際には膝下くらいの高さの台があり、その上に桶、そしてホースに白い物体があった。

台の前には椅子があり、そこで何かするのだとリンは気付いた。

「この石けんで泡を立てて体を洗って、シャワーで洗い流してください。よく洗い流さないと痒みが残る事も有りますので、その点は注意してください」

そう言つて四角くて白い物体を手に取り、手の間に挟んで擦り合わせる少女。

白い物体はみるみる白い泡を立たせ、ほのかに良い匂いがした。それを小さな穴がたくさんあるホース、そこから雨のように流れているお湯で洗い流す少女。

「この石けんは髪を洗うのにも使えますので、どうぞご自由にお使ください。ただ、水に付けておきますと溶けてしまいます。また、食べられませし目に入れると沁みます。あと、石けんの持ち出しは禁止です。何か質問は有りますか？」

「……………と、特に無いけど」

「では、じゅっくり」

少女は一礼して、ぱちゃぱちゃと足音を立てて出て行った。

「よし…………」

リンは石けんを使つてみた！

みるみる白い泡が立ち、泡が肌を滑らかに包み込んだ（その際白かった泡が薄い茶色になったのには目を逸らさずに居られなかった）。

茫然自失。

リンはシャワーを使ってみた！
優しい水の流れが泡を洗い流し、肌が綺麗になった（薄茶色の液体が流れて行く光景は、綺麗になったと言っ感じがした）。

リンは髪を洗ってみた！
泡が良く立たず、シャワーで洗い流すと濁っていた（基本的にこの世界では、洗髪は一ヶ月に一度程度だった）。

茫然自失。

リンはもう一度髪を洗った！
シャワーの水が白い泡を流し、髪がサラサラになった。

「……じゃあ、いよいよ」

髪に付いた水を犬のように頭を振って払い、リンは湯船の前に立った。

そろそろ足を入れてみると、熱くはないが決してぬるくもない
ちょうどいい温かさのお湯だった。

絹のように滑らかな水で、それは光の射し加減で宝石のよう輝く。
一気に肩まで湯に浸かり、そして??。

「!？」

リンはその異常な変化に気がついた。

リンは魔法使いの中でもマナの感知に秀でており、僅かな魔力の残滓をも見つける事ができる。

そのため、繊細な魔法（無詠唱魔法や治癒魔法）を得意としていた。

湯の中に入り、その湯水と直に触れる事でリンは気付いた。

（この水、マナを含んでる！？ 繊細に織り込まれたマナが水を滑らかにしてる。それが肌を通して体内に染み渡って来て、魔力が回復して行く。……何、この体に染み渡る心地いい温かさ）

みるみる頬が上気し、頬が緩んでしまうリン。

あまりの気持ちよさに体から力が抜けていくようで、湯船の端で頭を支えなければ沈んでしまいそうだった。

（……や……ば……い、気持ち……いい）

マナに敏感なリンに取って、この温泉は魔薬（魔法薬）のようなものだった。

第五話 魔法少女の調査（中）（後書き）

ごめんなさい。本当だったらこの話で一段落付くはずが……。
（後）に続きます。

第六話 近衛隊長は暇（前書き）

今回も三人称です。

そろそろ一人称に戻したい……。

今回はかなり短めです。

第六話 近衛隊長は暇

キースはホールにある椅子で伸びていた。

「噂の『公衆浴場』、まさかここまで気持ち良いもんだったとは……。なんでもっと早く来なかった、俺様。リンの調査結果次第では、潰されるかもしれないんだぞ」

火照った顔で極楽極楽と椅子で伸びているキースを、一体誰が王女様の近衛隊長だと解るだろう。

いや、一人は絶対にいるのだ。

「……しつかしリン。いくらなんでも遅過ぎるだろ。女性の化粧は長いからか？ 俺様をいつまで待たせたんだ。……って、俺は何様だ？ 勿論俺様さ。俺様何様騎士様だ」

一人で意味の分からない韻を踏むキース。

リンが遅いとホールを見渡して、二つ気になる点を見つけた。

入り口から見て左隅にある『医療室』と、右側にある『食堂』と書かれた暖簾だ。

『医療室』は医療室だろうが、その下にでかでかと書かれた『騎士の方お断り』が気になる所だった。

おまけに、先ほど町人風情の杖をついた男がそこに入っていたので、多少気になるのだ。

（騎士だから優遇される事はあっても、騎士だから利用出来ないってどういう事だ？）

とか考えたキースだったが、それよりも気になるのは、右から良い香りを放ってくる『食堂』の暖簾の奥だった。

（これは……あの宿舎みたいな所に繋がってんのか。リンもまだ来ないようだし、ちよつと寄ってくるか）

良い匂いに誘われて、キースは『食堂』へと向かった。

「……いらつしゃいませ」「」

暖簾を潜り、短い廊下を過ぎると、また数人の従業員らしき人達に礼をされた。

「えっと、ここは何？」

食堂は広く、軽く五十名くらいが一斉に食事ができるような広さがあった。

長テーブル二本、四人掛けのテーブルが五セット、二人がけの物がサンセットある。

今は数えられる程度の人数が長テーブルについて食事をしていた。

「基本的には私達従業員向けの食堂ですが、お金さえ払ってくだされば、品書きにある物なら何でも召し上がれます」

「へえ……。味の方はどう？」

礼をした従業員の少年にキースは尋ねてみた。

まあ普通に、美味しいですよ、とか言うだろうと思いがらも。しかし、キースの予想を裏切る解答が帰って来た。

「私は今まで、こんな料理は食べた事が有りませんでした!」

という少年に、他の数人も大きく頷く。

それが良い意味なのか悪い意味なのか解らなかったが、キースは面白そうだと思った。

「それなら、なんかお勧めの物は無いか?」

そう問われると少年達は顔を寄せて思案し、しばし迷った後、

「……プリン、でしょうか」

と答えた。

「ぷりん? それはどんな食べ物なんだ?」

キースには聞いた事の無い単語だった。

「えっと、甘くて、触感プルンとしていて、口当たりは滑らかでとろける……お菓子ですね」

「……見た事も聞いた事も無いな」

「ええ。私達も知りませんでした。ごしゅ??店長が、自分の国の有名なお菓子だと」

「……ほお。なら、それを一つもらおうかな。値段は?」

「銅貨二枚です」

「えらく安いな。ほら」

「確かに。少々お待ちください」

そう言つて少年は銅貨を受付に持つて行き、注文をする。
それを視界の片隅に置きながら、キースは二人掛けの椅子へと座つた。

「お待たせしました」

「え？ もう？ えらく早いな」

「ええ。作り置きですから」

そう言つて少年が恭しくさし出したお盆の皿の上に載っているのは、黄色い山の頂上に黒い雪が積もつたような、そんな見た目の食べ物だつた。

「……何、これ」

「プリンです」

少年はそれをテーブルに置き、恭しく礼をして去つていた。
お盆の上にはスプーンも乗せてあり、それで食べるのだとキースは解つたが……。

「プリン……ねえ」

キースは試しにスプーンでプリンを突つき、プルンと揺れるそれを見つめた。

突つくと、プルンプルン、プリンプリンと揺れる。
だからプリンなのか、とキースは理解した。

「……………」

そして、恐る恐る掬ってみて、それを口に運ぶ。

「!？」

途端、口の中で蕩けるプリン。

まろやかな甘さが口の中で広がる。

ほどよく冷たく、湯上がりのキースに丁度良い物だった。

「うまつ!？　なんだコレ！　美味いぞ！　…………ん？」

と、そこでキースは気付いた。

砂糖はかなりの高級品だと言う事に。

一キロだいたい銀貨一枚であるため、王都でも滅多に出回らない。
このプリンと言うお菓子、どう考えても砂糖は使っている。

それを、たった銅貨二枚で客に提供するなど……………この店主が死ぬ程安い。

これは、どういう事なんだろう？

リン程学の無いキースはよく解らなかった。

キースが首を傾げながらホールへ戻っても、まだリンの姿は見えなかった。

と、医療室から一人の男性が深く礼をしながら出て来て、それと入れ替わるように自分たちを出迎えた緑色の髪の少女が入り、しばらくして金髪の少女と一緒に出て来た。

二人はイソイソと女湯の方へ消えて行った。

「なんだ？」

キースは知らない。

リンが湯船の中でのぼせていた事に。

第六話 近衛隊長は暇（後書き）

ごめんなさい。

（後）を書こうと思ったんですが、その前に一話入れてみました。
次こそ『魔法少女の調査（後）』です。

第七話 魔法少女の調査（後）

「ふにゃ〜」

「……なんだ、その覇気の無い声は」

のぼせて治療を受けたリンは、長椅子に寝転がっていた。
それを呆れた様にキースは見ていた。

二人はホールにいて、そのホールには今彼女達以外に出迎えの従業員
の少女達しかいなかった。

「調査はどうした、調査は」

「ふにゃ〜」

「……はあ」

湯から上がったリンは終始こんな感じになっていた。

「ほら、何も無いんだったら帰るぞ」

「ふにゃ〜」

キースに無理矢理立たされ、リンは渋々立った。

「まったく、治療士とも言えるお前が治療される側になってんじゃねえ。
というか、目的忘れてないか？ 魔法騎士トップが聞いて呆れる……」

「わ、忘れてないわよ！ そうね……、もう少し調査が必要、かな？」

瞬間、ぴしつと背筋を伸ばし反論するリン。

結構プライドが高い。

しかし、明らかにまた来ようと言う意図が見える返答だった。
だが、リンは内心かなり混乱していた。

（ここ、かなり金がかかってる。あの温水……、アタシじゃなきゃ
気付かないだろうけど、魔法で創られてる。保温には火の魔石、水
の浄化と循環に水の魔石も使ってるかな。そして天井の光の魔石……
魔石のオンパレードも良い所じゃない。魔石は一個だいたい銀貨
百枚……、地竜の武具を売ってもギリギリ足りるか足りないか、そ
んなレベルね。なのに料金は銅貨三枚？ どういう事なの？ ここ
の店主は馬鹿なの？ 死ぬの？ なんで死ぬ程安くしてるの？）

これは調査、ここの店主である少年に話を聞かねばならないだろ
うとリンは思っていた。

「そっか。んじゃ、暗くなる前に帰るぞ」

「うん……」

すっかり腑抜けになってるな、とリンの心の内を知らないキース
は苦笑いを浮かべた。

と、二人が受付へ向かおうとしたその時、事件は起こった。

「おい姉ちゃん、武器を取り上げるだあ？ 誰の許可取ってんな事
言ってただよ！ アア！？」

「で、ですから、ここは寛ぎの場なので……」

「んな事聞いてねえよ!? 武器は俺達の魂、いわば一心同体なんだよ! それを預ける? 巫山戯てんのか?」

丁度入り口でそんなやり取りが行なわれていた。

無駄にごてごてとした鎧と、バカみたいにでかい斧を担いだ男とその取り巻きが、緑の髪の少女に喧嘩を売っていた。

「あちゃー、ありや盗賊紛いのぼんくら戦士達じゃねーか。ついてねーな。腕は確かだし」

「どうする……って、武器は受付か」

騎士団（ここを気に入った二人）としては、見過ごしてここに被害が出て、そのまま倒産というのは避けたい所だった。

しかし武器は受付、男達が騒いでいるのは受付間近。

下手に手を出して迷惑をかけるのもまずいが、どうしたものだろうとリンは思った。

「すみません、うちの従業員が何か粗相をしましたか?」

不意にリン達の後ろからそんな声が聞こえて来た。

「……………」

そして、リンは息を飲んだ。
医療室から出て来たのは、一人の少年。

黒髪で、特徴の無い顔立ち。
背中に『湯』と書かれた法被を羽織った、営業スマイルを浮かべた少年が出て来た。

「じゅ??店長! こちらのお客様が……………」

緑の髪の少女は何か言いかけ、慌てて言い直した。
少年は少女に笑い掛け、下がっているように言う。

「フーは下がってて。…………それで、お客様。一体どのような不満が?」

「ああん? 誰だお前?」

男が睨みを利かせるが、少年は一步も引かずこう答えた。

「店長です」

「……………。がはははははは!」

男達は笑い、先頭の斧を持った男が少年に言った。

「店長さんよ、俺達は戦士なんだよ。戦士に取って武器は魂、一心同体なんだ。それをさ、預けると？ そりゃ無理な話だろ」

「そうですか？ しかし、他の皆様は預けてくださりますが？」

「そりゃ腑抜けだな」

「っ！ 言わせておけば、俺様を侮辱してんのか？」

と、キースが拳をぎゅっと握り前に出ようとし、慌ててリンに止められる。

「抑えてキース。今は、彼がどうにかするでしょ？ キースが出て行ってどうにかなる問題じゃないわ」

そう言ったリンだったが、内心では別の事を考えていた。

（『絶壁のグレン』とは比べ物にならない程弱い。あの程度の男なら一ひねりできるはず。さあ、お手並み拝見と行こうかしら）

少年は男の文句に淡々と答えた。

「そうですか？ むしろ、このような場でも自分の武器を手放せない、強さが武器に依存しているあなた達の方が腑抜けのような気がします」

「っ！！」

瞬間、男の表情が凍り付いた。

「うわっ、酷え。って、火に油注いでどうすんだよ」

「……さあ」

さすがのリンとキースも、自分たちの顔が引きつるのが解った。

男が恐ろしいくらい静かに、少年に尋ねる。

「……ガキ、自分の立場が解ってんのか？」

「あなた方こそ、そこに立たれると営業妨害になりますので、武器をお預けにならないのなら早々に立ち去って??」

瞬間！ 男が少年を蹴り飛ばした。

少年は身動き出来ず、モロにそれを受け、壁に叩き付けられた。

一拍遅れて、少女が悲鳴を上げた。

リン達も、思わず体が前に出そうになった。

だが、それは一瞬だった。

少年は膝を付きながらも立ち上がり、再び男の前に立つ。

その足取りに迷いは無い。

男は少年を睨んだ。

「おい、これ以上舐めた事言ったら殺すぞ？」

ふらつく足取りで前に出た少年。

彼は、本気の殺意を向けてくる男を見据えて、こう言った。

「すみません！ お金ならいくらでも払いますので、どうか命ばかりはっ！」

そして少年は土下座した。

「.....」

リンとキースを含めた従業員以外の全員が呆れたように少年を見て、従業員の少女達は困惑したように目をあちこちに泳がせた。

「は……はははは！
がはははははははっ！」

しばし杲然としていた斧を持った男が大声で笑い出し、釣られて取り巻き連中も笑い出した。

「がははははは！　命ばかりはお助けをつてか！？　がははははははは！！」

男は笑い、笑いながら土下座した少年を蹴り付ける。
ゲシゲシ、と嫌な音がホールに響いた。

キースが拳を強く握り、ふるふると振るわせていた。

どうやら、大の男が少年を一方的に勝るこの状況が気に喰わず今すぐにも止めたいが、男の持つ斧に対抗手段がなく、歯がゆい思いをしているようだ。

リンも唇に指を当て、思案する。

(……何よ。レーンの言ってた木こりじゃ無かったって事？ 男の言ってる事はむちゃくちゃだけど、自分の命がかかったら手のひら返して……情けない)

と、リンの隣にいるキースが小声で話しかけてきた。

(……まさか、この状況でも黙っているとか言わないだろうな？)

(そうね。癢だけど、同感。アタシが魔法であいつ等の動きを止めるから、その隙に??)

と、そこで事態は思わぬ展開を迎えた。

「んじゃあ、それで手を打ってやるよ！ ただしまらうのは金じゃねえ。その女だ！」

そう言つて男は緑色の髪の少女を指差した。
瞬間、ヒツと少女は怯える。

「おい、お前。連れてこい。?? いいか、後ろの二人！ 妙な真似しやがったらお前等も殺すぞ！」

男が後ろの取り巻きの一人に少女を連れて来るように命じ、今まさに動こうとしていたリンとキースに釘を刺す。

残った取り巻き達が弓で二人に狙いをつけ、男自身は少年を踏みつけて、動けないようにしている。

(……まずくないか?)

（無詠唱魔法って言っても、何も動作無しじゃ無理よ？）

リンとキースは小声で会話し、その間にも取り巻きの一人が少女に近づく。

そして、竦んで動けない少女へと手を伸ばし??。

「大人しくしやが??」

「来ないで!!」

取り巻きの顔を少女が思い切りビンタした。

嫌な静寂がホールを包み、そして。

「……このアマ！ 見せしめにぶっ殺してやる！ リーダー、良いですね!？」

「やっちまえ！」

リーダーと呼ばれた斧を持った男の返事を聞き、取り巻きの男が短刀を取り出し振り被る。

少女は、未だに動けない。

リンが目を覆い、キースが俯き齒を食いしばる。

そして、血の花が咲いた。

第七話 魔法少女の調査（後）（後書き）

あれ？ 何故か終わりませんでした。

……主人公最強タグは犠牲になったのだ。

第八話 調査の裏（前書き）

長い割りにストーリーは一切進まないと言う体たらく。

第八話 調査の裏

よし、これくらいで良いだろう。

俺は湯に手を入れて湯加減を確かめ、頷く。

恐らく四十一度くらい、適温だ。

これでだいたい完成、長かった。

俺の家にある風呂は、『創造魔法』で創った温水を張っただけの簡易な物だった。

最初は温泉を掘ろうかとも思ったが、そんな都合良く見つかると思えなかったし、掘る道具も無かった。

元の世界から地図を持ち来んで、それで温泉がある場所を掘れば見つかるとも思ったが、その場合深く掘らねばならぬだろう。

正直面倒だった。

と、そこで思いついたのが『魔石』と『創造魔法』。

温水が創れる『創造魔法』ならば、温泉を創れると俺は考えた。

温泉に含まれる成分を調べ、温水にそれを混ぜれば良いだけの簡単なお仕事だ。

となると、必要なのがこの世界の温泉のサンプルだ。

『ルーアン盗賊団』とコンタクトを取った次の日の早朝。

『ルーアン盗賊団』から聞いた情報と、異世界チートの音速を超える早さ、それに元の世界の正確な地図のおかげか、意外と簡単に天然の温泉は見つける事ができた。

残念な事に地形はだいぶ変わっていたが、確かにその地図と情報通りの場所に天然の温泉が湧き出ていた。

ついでに、これまた強そうな竜もいたが。

そこは完全に無視し、焼酎のボトルに温泉を汲み取ってさっさと帰宅。

無駄な殺生はしたくない。

帰って来てそれを調べるのだが??この日から試行錯誤を繰り返す事になった。

同時進行で浴場まで建てなければならなかったため、じっくりと調べる時間がなかったからだ。

『ルーアン盗賊団』に奴隷を買い占めるように頼み、自分は最近の日課になった地竜の部位で創った武器を売り歩く。

地竜は、この世界に来てすぐに襲いかかって来た奴で、分別の付かなかった俺の『創造魔法』でいきなり分解された可哀想な奴だ。

ただ分解するのに空き足らず、無意識のうちに俺はそれを武器や防具へと作り替えてしまったのは、なんというか、ハンターの性だろう。

地竜の武器はだいたい一個金貨数十枚(数千万円相当)で売れた。やけに武器屋や防具屋が金持ちだと思ったら、どうやら戦争が近いかららしい。

その時点で俺の軍資金集めと言う目的は達成されたと言える。

だが、俺が欲しているのは金ではないのだ。

お昼時に、二人分のおにぎりを頼み、ついでに今後の事も考えて、

明日から三十人分の昼食を頼む。

不思議そうな顔をするおばちゃんに、一ヶ月分の前金として金貨一枚を渡すと、おばちゃんは顔を輝かせて、腕が鳴るね〜と言っていた。

その後、浴場と従業員の宿舎を創るため、素材の大理石を摂りに山に向かう。

ここで、俺は新たに考えついた事を実践してみた。

『創造魔法』で亜空間を創造し、そこに素材を入れる事だ。

これができるようになれば、簡単に何でもその場で創り出せるようになるだろう。

結果から言えば、それは成功と失敗の狭間だった。

俺の想像した亜空間は東京ドーム程の物だったのだが、出来上がったのは普通の家くらいの広さの亜空間。

結果、俺は何度も大理石のある山へと行ったり来たりを繰り返すはめになった。

栄養ドリンクで腹がパンパンになった。

魔法を使えば腹が減り、飲まなければ飢えて死ぬ、でもお腹は一杯。

どんな苦行だよ。

『ルーアン盗賊団』の仕事が早く、さつさと奴隷を連れて来てしまったからこうなってしまった。

さつさと宿舎を創らなければ、彼らは野宿するはめになる。

さらに怪我をしていた人が居たので、治癒魔法と言つのを掛けてみた。

一瞬で怪我は治り、神様でも見るような目で見られたが無視した。気恥ずかしい。

苦しみに耐えて一日目、終了。

なんとか、食堂付きの宿舎は完成した。

なんかまた神様でも見るような目で見て来たので、ただの異国の建築士ですと断っておいた。

この日を楽しめれば楽になる……はずだったのだ。

二日目、再び山の往復。

昼には奴隷から従業員へとジョブチェンジした人達のために、定食屋で料理を受け取る。

従業員（予定）の人達には籠を編んでもらい、『ルーアン盗賊団』には『魔石』の購入を指示した。

『魔石』

魔法があるんだからあるだろ、と思ってリリースに聞いてみると、やはりそれはあった。

火・水・風・雷・土……などの属性を秘めた魔法の石。

こちらの世界で科学が発展しなかった要因の一つだろう。

魔石は、刻まれた動作を行なうだけの簡単な物で、プログラムみたいなものだと考えるのが解りやすい。

例えば、俺が買うのを指示した光の魔石。

それは一定の暗さになると光を生み出す、というだけのものだ。

一定の暗さになると光を生み出す、というプログラムがされた石

だと考えれば良い。

俺が他に買うように指示を出したのは、一定の温度に保つ火の魔石、水の循環と浄化をする水の魔石。

これだけで温泉のシステムはだいたい完成。

こんなに便利な石があれば、そりゃ科学は発展しない訳だ。

効力が長続きしないらしいが、そこは『創造魔法』で創り直せば問題有るまい。

三日目。

持って来た大理石で施設を創造。

最初に荒削りな感じで全体を創り、内部に入って細かい部分を創って行く。

最近『世渡り』で持ち込むのが、栄養ドリンクメインになっているのが気がかり。

本日は大量のスリッパと椅子と桶、同じく大量の石けん、そして栄養ドリンク。

納得いく感じにできたのが昼で、王都まで行き料理を受け取る。

戻って来て食事をし、早速、温泉を創造して湯船を満たしてみるのが、最初は普通の温水だった。

ちゃんと魔石が作用するのか調べるためと、店長としての粹な計らいとして、従業員（仮）を入浴させる。

リースに女性陣は頼み、俺も男性陣に入浴の仕方を指導。

石けんが目に入ったとか、シャワー無しで髪を洗うのは大変だと

か、色々問題は合ったが、皆満足してくれて一安心だった。

特に女性陣からはものすごく感謝され、この世界でも女性は綺麗好きだなと思っていた。

その頃から、なぜか俺を『ご主人様』と呼び出す奴が多くなっていたのは余談。

そしてその日から、従業員のマニュアルを作成して、それを練習させた。

俺は施設の細部を創り直し。

シャワーを設置したは良いが、どうしても出っぱなしになる。そういう類いの水の魔石があれば良いのだろうが、生憎そんな物はない。

というか、怒られた。

グレンと言う俺が吹っ飛ばした『ルーアン盗賊団』のリーダーが、

「旦那！ 魔石はそんなに数が有る訳じゃねーんです。なんでも魔石に頼るのはまずいかと」

と言われ、しかたなくシャワーに関してはそれで断念した。

だが、どうしても湯水は温泉にしたかった。

温泉がただの温水でしか無ければ、（わざわざ危険を冒してまで街道にあるここに来るような）魅力に欠けると思えたのだ。

そして栄養ドリンクと肩を並べて徹夜。

何度も失敗して、やっとこちらの世界の温泉を生み出す事ができた。

こちらの世界の温泉は、水にマナが含まれた物だった。

浸かっているだけで魔力が回復して行くと言う、とてもすばらしい効果があるのだ。

竜が守るように住んでいただけ有る。

そして翌日、昼飯を受け取ったついでにそれとなく宣伝。

定食屋のおばちゃんに、出迎え付き無料だから知り合いを好きなだけ誘って来てくれと頼む。

迎えの時間は夕方頃、城壁の側と伝えて俺は一度ここに戻って来て、従業員がちゃんと仕事出来るか試験する。

何故か皆俺の事を『ご主人様』と呼びたがるのだが、『店長』と呼ぶように矯正した。

『ルーアン盗賊団』の面々には、街道沿いの警備をしてもらい、一応の安全を確保。

ここに来て帰りに襲われました、などと評価を下げるような事は合ってはならない。

そしておばちゃん達を馬車で迎えに行き（恐ろしく尻が痛くなっただが、平然な顔をしてみせていた）、十人くらいのいかにもお喋りなおばちゃん達を連れて来た。

浴場の見た目が豪邸みたいで『くわばら、くわばら』と言い出したおばちゃん達に、気分だけでも貴族を味わってほしいと言って誤摩化す。

ローマの公共浴場をイメージしたのだが。

中に入ってもそんな調子が続いたが、そこはあれ、従業員に任せて逃げさせてもらった。

その間に俺は、リースに治癒魔法を指導。

温泉が傷に沁みるかどうかは知らないが、念のためだ。

のぼせるかもしれないし、ここは一応療養施設を目的として作ったからだ。

魔法を使うには、その属性の魔力を持たねばならないらしく、治癒魔法は光属性で、該当者はリースしかいなかった。

指導なのだが、俺は魔法の原理を知って使っている訳ではないので、半ば独学で治癒魔法を習得してもらう事になった。

俺が教えたのは『魔法とはイメージ。治癒魔法を使う時は、その人が元気になった様を想像して魔力を流し込む』という適当なことだけだった。

その結果、どうしてなのかリースは治癒魔法を成功してしまったのは謎である。

思いの強さじゃなかるうか。

後で知った事だが、どうやら千年くらい前に同じような魔法があったとか。

『戦乱時代』と呼ばれる時代で、今よりも魔法や科学が進歩していたらしい。

その時代に激しく争って、文明レベルが下がったみたいだ。

おばちゃん達のはぼせる事無く、若返ったような顔で出て来て、とても満足だったと言ってくれた。

そして街まで送ると、宣伝するよと笑顔で言ってくれた。

そして、おばちゃん達の宣伝効果は恐ろしい物で、翌日から予想外に多くの人が来るようになったのだ。

朝風呂に入る人から、空いている昼に入りに来る人、仕事上がりにさっぱりしに来る人。

従業員が二十人ほどいて助かったと思った（残り十人は『ルーアン盗賊団』である）。

特に、初めてのお客は入浴の仕方が解らないので、従業員を付けて入浴の指導をしなければならぬのが厳しかった。

客層が町人を狙っていたため、武器の持ち込み禁止はすんなり受け入れてもらえた。

土足厳禁と言うのは最初こそ怪訝な顔をされたが、そこは俺の日本人として譲れない点で、なんとか理解してもらった。

そして、今日。
明らかに客の入りが悪い。

俺がいつもいるのは医療室で、ほとんどそこに引きこもっているのだから関係ないのだが。

今は医療室の奥にある、温泉を管理している部屋にいる。

唯一の木で作られた部屋で、付け足しみたいな印象を受けるだろう部屋だ。

設計ミスでは無い。断じて無い。絶対違う。間違っていない。

「店長。……ちょっとよろしいですか？」

と、天井から声が聞こえて来た。

これは『ルーアン盗賊団』の一人、唯一の女性、ルカの声だ。隠密に特化していて、情報収集兼連絡役になってもらっている。

「なんだ？」

「……王都トウキョウでの町人の出入りが禁止されています。それ

と、王都から二人、こちらに向かっています」

「理解した。もういいぞ」

「はい」

返事と共に気配が消え、さすが隠密だなと感心してしまう。

忍者という単語は無いが、あればきつとそれに該当するだろう。

で、町人の出入りが禁止されているにも関わらず、王都から来る二人が。

「……そろそろ来ると思っていた」

恐らくそれは、王家に仕える騎士だろう。

俺の容姿が目立たない事を一週間で理解したが、しかし俺も色々やりすぎた。

「姫様助けたのは間違いだったかな……。いや、あれで食べちゃうなんて選択肢は無いだろ」

ウサギからどうして人に戻ったかは解らないし、戻らなければ食べていたかもしれない。

おお怖い怖い。

「黒髪しか情報はないが、定食屋のおばちゃんはお喋りだからな。こりゃちよつとまずい。いや、ただ単にこの浴場の調査かもしれないな」

しかし、……騎士か。

自分の目で直接見てみたいが、ほぼ一般人の俺が偵察としては気

付かれてしまうだろう。

俺という人間を重要視しているか解らないが、していないと踏むのは少々安易だろう。

……ん？ いや、大丈夫か。

俺は一度外へ瞬間移動し、『創造魔法』で望遠鏡を創り出し覗き込む。

街道上には、報告通り二人の人影。

一人はごてごてした、いかにも騎士と言う格好。つんつんした金髪で、何やら顔を綻ばせている。偶然にも、俺が先日売った剣と盾を持っている。

もう一人は、黒のローブに身を包み、杖を持っていたいかにも魔法使いっぽい少女。

ショートの赤毛で、何やら仏頂面。

ロリっぽい。……なんだって俺の周りにはそういう子ばかり現れるのだろう。

望遠鏡は手放した瞬間、霧散し跡形も無く消える。必要になったら、その都度創り出せば良いだけの話だ。

再び瞬間移動で医療室に戻り、本来なら患者を寝かすはずのベッドで寝息を立てているリースを起こす。

「リース、仕事中だぞ」

「ほえっ！？ す、すいません。あまりにも暇で……」

口元の涎を拭きながら、リースはぺこぺこお辞儀をする。

「冗談だ。魔法は体力使うんだろ？ 今は休んでて良いから」

「いえ！ いつ怪我人が来るか解らないので、起きます！」

「そうか。じゃ、ちょっとお仕事頼もうかな」

「何ですか！？」

寝起きでハイのリースに、俺は少し考えて頼んだ。

「プリンを三つばかり買って来て」

俺にはどうにも、嫌な予感しかなかった。
それと、栄養ドリンクは飽きていた。

扉越しに騎士達を見ようとは思わなかった。

そんな事をして怪しまれては元も子もないし、何よりルカの次の報告の方が厄介だったからだ。

「盗賊紛いの戦士……ねえ」

それがコチラに向かってくる事からして、あまり良い状況とは思えない。

盗賊であればグレン達に言って追い払う事もできるが、戦士であると微妙だ。

純粹にお風呂に目を輝かせて来てくれたのかもしれない。

それを盗賊が追い払えば、街道の安全性が疑われてしまう。

騎士達がいなければ俺自身が出迎えて、良いように対処するのだが……。

もしくはリースに頼んで魔法で追い払ってもらおうと言う手もあるが、のぼせた魔法使いの処置で治癒魔法を使って今は寝ている。

足の悪いおじさんを治療してすぐだったため、疲れたのだろう。

起こすのも悪いし、どうしたものか……。

と。

「おい姉ちゃん、武器を取り上げるなあ？ 誰の許可とってんな事

言ってるだよ！ アア！？」

「……はあ」

騒がしい奴が来てしまった。

緑色の髪が特徴で一番機転の利くフーが対応しているみたいだが、こいつ等は茶化すかバカにするか、金を巻き上げるために来たのだろう。

声の質から温泉を楽しみに来たのではない事が解る。

このままではフーの身が危ないので、店長として俺は医療室から出た。

「すみません、うちの従業員が何か粗相をしましたか？」

失せるマナー知らずの碌でなしが！

という内心を可能な限り隠して、営業スマイルで男達に話しかけた。

「ごしゅ؟؟店長！ こちらのお客様が……」

フーがまた『ご主人様』と呼びそうになり、慌てて『店長』と呼び直した。

どうして皆、俺の事を『ご主人様』と呼びたがるのだろう。もう奴隷じゃないと何度言い聞かせた事か。

「フーは下がってて。……それで、お客様。一体どのような不満が？」

「ああん？ 誰だお前？」

男が睨みを利かせるが??ただの人間には興味ありません。俺は凜として声高に、ちょっとだけかっこつけて名乗る。

「店長です」

「……………。がははははははー!!」

酷いや。

結構勇気出して言ったのに、笑う事無いじゃないか。

はあ、恥ずかしい。

「店長さんよ、俺達は戦士なんだよ。戦士に取って武器は魂、一心同体も同じなんだよ。それをさ、預けろと？ そりゃ無理な話だろ」

幽体離脱はできないと言いたいのだろうか。

そう言えば、俺の『世渡り』って幽体離脱じゃないだろうか？

「そうですか？ 他の皆様は皆預けてくださりますが」

「そりゃ腑抜けだな」

そう言い捨てる男に、俺は逆に言ってやる。

「そうですか？ むしろ、このような場でも自分の武器を手放せない、強さが武器に依存しているあなた達の方が腑抜けのような気がします」

「っ！！」

後ろの方で騎士様が何か言っているが、気にしない。

対して男の額には青筋が見える訳で、言い過ぎたかもと、少し反省した。

「ガキ、自分の立場が解ってんのか？」

でも毒舌を止める気はなかった。

「あなた方こそ、そこに立たれると営業妨害になりますので、武器をお預けにならないなら早々に立ち去って??」

瞬間、男が俺を蹴り飛ばした。

『創造魔法』で俺は肉体を強化しているため痛くないが、派手に壁にぶつかった。

一拍遅れて、フーが悲鳴を上げた。

心配かけるのも心苦しいので、俺は辛そうに演技し、膝をついてから立ち上がる。

そこで、一瞬にして今後のプランが立てられた。

肉体強化されているからこそできる、問題の解決方法だ。

「おい、これ以上舐めた事言ったら殺すぞ？」

俺はそんな男を見据えて、こう言った。

「すみません！ お金ならいくらでも払いますので、どうか命ばかりはっ！」

そして土下座。

「.....!？」

ホールに嫌な沈黙が流れた。

あれ？ フー達って俺の実力知らない？

そう言えば、俺が力行使したのは地竜の時と、ウサギ捕獲の時、あと『ルーアン盗賊団』の時だけだな。

しやがったらお前等も殺すぞ！」

知って知らずか、後ろにいた騎士達にも釘を刺し、俺を強く踏みつける男。

俺は土下座したまま横目で取り巻きの一人がフーに近づくのを見た。

そして、竦んで動けないフーへと手を伸ばし??。

「大人しくしやが??」

「来ないで!!」

取り巻きの顔を少女が思い切りビンタした。

痛そうな音がホールに響き、その後嫌な静寂が包み、そして。

「……このアマ！ 見せしめにぶっ殺してやる！ リーダー、良いですね!？」

「やっちまえ！」

リーダーと呼ばれた斧を持った男の返事を聞き、取り巻きの男が短刀を取り出し振り被る。

フーは、未だに動けない。

騎士達が目をそらすのを見て。

そして、血の花が咲いた。

第八話 調査の裏（後書き）

おかしい……何故終わらない。

これだけ書いてもストーリーが進まない。

せめて分岐点までは今年度中に書きたいのに……。

第九話 少年と魔法少女の会合

目を覆ったアタシには、結果しか見えなかった。

血が滴り落ち、床に血の花を咲かせる。

だが、短刀は少女に届いては居ない。

店長の少年の左手が短刀の刃を握り、それを止めていた。そのため、少年の手からぽたぽたと血が滴り落ちている。

「て、店長？」

「「なっ!?!」」

先ほどまで少年を踏みつけていた男と、少女に切り掛かった男が驚きの声を上げ、アタシもキースも、声を上げずに驚いている。

見えなかったのだ。

男に踏みつけられていた少年が、次の瞬間には切り掛かった男と少女の間に入っていた。

目を逸らしていたから見えなかったのではない。

その証拠に、少年を踏みつけていた男の驚いた顔は見物だった。

「おい……」

聞く者の体を震えさせるような低い声を少年は発した。

騎士として何度も戦いを経験しているアタシ達をも、その声は震えさせた。

先ほどまでとの明白な声質の違いが強調しているからかもしれない。

ただ、こんな奴とは戦いたくない??そう思わせる声の響きだった。

そしてアタシには、彼の周りのマナが震えているのが感じ取れた。

「ひっ!」

短刀を捕まれた男が、少年の手から短刀を引き抜こうとしてもそれは動かず、男は怯えたように短刀を手放し後ずさりした。

完全に少年に恐れを抱いている。

少年は短刀を握り直し、低い声のまま言う。

「貴様等、武器は自分の魂だと言ったな?」

少年に睨まれ、男達は無意識のうちに一步下がっていた。

少年の言葉に、相手を敬う気持ちはもう微塵も含まれていない。

「怒りに任せて罪なき少女に刃を向け、一人のガキも切れないのか」

少年は短刀を振りかぶり、背筋を凍らせる静かな物言いと共にそれを投げつける。

「大した魂だな、屑ども」

短刀は男達の足下に突き刺さり、男達は尻餅をつく。瞬間、アタシは理解した。

間違いなく、この少年が噂の木こりだと！

床に点々と血を残しながら少年は男達の方へと向かう。男達は変貌した少年に怯えながら、後ずさりをする。改めて思う。

自分がそちら側に居なくて良かったと。

「貴様等……人に刃を向けると言う事は、どういう意味だか解っているだろうか？」

少年は傷ついていない右手を男達に向ける。

男達はすでに下がれず、扉に手をかけ逃げ出そうとしていた。

「人に刃を向けると言う事は、殺す覚悟があると言う事だ。刃を向けた時点で、そこからは殺し合いの場でしか無いんだよ。貴様等に、殺される覚悟はあるか？　??俺の言いたい事は解るだろうか？」

男の一人がついに扉を開け、外へ飛び出した。

それに続くように全員が少年に背を向けて走り出した。

戦士にあるまじき行為だ。

だが、情けないなどとは言えない。

騎士のアタシがそちら側に居ても、同じ事をしただろう。

それほどまでに、少年は得体の知れない恐怖を生み出している。

戦意を喪失し敵前逃亡した男達???だが、少年はそれを追って外へ出る。

そして、叫ぶように言った。

「俺の仲間到手え出してんじゃねえぞ!!」

一喝。

それはどこまでも心に響く、少年の心中を吐露した叫び。

そして少年は男達に向けて手を振る。

瞬間、男達が何かに弾き飛ばされたように空へと飛んで行く!

それは、さながら見えない巨大な腕で跳ね飛ばされたような光景。

男達は叫び声を上げ、空の彼方に飛んで行った。

恐らく、地に落ちるまでに何度も後悔するだろう。

何時間も恐怖の飛行体験をするのではないだろうか??そう思える飛びっぷりだった。

「悔い改めろ」

少年は静かにそう言うと、ふらふらと尻餅をついた。
アタシも、それにあわせて床にへたり込みたかった。

「大丈夫ですか、ご主人様！」「……………」

少女が少年の元へ駆け寄って行く。

アタシとキースは、何も反応出来なかった。

あれは、一体なんだったのか？

ふと隣を見ると、キースも同じ事を考えていたらしく、目が合うと尋ねて来た。

「リン……。お前、あいつがあの子を庇った時の動きが見えたか？」

「騎士のあんたに見えなくてアタシに見える訳無いでしょ？ キース……。アンタ、手を振るだけで大の男を吹っ飛ばす魔法知ってる？」

「魔法使いのお前が知らない魔法を俺様知るはず無いだろ」

「……………」

「はうっ！」

しばし二人で顔を見合わせていると、外で先ほどの少女の声が聞こえた。

見れば少年にデコピンされている。

「俺は『ご主人様』じゃねえ、『店長』だ！ 何度言わす気だコラ

「！」

「う、ごめんなさい……。でも、血が……」

地べたに座ったままの少年に少女が頭を下げ、心配そうに少年の手を見た。

「うん？ これくらいどうって事ない。お前の所為じゃないから、頭上げる」

そう言っただけ少年は左手と右手を擦り合わせた。
次の瞬間には、傷は跡形も無く消えていた。
血の跡も残さずに。

「！？」

……あり得ない。

治癒魔法？ うん、治癒魔法はあんな一瞬で効果は出ない。

治癒魔法は傷口の止血と再生を同時に行なうから、結構時間がかかる。

じわじわと回復して行くのであって、怪我そのものを無かったようにする事は不可能だ。

それが、一瞬？

こいつは……只者じゃない。

と、少年はアタシ達の視線に気付いたようで、立ち上がりこちらに向かってくる。

思わず身構えるアタシとキースに対して、少年は。

「すみませんお客様。迷惑をおかけしました」

「……………」

ペコペコ頭を下げ始めた。

それに習って少女も頭を下げる。

アタシとキースは顔を見合わせる。

……もしかして、こいつは自分の力が解ってないのか？

と、アタシは気付いた。

コイツが、唯単に一人の店の店長として行動しているだけだと。となると、先ほどの平謝りもそういう事だろう。

店にも客にも従業員にも被害が出ないように、あまつさえあの戦士達にもなるべく被害が出ないように行動していたのか……。

この男、思っていた以上に賢い。

「いやいや、こちらに危害は無かった。そう頭を下げなくていい」

キースがそう言い、ありがとうございますと少年は顔を上げた。

このまま帰るのが普通だろうが、丁度良いとアタシは思った。

この少年には聞きたい事が山ほどある。

話し合ふのなら騎士と一般人、こちらが優位の場で話させてもらいたい。

……別に怖がってなんかないもん。

アタシは一步前に出て、少年に言う。

「アタシの名はリン・フェルマー。王国の魔法騎士隊長よ。アンタ

にいくつか尋ねたい事がある。いいかしら？」

隣でキースが意味不明という顔をしているが、無視して少年を真っ直ぐに見る。

少年はしばし驚いたような顔をしていたが、すぐに恭しく礼をする。

「しがない商人の私ですが、それでよろしければ答えられる範囲で答えましょう」

ここでは話しづらいでしょうから、という少年の誘いで、アタシ達は森の中に有ると言う少年の家へと向かっていた。

森……『チヨダの森』。

正直……怖い。

あんな力を見せつけられた後だ。

このまま森に入って、帰らぬ人となるかもしれないと若干思っている。

まあ、あちらの機嫌を損ねるような事を言わなければ問題ないはずだ。

アタシ達は装備を返してもらい、フル装備で森へ向かったのだが、この少年は法被を羽織っているだけ。

並んでみると解るが、重装備しているキースがバカっぽく見えてしょうがない。

少年は道もない森を普通に歩き、その歩みは木こりと言われても疑えない物だ。

これでこの少年が姫様の言っていた木こりで、巷で地竜の武器を売り払っていた人物だと確信した。

（おいおい、リン。いきなり何を言い出すんだ？ 何か問題でもあるのかよ。いや、あの力は確かに騎士に欲しいがな？）

（バカキース。アンタは何も知らないんだから黙ってる！）

小声で叱りつけると言う芸当じみた事をしながら、無言で先を行く少年に付いて行く。

はつきり言って、この少年が何を考えているのかさっぱり解らない。

と、急に視界が開け、森の中に異様な一軒の家が見えた。見た事も無い建築様式の木造住宅だ。

「着きました。ここが私の家です」

そう言って扉を開け、先に入ってスリッパを出す少年。

どうやらここも土足厳禁のようだ。

全身鎧のキースが入るには、再び鎧を脱がねばならない。

「キースは外で待ってて。アンタの頭じゃ理解出来ないだろうから」

「俺様をバカにすんな。……だが、お言葉に甘えさせてもらおう。鎧を脱ぐのは面倒だからな。だが、何か遭った時にはすぐに駆けつけよう」

無駄な騎士道精神ありがとう。

今だけは、ちよっぴりありがたい。

「どうぞ」

そう言って足下に出されたのは、『公衆浴場』で履いたスリッパとはまた別の、なにやらふかふかしたスリッパだった。履いた瞬間、靴から解放された足が、その柔らかな感触に飲み込まれて行く。

何……この解放感。

「では、こちらに」

そう言って少年は少し広めの部屋へと案内する。そこにはソファ―と机しかない簡素な部屋だった。ソファ―で腰掛けるように少年は言うと、その奥にある水場で何やら動きを見せる。

そして、盆の上にお茶とお菓子を載せて出て来た。

お菓子……である。

砂糖は高級品、当然お菓子も高級品だ。

ふむ、心得ているじゃないか。

別にアタシがお菓子を好きな訳じゃない。

年に何度としか食べられないような物だから、ちょっと嬉しいだけだ。

「どうぞ」

といって少年はアタシの前にお茶とお菓子……何コレ？ を出して来た。

皿の上には、フォークと全体的に白い三角柱の物体。

上に野いちごが載っているが、何だろう、この柔らかそうなお菓子。

アタシが首を傾げていると、何故か少年も首を傾げる。

「……ケーキですが？」

「けーき？」

聞いた事の無い名前のお菓子だった。

少年はフォークでそれを切り分け、自分の口に運ぶ。

まさか毒が入ってる事は有るまい。

アタシもそれに習い、食べてみる。

「これはっ！？」

ふんわりとした触感、口の中を甘さが満たし、思わず頬が緩んだ。

今まで食べた事の無い、衝撃的なお菓子だ。

というか、今日一日でいったい何度驚いた？

「では、話を伺いましょう」

「……はっ！　そ、そうね」

ケーキのおいしさに思わず安心してしまったが、そこはソレ、別に聞くべき事は忘れていない。

「ごほんと一度咳払いをし、アタシはまず一番気になっていた事を尋ねる。」

「アンタは……一体何が目的なの？」

「目的ですか？　簡単に言えば、世界平和ですかね」

「は？」

思っても見ない解答を一瞬で返された。

アタシは思わず声を漏らしてしまったが、少年は気にせず続ける。

「世界平和ですよ。私は争いが嫌いなんですね。解答になりましたか？」

「え……、まあ、いいわ」

あくまで騎士と一般人と言う立場での会話。

恐らく常に敬語を使うような少年ではないだろうから、まだその位置関係は変わっていないはずだ。

「じゃあ、もう少し詳しく聞かせてもらうね。??何故、あのような施設を作ったの？」

少年は黙り、じつとアタシの顔を見つめる。

後ろめたいことがある訳でもないのに、何故だか目を逸らしたくなる視線だった。

「温泉、気持ちよくなかったですか？」

「へ？ ……まあ、気持ちよかったわよ」

のぼせるまで入っていた事をどうやら少年は知らないらしく、なんとなく助かったと思った。

と、少年は安堵の溜息をついた。

「良かった良かった。それなら、意味は解るんじゃないですか？」

「というと？」

あえて少年に先を促す。

やっぱりアタシにはコイツの考えている事が解らない。

「私があれば作つたのは、単に商売のためですよ」

「でも、あの格安の料金は何？ あれだけの建物の建築も維持も、生半可な金額じゃ無理よ。おまけに中は魔石だらけ。それなのにあの料金？ 儲ける気はないとしか思えないわ」

と、少年は不敵な笑みを浮かべる。

「私の祖国の経済家がこういう話をしました。『新たな商売を始めるとき、一代目はとにかく安く売れ。二代目で立ち回る程の利益を、三代目で初めてまともな利益を求めろ』と。こういう事が解りますか？」

「生憎私は騎士なの。そういうのはさっぱり」

そういう思案は嫌いではないが、少年のペースになるのはまずいので素っ気なく返す。

コイツは未知の世界のように魅力が有りすぎる。

素っ気ないアタシの態度を少年は気に留める事も無く続けた。

「客から信頼を得るための商法です。人からの信頼は、そう簡単には得られないと言う事です。私は一代目なので利益は考えず、とにかく安くしている訳です」

「従業員に払う給料はどうするの？」

「払いません。彼らは元奴隷、買い手は私なんです。借金している状態ですね。勿論、隣の宿舎は無料で使わせてますよ？ 給料は食費と宿泊費、それに日々の入浴代。勿論、休みや小遣い程度のお金は与えます」

「ど、奴隷!？」

頭がクラクラして来た。

あの少女達が、皆元奴隷？

てつきり、裕福な町人の娘などだと思っていた。

それくらい、彼女達は皆綺麗だったのだ。

「……………」

と、何故か少年が顔をしかめ……すぐその理由に行き当たった。定食屋のおばちゃんから聞いた話から、コイツは奴隷扱いを酷く嫌っているのだ。

あまりの不機嫌そうな顔に、少し頭を下げてしまう。

非は認める主義だ。

少年もそれに驚いたのか、表情を緩める。

ひとまず安心だ。

そして、今までの話を繋げれば、アタシが調査に来る前の推理が的外れも良い所だと解った。

けどアタシには、コイツが何を考えているのか解からない。

争いが嫌いだが、いざとなれば惜しげも無くその力を曝す。
やたらと金のかかった施設。

従業員として働いている元奴隷。

アタシは間違っていた。

『護身用の武器』は、護身用でしか無く。

地竜の武具で得た資金は、施設の維持に掛けるお金。

買われた奴隷は、兵士ではなく従業員として。

まったく、戦争が近いからと言って、アタシも病んだものだ。
何でも戦いと結びつけては駄目だろう。

しかし、それならば。

「アンタのさつき見せた治癒魔法、騎士として使ってみない？」

「と言いますと？」

……コイツ、解ってて言ってるだろ。

堪えるアタシ、コイツを敵に回すのは厄介なのに変わりないんだ。

「アンタは気付いてないかもしれないけど、さっきの治癒魔法、あれは凄いのよ！？ 魔法騎士隊長のアタシがそう言うんだから間違いない。だから、それで騎士として??」

「お断りします」

「???は？」

コイツ……、名誉ある騎士へ入るのを躊躇無く断りやがった。
いや、理由は解るのだけど。

「先ほど言ったでしょう？ 私は争い事が嫌いです。だから、騎士にはなりたくありません」

「で、でも！ いずれにしても、この国は戦争になるわよ？ そうなったとき、アンタみたいな治癒魔法の使い手がいれば、出る犠牲は少なくて済むわよ！？」

少年はうんざりしたようにアタシを見る。
え？ アタシ間違ってないよね？

「フェルマーさん、でしたか？ あなた、医療室の前に書かれていた言葉、読みましたよね？」

「ええ。『騎士の方お断り』って奴でしょ？」

フェルマーさん、か。かなり新鮮な響き。
なんか嫌だ。

「それなら、解るんじゃないですか？」

「生憎、アタシには何故『騎士の方お断り』なのかも解らないけど」

そう言つと、露骨に溜息を吐く少年。

なんだかコイツ。だんだん態度がでかくなつて来たと言つか、素に戻つて来たと言つか。

「簡単に言いますと、俺は自分の治療した人間が、回復したが故に誰かを殺した、なんて結果が嫌なんですよ。だから騎士はお断りなんです」

「だけど、私達騎士が戦わなければ、国民が傷つくわよ！」

「だから、傷ついた国民は治療します」

「騎士だって、国民でしょう!？」

「聞いていたでしょう？ 刃を向けるからには、自分も向けられる覚悟がなければならぬと」

「アタシ達だってできれば戦いなんてしたくない。だけど、戦いは起こってしまう。そうなった時、誰かが戦わなければ国民は救えないの!」

少年は急に黙り込み、何かを思索する。

そして、こう言った。

「あなたは正しいでしょう。それでも、俺は殺人の手助けはできません」

かーっと頭に血が上ったが、考えてみればコイツは一般人なのだ。恐らく、コイツのいた国は平和ボケしていたのだ。

アタシはむしろむしろとケーキをがつつき、お茶を飲み干し立ち上がる。

「貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございましたっ！」

ずんずんと玄関に向かい、そしてささっと靴を履いて出ようとした時、不意に後ろから声がかかって来た。

「気を付けてくださいね？」

アンタが襲ってこなければ大丈夫よ！　とは言わず、無視して外に出る。

「おいリン??」

「帰るわよバカキース！」

アタシは振り返らず、王都のある南へと向かって歩き出す。

多分、アイツも間違った事は言っていない。

だけど、悔しいけどアイツの力は本物で、今のアタシ達にはどうしても欲しい力だ。

それなのに、決して手に入れる事ができない。

きっと少年は私達に手を貸してくれはしないだろう。

それが歯がゆい。

遅かれ早かれ、この国は絶対に戦争を迎える。

だから、なんとしても仲間を増やしておきたかったのだけど……。

「リン！」

「何よ！」

思わずきつく叱責し振り返ると、かなり真剣なキースの顔がそこにはあった。

そして、神妙な面持ちで語り出した。

「俺様ついさっきまで忘れてたんだが、あの医療室に杖をついた男が入って行くのが見えたんだ。んで、よく考えたらその男と良く似

た奴？？いや、本人が杖をつかずに医療室から出て来たんだ。それとお前がのぼせた時、医療室から出ていった少女がお前を治療したんだと思うが……。リン、これどう思うよ？　リン、聞いてるか？」

キース、たまには良い事言っじゃない。

もっと早く気付けと激励してあげようじゃない。

どうやら、まだチャンスは有るみたいね。

余談だが、森を抜けても襲われる事無く、誰とも何とも遭遇しなかった。

何が気をつけるよ、ばーか！　と息巻いていたのだったが……。

「リンだけずるい！　私も行ってみたかった！」

今回の報告をした際、髪とか肌が綺麗だずるいずるいとレーンに言われ続けた。

まさか、これの事を言っていた訳ではあるまい。

第九話 少年と魔法少女の会合（後書き）

やっとストーリーが少し進みました。

今回は少し手抜きのような気がしています。

内容こそ変わらないでしょうが、若干変えるかもしれません。

第十話 名無しの行き先

俺は嫌な予感がしていた。

最初、ウサギの姫様（凄く語弊を生みそうな言い方だが気にしない）を助けた所から、それは感じていた。

俺が騎士になりたくないのは、唯単に、人を殺すのも殺されるのも見たくないだけだ。

盗賊紛いの戦士達は、バシーラみたいな魔法で俺が見つけた天然温泉まで飛ばしておいた。竜が居るが、運が良ければ生き残れるだろ。

もう、人が死ぬのは見たくない。見たくないが、きつと見る事になる。

そして、見ていない所であれば、俺は許容するのだろう。

この国に付くと決めるにはまだ早いと俺は思っている。

王都や浴場に来る人の顔を見る限り、悪くはないと思っているが、もう一方、科学が発展した西の地方を見ていない俺には何も言えない。

天下統一、それは決して楽な道ではない。

なるべく楽な道を通りたいのだ。

俺はまだ何も知らないのだ。

だから、決定はまだ早い。

必要に迫られたとき、決めれば良いのだ。

そう思っていたのは、フラグだった。

「グレン、ちょっと良いか？」

「何です、旦那？」

朝、食堂で俺はグレンを呼び止めた。

グレン達『ルーアン盗賊団』にも宿舎に泊まっており、街道沿いの警護と情報収集を頼んでいる。

給料は一日銀貨五枚（日本円で五万円相当）で、かなり満足しているようだ。

さすがに、あの誓いに嘘偽りは無かったようだ。

「俺はちよつと西の地方に行きたいんだ。その間、ちよつとここを頼みたいんだが、良いか？」

「旦那。西というと、ギルバート帝国に？」

西……元の世界で言う中部地方以西は、ギルバート帝国という科
学が発展した国だ。

ギルバートは皇帝の名前（ちなみにラザウェルも王家の名）で、
どちらも絶対君主制。

最近、ギルバート帝国が世界統一（俺からすれば天下統一）に向
けて動き出したらしく、国境付近で小競り合いが多いみたいだ。

「別に問題ないだろ？」

「え、ええ。ですが、この前みたいな奴らが来た時はどうしやす?」

「それはそうだな……。うん、お前が脅せば良いんじゃないか? フーヤリースが後は代わりになるだろう」

あれから二日経つが、そろそろまたあの騎士達が来そうだというのが気がかり。

俺の考えが正しければ……。多分。

気付かない振りをしているが、まあ、今日にでもバラしてしまおう。

「まあ、あつしは良いんですが……。あまりギルバート帝国で良い噂は聞きやせんぜ?」

「うん?」

敵国の噂だから、あまり良い話では無いのは当たり前だろう。話半分に聞かせてもらおうか。

「ギルバート帝国は貴族社会でさあ。一般人はどうあがいても、一般人。この国にも貴族はいやすが、どちらかと言えば実力主義。あちらとはちげえです」

ラザウェル王国は実力主義か。

確かに、貴族だけで構成された騎士ではないと思っていた。

それならば公衆浴場などには来ないだろう。

武勲を上げれば、貴族にもなれると言う事か。

ふうん。

「ただ、この国よりも貧富の差は小さいらしいようで。それでも奴ら、平気で人体実験に手を出すらしいんですよ」

「人体実験、だと？」

科学の発展に実験は付き物だが、よりによって人体実験か。

「へえ。何でも、貴族達お抱えの研究者達は、適当にそこらの一般人を捕まえて、新たな技術の実験に使っらしいんでさあ。それで質の悪い事に、ちゃんと実益を生むんで。捕まった奴は運が悪かった、未来の犠牲になってくれて奴でさあねえ。国民も認めてるんですよ」

「……そうか」

その噂を聞く限り、俺は絶対にそちらに付こうとは思わない。人の命を数としか考えていないのか？ 巫山戯るな。

……だが、一度も行かずにこちらに付くのはまずいだろう。

「……店長」

と、不意に後ろから声がかけられた。

突然の気配とこの声……ルカか。

食堂の天井は高いため、後ろに現れたのだろう。

ルカは濃い黒のショートヘアーで、膝を付き俺に報告をする。

「再び、王都での町人の出入りが禁止されました。また、防衛ライオンも封鎖されています」

「……また来たか」

騎士達がそろそろ来るとは思っていた。
リン・フェルマー……とか言ったか？

恐らく、今回は姫様も付いて来るのだろう。

ちなみに、防衛ラインと言うのは、俺が国境だと思った物だ。

王都に近過ぎだろうと思ってはいたが、アレは最終防衛ラインだったらしい。

「グレン、今の話は無かった事にしてくれ。今日は俺が出迎えなきゃならんだろう」

「わかりやした。……王女様が直接来やすか。さすがにあっしでは対応出来やせん」

「ああ。街道の警備を怠るなよ？」

「わかりやした」

グレンは大急ぎで朝食をかつ込み、早々に食堂から立ち去った。それに続くように『ルーアン盗賊団』の面々も食事を済ませる。実に便利だ。

さて、どうしたものかな？

「姫様……ねえ」

さて、ウサギの姫様をどうやってお出迎えしようか。

「アイツは只者じゃないって。舐めた口聞かせたら、何言つか解んないよ?」

「リン、あなたにとってはそうかもしれないけど、私に取っては命の恩人なの。対等な立場で話たいわ」

「確かに私から見ても、アイツは只者ではありませんでした。敵に回せば厄介な強さがあります」

「……何キース? 姫様の時には俺様口調止めるの?」

「リン、むしろお前が姫様相手に敬語じゃないのが問題だろう」

という様な会話を三人はしていた。

場所は一般人の通行が完全に封じられたはずの街道上だが、王国の騎士とその姫ならば話は別だ。

リンとキースが両脇に立って、真ん中のレーンを護衛している。しているのだが、その会話は緊張感の欠けた物だった。

「リン。お前姫様のお気に入りだからって、調子乗ってないか?」

「キースこそ姫様の前ではデレデレしちゃってさ。何それ?」

「リンとキースは付き合ってるんですか?」

「「違う!」」

というような、とても一国の姫様の護衛をしているとは思えない

会話内容だった。

このようになった経緯は二日前に遡る。

「??という訳で、『公衆浴場』なる店の店長は、レーンを助けた木こりの少年だったわ。で、地竜の武器を売り歩いていたのもそう。『ルーアン盗賊団』が足を洗ったのも、この少年が何かしたからじゃないかな。これは確かめてないわ」

「……………」

リンの友達に語るような物言いをラザウェル王国のお姫様は気にしない。

元々、畏まられるのが苦手なのだ。

ただ、今回は別の事でリンを恨めしそうに睨んでいたが。

「今の所敵意は無いみたいだけど、騎士になるのは拒否されちゃった。ただ、一般人として放っておくには勿体なさすぎる逸材かな？」

「……………で、リン。一つ良いですか？」

「何？」

首を傾げるリンに向かって、レーンは指を突きつけ叫ぶように言った。

「なんで帰って来たら見違える程綺麗になってるんですか!？」

「……え？　そうなの？」

とぼけるように言ったリンに、レーンはずんずんと向かって行き、リンの頬に触れる。

「髪は綺麗になってるし、肌はつるつる！　何して来たんですか！」

「何って……調査もかねてお風呂に入って来た」

「ずるいです！　リンは最初『公衆浴場？　面倒じゃん。行きたくない』とか言ってたじゃないですか！」

「そうだけど？」

「で、行きたかった私を置いて行ってきて、自慢？　ずるい！」

「ち、違うよ！　別にそんなつもりじゃ……」

「それにキースに聞きました。あまりの気持ち良さにのぼせて治療を受けたとか、『ふにゃー』とか言ってたらしいじゃないですか！」

「っ！？」

瞬間、顔を湯気が出そうなくらい真っ赤に染めて、リンは俯いた。なにやら、「キ、キース……殺す！　あとで絶対殺す！」と呟いている。

「ずるいです！　私も行きたいです！　明日にでも行きましょう！」

「でも……あそこに行くには、町人の街の出入りを禁止にしなきゃ

駄目で……。規制しなきゃ混んでるらしいから。二日続けるのはどうかと」

「ますますリンはずるい！」

「ええー！？　じゃ、じゃあ明後日、明後日行こう？　それでいいじゃん！」

「……そう言って、リンはまた明日行くんでしょう？」

「っ！？」

何故バレた？　とリンは思い切り顔に出してしまった。

「ほらやっぱり。何が危ないですか！　はまってるじゃないですか！」

「だってえ……川の水は冷たくて嫌いだけど、温泉はあったかくて気持ちいいし、安いし」

「ずるい！」

「解ったから！　今度行く時は一緒！　だから、ね？」

という様な会話から二日、姫様は念願の『公衆浴場』に向かった。ちなみに、一名が先ほどの会話で嘘をついたのだが、それは余談。

今回、キースは前回の経験から着衣のしやすいレザープレートを来ており、リンとレーンはローブという、旅人達のような格好だっ

た。

姫と護衛と解る材料は皆無と言える。
そして三人は豪邸にも見えるそこへ来た。

「これが……『公衆浴場』ですか？」

「まだあれから二日しか経ってませんが、やはり凄い物です」

「さあさあ、さっさと入ろう」

一人だけ場慣れした雰囲気を発して、後ろで二人がそれを訝しむように見て、リンが扉を開ける。

「……いらつしゃいませ」「」

入った瞬間、お辞儀と挨拶。

初めてのレーンが少し驚いて、キースも慣れないという表情を浮かべて、リンがさっさと靴を脱いでスリッパに履き替えた。

「ほらほら、さっさとしなよ」

上機嫌のリンだったが、受付に杖を渡して料金を払う時に、それは終わった。
というの。

「いつもご利用ありがとうございます」

という受け付けの一言で、後ろにいた一名がリンを睨みつけたからだった。

「リン。いつもって、どういう事？ 今度行く時は一緒、とか言わなかった？」

「……ちょ、調査だよ」

「……………」

「こ、ここは寛ぎの場だから……暴力はんたーい」

レーンの無言の圧力に、目を泳がせながらリンは呟いた。

と言う訳で、リンが毎日のように来ていたのがバレてしまった訳である。

いつも、と言うからには、もしかすると一日に何回も来ていたのかもしれない。

そうでなければ、たった三日で顔を覚えられる事は無いだろう。

「で、でも！ きつとレーンも解るって！ アタシが毎日でも来なくなる魅力が有るの！」

「……はあ」

レーンは小さく溜息をつき、諦めたようにリンを見習い、靴を脱いでスリッパに履き替え、杖を預けて料金を払う。一回で覚えてしまっり、賢いようだ。

「じゃ、じゃあキース。お先に」

そう言ってレーンの手を引いてリンは女湯の暖簾を潜って行った。
キースは考える。

「……多分、長いよな」

その言葉通り、二人が湯から上がったのは、キースが湯から上がって一時間程経った頃だった。

すっかり頬を上気させ、濡れた髪を縛り上げるレーン。
すっかり慣れて来て、タオルなんかを肩にかけてるリン。
すっかり待ちくたびれて、椅子の上で寝ているキース。
どうやら満足したようである。

三人はすっかり安心しきっていた。

「……で、リン。どこにいるんですか？」

「ふえ？」

椅子の背もたれに頭乗せていたリンが間抜けな声を出し、首を傾げる。

レーンは呆れたように言う。

「だから、その少年です」

「……多分、あそこかな」

そう言って『医療室』を指さすリン。

『騎士の方お断り』の文字がまだ残っており、少年の考えがまだ

変わっていないのかとリンは溜息をついた。

今日レーンを連れて来たのは、彼女にも少年の説得をしてほしかったからだ。

だが、何者にも屈しなさそうな少年は、この分では今日も無駄足に終わりそうだとリンは思った。

「本日は、よくお越し下さいました。お客様」

丁度良いタイミングで、営業スマイルを浮かべて少年が『医療室』から現れた。

その後ろには、何故か金髪の少女がちょこちょこと付いて歩いていた。

「フェルマー様は毎日来ておられると聞いておりましたが、気に入っていただき店長としても嬉しい話です」

そう言って恭しく礼をする少年。

「……なんでかな、皮肉に聞こえるわ」

後ろからレーンに睨まれ、リンは冷や汗を流してそう言った。
そして。

「本日は一体どのようなご用件ですか？ ウサギのお姫様とその騎士様達は」

瞬間、臨戦態勢になるキースとリン。
二人はすぐにレーンの左右に立った。
しかし、頭の中ではクエスチョンマーク。

（ウサギ？）

だが、当のレーンは、顔を真っ赤にして叫ぶ。

「私はウサギじゃありません！　というか、覚えていたんですか？」

少年は恭しく礼をして、

「姫様のような綺麗な女性？？嫌でも記憶に焼き付きます故に」

とどこか皮肉めいたことを言う。

レーンが頬を染め、少年の後ろで少女が不機嫌そうな顔をしていたが、少年は気付かない。

「それで姫様。一体どのようなお話ですか？　街道を封鎖されては商売上がったりでして」

やはり皮肉めいた事をいう少年。

「す、すいません」

とレーンはずい頭を下げてしまう。

少年はそれに驚き、しばしレーンを見つめる。

どうやら、少年に取って王族や騎士が礼をするのは驚きに値するようだ。

「では、単刀直入に言います。??あなたを騎士として採用したい??と」

少年は、笑みを浮かべた。

さて、ここは大きな分岐点だ。

1・姫様の言葉に従って、騎士となる。

この道を選べば、簡単にある程度の騎士としての地位を手に入れる事ができるだろう。

その後は好き勝手やらせてもらっただけだ。

とりあえず、くれると言う物はもらっておく。

2・時間をもらい、ギルバート帝国を見に行き、それから決める。

これを選べば、ギルバート帝国の内情を知った上でどちらに付くか決められる。

だが、ギルバート帝国の嫌な噂は真実味が有り、あちらに行っている間に戦争になる事も考えられる。

その場合、スパイと疑われ騎士になるのは難しいと俺は考えてい

る。

最悪、有無を言わずこちら側を敵に回す結果になるだろう。
人体実験が有るのならば、洗脳技術も有りそうだからな。

3・騎士にはなりたくないから断る。

とりあえず騎士は断る。その後は展開次第で臨機応変に行動する。
ギルバート帝国に行くもよし、ラザウェル王国の地方を旅するも
よし。

しかしこの場合、明らかに俺は後手に回る事になるだろう。
全てが何かあってからの行動になる。

例えば、旅をしている間にここが襲われたとか。戦争が本格化し
たとか。

だいたい選択肢はこれくらいだろうか。

まあ、答えは決まっているのだから。

第十話 名無しの行き先（後書き）

十話記念で分岐させてみました（実際は十二話目）。

アンケートもどき終了。

投票してくださった方々、あらためてお礼申し上げます。

第十一話 決意とその先（前書き）

アンケートに投票してくださった皆様、本当にありがとうございます。
結果は、本編にて。

第十一話 決意とその先

「お断りします」

俺がはつきりとそう告げると、一人が俯き、一人がそっぽを向き、一人が顔をしかめた。

これは、店長としての決断ではなく、俺個人の話だ。
私ではなく、俺の決意。

「ただし、俺も少しだけ考えを変えてみました。恐らく、あなた方も納得すると思います。ただ、条件が有りますが」

そう言って、俺はリースに小声で頼み事をする。

リースは怪訝そうな顔をしながらも、食堂へと向かう。

「条件って……、アンタ何様のつもり？」

「リン、私達は頼んでいる側よ。……解りました。話を聞きましょう」

しばし俺の顔を見つめる姫様の顔は、一人の少女のものだった。
だが、すぐに一国の主となる者の顔になる姫様。

もしラザウェル王国が残るのなら、きつと良き王になるだろう。

「では、少し見てもらいたいものが有りますので」

「っ!？」

と、リースが食堂から戻って来た。
そのリースを見て、護衛の二人が身構える。

リースに頼んだのは、包丁だ。

俺はリースから包丁を受け取り、それを握る。

「アンタ、何を考えて??」

「安心してください。あなた方を傷つける事はありません。傷つけるのは、俺自身です」

「!?!」

驚いた三人を一目見て、俺は自分の左腕を包丁で斬りつけた。
瞬間、赤い鮮血が左腕から溢れ出し、床へと滴り落ちる。

「なっ、何を……」

「リース、頼む」

俺は包丁を床に起き、右手でリースに呼び寄せる。
リースは落ち着いた様子でこちらに来て、俺の傷ついた腕の真上に手を掲げる。

リースは少し目を閉じ、そして魔力を手に集中させる。

瞬間、淡い緑色の光が俺の腕を包み、次の瞬間には傷跡を残さず綺麗な物とした。

「なっ……………」

啞然とする三人を見て、やはりこれは今この世界では使われていない魔法だと悟る。

俺は床に落ちた血をタオルで拭き取り、三人を見て言う。

「この治癒魔法を提供しましょう。条件は、敵の兵士も治療すると言う事です」

「……………」

三人とも、今起こった出来事が事実かどうか疑っていて話を聞いていない。

それくらいのインパクトがあるのか。

と、先日もそれを見ていた護衛二人はすぐに俺の条件に反論して来た。

「敵を助けると!? 我々の仲間を殺した敵だぞ!」

「敵を助けるのに魔力を使うなんて、そんな事すれば魔力が尽きて逆にアタシ達が死ぬわよ!」

「死ぬはずの命を助けられるのと、敵への復讐。どちらが大切です

か？ 戦争には死ぬために行くんですか？ 生き残るための戦争で
しょう？ 戦いの後で結構なので、傷を治してほしいのです」

生きている？？それは、敵も味方も同じだ。

まあ、助けた後に何かがあるのか、俺は知らない。

助けた奴に殺されるかもしれないし、助けた奴が助けてくれる事
だつてあるだろう。

それは、この世界の人々の心次第だ。

「……………解りました。良いでしょう」

と、俺の条件に姫様は同意してくれた。

おお、話の分かるいい人だ。

「姫様！ しかし…………」

「私達は、好き好んで戦争をしている訳ではないでしょう？ なら
ば、それで出る犠牲は少ないに越した事は無いはずです」

「ですが…………」

「それに、彼が私達を試しているのが解らないんですか？ 聞けば
ここより遙か北から来たと言います。彼は私達がどれほどの心を持
っているか、試しているのですよ？」

北から来た、って冗談で言っていないよな？

しかし…………、そこまで見抜くか。

まあ、敵を治療しろと言つのは、実はまだ意味が有るのだから。
できればその意味は無くなってほしい。

「……解りました」

男は俯き、それを認めた。

「では、治癒魔法を提供しましょう」

「はい。……ですが、どのようにして教えていただけるのでしょうか？」

「ですが、もう一つの条件あります。リース」

俺が呼ぶと、リースは少し怖がる素振りを見せながらも、しっかりと頷いてくれる。

「先ほど見た通り、この子が治癒魔法を使えます。ですから、この子を騎士にして下さい。ただ、これを先に言っておかないと不公平なので言いますが、この子は元奴隷です。それでも良いですか？」

三人は驚いたようにリースを見た。

無理も無かるう。

リースの金髪は、一点の曇りも無い綺麗な物。

その肌もつるつるで、とてもじゃないが元奴隷とは思えない。

そもそも奴隷は、生まれたその時から奴隷と言う訳ではないらしい。

保護者から売られた子や身寄りの無い子が対象だ。

訳も解らず売られ、養子にはなれなかった子が奴隷として育てられる。

家事は勿論、何でも教えられるのだ。

男の子は労働力として売られる事が多いため、体力を付けさせられ、女の子は家の中での様々な、それこそあの手の事も賤られるのだとか。

その時の奴隷の扱いは酷いらしく、体がボロボロになるまでやらされるのだとか。

奴隷になるかならないか、それは生まれた時の環境しか作用しない。

リースの場合は、保護者（血のつながらない叔父叔母らしい）に売られた直後で、まだ何も知らなかった。

要するに、その手の教育は受けていないと言う事で、奴隷と呼ぶには相応しくないのだ。

俺はおおむねそれを説明し、それでもどうかと問う。

「……奴隷から騎士となった者は過去にいません。ですが、そこに規則もあります。私は良いと思います。でも、それは魔法騎士隊長が決める事です。リンはどう？」

「ふえっ！？……別に良いと思うけど？ アタシとしては特に気にした事はないかな。驚くけど、別に差別はしないよ」

思った以上に寛大だ。

まあ、これを受け入れなければ治癒魔法の技術は手に入らないしな。

そしてリースが騎士団に入る事は、俺にとっても二つの意味がある。

姫様の方は、もしかすると気付いているかもしれない。

一つはリースに話したが、もう一つは秘密にしている。

何だか色々問題が起こりそうな話だからな。

「俺がこの国に出来る事は今の所これだけですな」

「……あなたは、一体どうするつもりなんですか？」

騎士になる事を断ったためか、俺の今後を心配してくれるらしい。

「そろそろ経営の素人の俺ではこの浴場も立ち回らなくなると思うんで、俺は辞職しますな」

「は？ あんた商人じゃないの？」

「いや、商人になったつもりは無いですが？」

元の世界では一学生にしか過ぎない俺の経営では、どう考えても立ち回らなくなるだろう。

例えば、食堂。

今は味を広めるために格安で振る舞っているが、この世界では砂糖は高い。

『世渡り』で砂糖を持ち込むにしても、あまりたくさんは持ち込めない。

いずれはこちらの世界で調達しなければならなくなる。

そうなったとき、こちらの世界をよく知らない俺では騙されかねない。

要するに??。

「俺は一所に留まりすぎました。見聞を深めるため、旅に出ようと思っています」

俺はこの世界を知らな過ぎる。

国も民も、善も悪も、人も心も何も知らない。
何かを知ったつもりでいるのは、もう止めだ。

目の前で何も知らずに失うのは、もうこりこりだ。

さて、ウサギの姫様。

死んだ“あの少女”に良く似たお姫様。

今度は、最後まで見守ってほしいかな。

第十一話 決意とその先（後書き）

最後の数行で、何故主人公が選択肢の1番を上位にしたのか解るか
もしれません。

第十二話 間のお話（前書き）

次のストーリーを書くための、間のお話。

第十二話 間のお話

リースが騎士団に入る事を承諾し、それで話は終わりとなった。
レーンとキースが先に外へと出る。

「それと……最後に一言良いですか？」

と、少年が不意にリンを呼び止めた。

「何？」

一番あの三人の中で、リンが適当だったのだろう。
少年は笑みを浮かべ囁くように言った。

「彼女は俺の家族も同様。彼女が傷つけば、どうなるか解るだろ？」

そう言って少年は、ピツと指を大理石の床へと向ける。

瞬間、大理石の床が削れた。

そして、少年が床に触れれば、それは元通り。

「あ、あはははは。解ってる解ってる」

リンは、自分が引きつった笑みを浮かべている事に気付きながら、
レーン達の元へ焦ったように駆けつけた。

「じゃあリース。達者でな」

「……………」

リースは無言で少年に頭を下げ、そして三人の元へと駆けて行く。少年は笑みを絶やさず四人を見送る。

レインは怯えたリンに囁くように言った。

リースに聞こえないように。

「彼の言葉には、彼女が彼の人質と成り得ると言う意味も有るんですよ？」

瞬間、リンは理解した。

彼女が無事騎士でいる限り、彼はこの国に対して敵意は無い。

彼女が騎士としていれば、奴隷から騎士となった事で、この国の奴隷達の希望となる。

もしそんな彼女快く思わない者が彼女を襲えば、彼は躊躇無く敵意をむき出しにする。

だから、私達に彼女を守れと。

俺を敵に回したくなければ、この子を守れと。

（本当にこの国を試してるのね。何様のつもりよ………ったく）

「でも、そこまでして旅に出る必要って何？ 一所に留まりすぎた、ってどういう意味？」

「……………」

リンは首を傾げ、それにはレーンも答えられなかった。

「……ナイン」

リースはその理由を知っていたが、答えなかった。

俺は平和が好きだ。

争わずに済むのなら、争わない結末をなるべく選ぶ。

……そのとき理性があればの話だが。

かつとなっていたりした時は、その保証は出来ない。

俺がこの世界に来てすぐ、俺は地竜を殺している。

そのとき、俺は自分の手に余る力を手に入れたと思った。

『創造魔法』は、空気中のマナから魔法を創るのと、物質を分解して新たな物を創り出す二種類が有る。

正直、怖かった。

俺は人を簡単に殺す力を手に入れたのだ。

だから一週間も森に籠っていたのだ。

間違つても人を殺さないように、魔法の力加減を理解するために。

ギルバート帝国が戦争をしようというのなら、俺はそれを止めた
い。

ある騎士のように言えば、『自分は内側から変えてみせる！』と
いう事だ。

凄く失敗しそうな話である。

俺自身も、失敗すると思っている。

そんなに世の中甘くはない。

戦争が起こってくれた方が、天下統一を目指す俺としては楽だ。なんとかして勝ち残った国の頂点になり、それで両方の国民に支持されるようになればソレで終わりだからだ。

そのためには、いかにも勝ちそうなギルバート帝国を一度は見ておく必要が有る。

俺の想い描く国でなかったその時は、潰させてもらっただけだ。ラザウェル王国には少々知り合いを増やしすぎた感がある。

誰かのためになら、俺だって戦えるだろう。

誰も殺す気はないが。

甘いと言われようと、俺はそれを貫く。

浴場の方はグレンが店長をしておけば、争い事にはなるまい。医療室は『創造魔法』で治癒魔法の魔石を創っておき、フーに渡ししておいた。

最悪、瞬間移動で戻ってくれば良い。

俺はグレンもフーも、この国の人を良く知らない。

信じていい者かどうか知らない。

だから、試しているのかもしれない。

いや、違うか。

俺はこの国の人を信じてみただけか。

第十二話 間のお話（後書き）

色々しません。

なんか適当な気がします。

次からちゃんと書きます。

第十三話 入国方法とその後を（前書き）

アンケート話。

第十三話 入国方法とその後を

今現在、ラザウェル王国からギルバート帝国に入るのは容易ではない。

戦争になろうというのは目に見えているからだ。

だが、それでも簡単に入る方法はある。

ギルドの依頼だ。

ギルドは大陸の魔物討伐がメインで、両国に存在しており、基本的に市民の依頼をこなすものだ。

例えば、危険な森での薬草採取、畑を荒らす魔物の退治などだろう。

ギルドのシステムはテンプレなので割愛。

ギルドに入り、ギルバート帝国行きの依頼を受ければ、それがパスとなって入国が可能になるようだ。

という訳で登録をする。

「では、お名前をどうぞ」

「名前は無いんです」

「ナイン様ですね。では、この水晶に手を乗せてください」

「……………」

この世界ではナインと言う名前はありきたりなのだろうか？

まあ、名前は無いと自己紹介する俺が悪いのだけど。

「この水晶っていくらくらいするの？」

「金貨五枚程度ですね」

日本円にして一千万円か。

『創造魔法』の分解で砕いてランクを破格の物にしようかと思っ
たが、止めておこう。

でも結果は解りきってるんだよね……。

「じゃあ……」

水晶に手を触れると、水晶は微妙に光を帯びた。

もの凄く光るとか、砕け散るとかそんな事は無かった。

「……解りました。ナイン様はCランクですね」

上からSS、S、A、B、C、D、Eのランクが有るギルド。

ランクは自分のステータスから決められるのだ。

Cランクは普通である。

まあ、さすが何でも平均の俺、この結果は解っていた。

強さとステータスが釣り合わないのは、『創造魔法』のせいだ。

俺は『創造魔法』で、『異世界召還補助効果魔法』というものも
創造しているのだ。

異世界なのだからコレくらいは、というのをイメージし、それを
自分に付加している訳だ。

音速を超える早さ、ほとんど痛みを感じない頑丈な体に肉体強化
されているのだ。

『創造魔法』で魔法を創造する。
実にチートだ。

この水晶がステータスからランクを決めている所を見ると、どうやら特性として付加しているようだ。

まあ、下手にランクを上げて目立ちたくないから丁度良い。
能ある鷹は爪を隠す、出る杭は打たれる。

「こちらがギルドカードになります。ランクはあくまで依頼を受ける時の目安で、自分のランクより高い依頼を受ける事も可能です。その場合、依頼人の承諾が必要ですが」

自分の事は自分でなんとかしろ、という事か。
危機管理は自己管理。

まあ、俺に関してはランクとか関係ないな。参考にならないだろ。何はともあれ、とりあえずこれでギルバート帝国に入る準備はできた。

後は帝国へ行くのに丁度良さそうな依頼を受けるだけか。

1 帝国の商人の護衛。報酬金貨一枚（二百万円相当）。

ランクC以上で複数人とか、旅の仲間フラグ。

依頼には魔物などからの護衛と書かれている。

など……って、どう考えてもラザウェル王国側の人間に襲われるフラグ。

テンプレだな。

2 キョウトの薬草取り。報酬銀貨十枚（十万円相当）。

場所的にも名前的にも完璧京都。

そこにある薬草と一緒に取りに行つてほしいという依頼。
何故かランクがB以上。

この戦争が起こりそうな状況で、銀貨十枚の報酬。
多分誰も受けないよな……。

3 お嬢様の教育係募集。報酬金貨一枚（二百万円相当）。

これは……凄く嫌な予感がする。

求めているのがランクA。

ギルバート帝国のさるお嬢様の教育係を募集との事。

衣食住を与えてくれるから、実質的には住み込みか？

魔物討伐がメインのギルドに何故この依頼があるのか……それが謎だ。

正直金は必要ない。

『世渡り』で持ち込んだ物は大抵高値で売れるからだ。

とりあえず、帝国に入れさえすればいいのだ。

あれだけ悪名高い帝国なのだから、その本質はすぐに見抜けるだろう。

さて、どうしたものか。

第十三話 入国方法とその後を（後書き）

アンケート終了。

投票してくださった方、ありがとうございます。

感想・指摘・意見お待ちしております。

第十四話 帝国の第一歩

チートの俺に怖い物など無い。

暴君王女が何のその！ 受けてやりましょう。

何より帝国のお嬢様、いわば国の頂点に近い人物だ。

彼女を懐柔もしくは改変出来れば、戦争だって回避出来るかもしれない。

高望みだと解っているし、その分色々大変そうだが。

ラザウェル王国は底辺を味方につけた。

ギルバート帝国では頂点を味方につけるとしよう。

俺は受付にこの依頼を受ける事を言った。

「あつ、こちらの依頼を受けるんですか？」

「ええ。Cランクですが、大丈夫でしょうか？」

うーんと少し悩み、にっこり笑って受付は言った。

「Sランクの方がプライドをずたずたにされて以来、最近は何も受けないんで、多分大丈夫でしょう。では、ギルドカードにこの依頼の事を記載しますね」

そう言ってギルドカードを受け取ると、よく解らない機械に入れる受付。

あれ？

Sランクがどうか言わなかったこの人。

プライドにボロ雑巾がつけるような修飾語。

うわぁ……才能の壁を感じる。

「入国の際にこちらのカードを見せれば、問題なく入れると思いますよ」

「ご丁寧にもありがとうございます」

「いえいえ。もしかすると……最初で最後になってしまうかもしれません」

「えっ……」

「では、お氣をつけて」

うわぁ……、帰って来れないと思ってるよ。

どんなお嬢様の教育だよ。

元の世界で静岡に当たる都市でギルド登録を終え、国境に近づけば近づく程、武装した騎士達に会う。

皆一様に緊張した面持ち、戦争は近い。

百メートル程の非武装地帯を抜け、何事も無く、俺はギルバート帝国の国境へと辿り着いた。

城壁に関してはラザウエル王国と似たような物だろう。

細身の使いやすそうな剣を持った番兵がおり、俺がギルドカードを見せながら近づくつと、

「ん、君があのお嬢様の……。まあ、死ぬなよ」

「……生憎、俺はまだ死ぬ気はありません」

なんで皆そんな事言うのかな。

少しでも粗相をしでかしたら斬首とか？

……うわぁ、依頼を無視したくなってきた。

そして恐ろしい程簡単に国境を通してくれた。

あれ？ いいの？ 戦争近いのに。

ギルバート帝国の町並みを見る前に、目の前に誰かが立った。

「ようこそ、ギルバート帝国へ」

そう言っただけを出迎えたのは、軍人だった。

迷彩服を着込み、銃を構えている。

銃？

俺の持っているエアークンはプラスチックだが、彼らの持っているのは金属。

無骨なデザインで、まだ試作品のようだが、これは確かに銃だ。

ライフル銃で、どうやら連射生はまだそこまで進歩していないようだ。

外の番兵が剣で、俺を出迎えた軍人が銃。

どうやら銃はまだラザウェル王国に、情報としても武器としても流れていないらしい。

次の戦争での秘密にして主力兵器になりそうだ。

「お嬢様がお待ちです。どうぞ一緒に。何ぶん最近は大変ですの
で」

俺に有無を言わせぬ睨みを利かせ、俺の脇に立つ軍人さん。

……なるほど、ね。

どうりで戦争間近でも簡単に入国出来る訳だ。

おそらく、ラザウエル王国から入った人には有無を言わせず張り付くのだろう。

怪しげな行動を取れば即射殺か。

銃を知らないラザウエル王国からのスパイは、速攻殺されるだろう。

魔法はどう見ても音速より遅い。

科学を支持しているギルバート帝国の技術は、二十世紀レベルだった。

町並みこそラザウエル王国と大差ないが、技術に関しては二十世紀初頭。

兵士は銃器で武装しているし、街灯も見えるし、水道が通っているみたいだ。

車はガソリンに変わる物が希少なのか無いのか、見ていない。

だが戦争になったら、ラザウエル王国は負けれると思う。

そんなことは解っていた事で、気になるのは人体実験の方だが。

そして、俺の今後も。

「こちらでお待ちください」

そう言つて軍人さんは、有刺鉄線が張られた施設の修練場らしき場所に俺を放置。

見た感じ、軍事基地。

遠巻きに四人程が監視している。皆銃を携帯。

こんなところで会わされると言うのは……結構お偉いさんの娘さん？

しかし、嫌な予感しかない。

教育係って……もしかして。

「あなたが新しい教育係？ 私の名前はアイラ。階級は大尉よ」

そう言っただけ俺の前に現れたのは、赤い髪をポニーテールにした俺より少し若い少女。

お嬢様……というイメージとは大きくかけ離れている。

なぜなら、彼女が着ているのも迷彩服。

腰には細身の長い剣。

そして教育係。

「じゃあ、早速だけど、あなたの強さを見せて頂戴」

そう言っただけ剣に手を添えるアイラ。

なるほど、そういう事ですか。

俺が彼女に教えるのは、剣や武器の扱い方。

要するに、彼女の戦いの師匠を募集していた訳だ。

だからギルドの依頼にあったのか。

そして、この子は過程は知らないが、Sランクの人すらも倒したのか。

「……でも、あなた見た感じ弱そう。今まで見て来た誰よりも」

ぐはん！ 過大評価じゃないかい？

「なんて言うか……普通よね。特に何かに秀でているようには見えない」

確かにそうだろうさ！

俺のステータスは平凡だからな。だからCランクだ。でも、人に言われるとムカつくな。

「人は見かけによらないものですよ……アイラお嬢様」

早速媚び諂う俺。

好感度を上げておかなければ、意味が無い。

平和の大切さとか、そう言うのを教えに来たのだ。

「そうかしら？　じゃあ、せいぜい楽しませて頂戴」

クエスチオンは余計だぞ。

俺は言った。

人は見かけによらない……と。

お前には、『異世界召還補助効果魔法』で俺に特性が付け足されているのが解らないのか？

ステータスなら感じとれても、特性は駄目みたいんだな。

最も、魔法が無ければ俺の特性はきつと、『絶対平均』とか『絶対平凡』みたいな奴だろう。

何でも出来るが、上手くはなれないという残念特性。

努力で才能をどうこう出来はしない。

だが、今は違う！

ステータス反映こそ無いが俺には、『戦闘計算は数値を倍にする』

『二回行動』『不思議な守り』などの特性が魔法で追加されている

……というイメージを持っている。

才能に勝つには、発想しか無いのだよ！

努力だって所詮才能があつてこそだ。

世の中の辛さを知れ。

「アイラお嬢様。殺意の籠った刃を向けていいのは、敵だけですよ？」

アイラの抜刀と共に、俺は彼女の後ろに立ち、首元に手刀を添える。

「なっ!？」

アイラは驚いたように体を硬直させている。

先ほど俺を連れて来た軍人も、監視していた奴らもそうだが、恐らく、このアイラと言うお嬢様は本当に強いのだろう。

生涯無敗とか、その若さで語っちゃってたんだろう。

それが、一瞬で敗北。

「……………」

手から剣がカランと落ちて、その場にへたり込むアイラ。

もし俺が武器を持ち、自分に向けて殺意があったら、自分は死んでいたと思っているのだろう。

まあ、俺は人を殺す気はさらさらない。

自我が崩壊しない限り、俺は人を殺す気はないのだ。

というか……。

俺は武器持っていないんだよ！

エアーガンは形だけでもパクられるとまずいから、持って来ていないんだよ！

ギルドの人間で手ぶらでここまで来る方が悪いのかもしれないけどさ。

「で、どうなんですか？ 俺は失格ですか？」

俺は地面に崩れ落ちたお嬢様を見ながらそう言う。

「……初めて負けた」

うわぁ、冗談で生涯無敗とか言ってたのに、本当だったよ。
妬ましいくらいの才能だな。

『創造魔法』で特性を付加していなければ、予想通り俺の首は飛んでいただろう。

しかし、ここは科学の国。

魔法をなるべく使いたくはなかった。

正直特性で決められなければ、完全に逃げ出していた。
勝てる要素がないもの。

戦略は拮抗した敵には通じるが、圧倒的戦力の前には無意味だ。
ランクSの奴のプライドをボコボコにする戦力に、平凡の俺がいかなる戦略を立てようゴミのように蹴散らされるだけだ。

「……名前は？」

「ん？」

「名前です。あなたの??」

立ち上がり、握手を求めるアイラ。

どうやら暴君と言う訳ではないようだ。

俺はしばし悩み、答える。

「ナインと言いますが、本当は名無しです」

「そう、ナナシ。あなたを教育係にするわ」

また違う勘違いをされた。

第十四話 帝国の第一歩（後書き）

ストーリーで触れた『才能』について語る、本編に関係ないあとがき。

無駄に長いので、読み飛ばしてくれていいです。

作者の知り合いに、こんな事を言った人が居ます。

『どれだけ頑張ろうと思っても、頑張れないんだ。好きな事だから努力しようと思っても、努力出来ないんだ。努力も才能が必要で、自分には努力する才能が無い』

確かに努力する才能もあるのかな、と思いました。

さて、作者は首を傾げました。

努力しても才能の壁は超えられないのか。

生まれた時から才能と言う壁が出来ていて、どうやっても覆す事が出来ないのか。

それはもう運命に近い物でしょう。

作者は才能という言葉が嫌いです。

才能という一言で、人生全てが諦めてしまえる点が嫌いです。

そして、憎きそれらを覆す術を考えて見ました。

それが、本編で語られた『発想』です。

考えを飛躍させる、という事です。

同じ土俵では戦わない、というがソレに当てはまります。

例えば、音楽。

歌唱力というのは、ある程度は努力すれば上げられますが、本当に才能のある人にはどうあがいても勝てません。努力して勝てるのは、元々才能がある人でしょう。

努力する才能と言う物も有りそうです。

しかし、ここで『発想』。

音楽と言うのは、表現です。

自分の伝えたい事が伝えられたのなら、歌うのが上手かろうが下手だろうが関係ありません。

伝わりさえすれば、それで良いのではないのでしょうか？

聞いていて耳障りでなければ、それでいて聞く人の心を捉えられれば、音楽としては良いのではないのでしょうか？

というような事を思って、主人公を平均で平凡にしたのです。

……まあ、その『発想』すらも、そういう発想を生む才能がない、で片付けられてしまうのですが。

駄々文にお付き合いくださいまして、ありがとうございます。

第十五話 崩れる想像図

俺の創った浴場なんて、豪邸ではなかった。
アイラの住む屋敷こそ、まさに豪邸だろう。

軍事基地から徒歩で十分程の場所に、その屋敷はあった。
というか、お嬢様でもあったのか。

四方を柵で囲われた屋敷だ。広大な土地には噴水やら庭園があり、
屋敷の広さは俺の通っていた学校より広い。

空には夕日が登り、夕焼けが噴水の澄んだ水を赤く染めている。
屋敷内部には、柔らかな赤い絨毯が敷き詰められ、壁際には高そうな
絵画や磁器などが飾られている。

庶民の血が騒ぎ、めちゃくちゃにしてみたくなった。

ともあれ、どれほどの期間かは解らないが、俺が住むのだからそ
んな事はしない。

住まなかつたらするのかと言われれば、……その時の気分だろ。
こんだけ広い土地が、一個人の物と言うのは納得出来ない。

「何惚けてるの、ナナシ。付いて来なさい。お父様に紹介するから」
今思った。

ナナシ……って、凄く変じゃないか？
日本人の名前としてはありかもしれないが、俺にしては名無しと
呼ばれているような気がしない。

「……すみませんお嬢様。一応、ギルドカードにはナインと書いて
おりますので、そちらの方で呼んでいただけませんか？」

「そうなの？　じゃあ、どうしてナナシなんて名乗ったの？」

「そちらも本当ですから」

「……そう。なら、ナインと呼ぶわ。でも、二人きりの時はナナシと呼ぶ」

こいつ……絶対名無しって解ってないだろ。

本当に、名前が無いと名乗る俺が悪いんだけどさ。

でも仕方ないじゃないか、日本語の名を名乗れば怪しまれるし、今は消滅しているのだから。

「ナナシは何が出来る？」

「……何でも出来ます。決して上手くは有りませんが」

『万能にして使い勝手が悪い奴』とは俺の事。

『七つ道具、ただし切れ味は悪い』とか『汎用コンピューター』と呼ばれていた時期もある。

最悪なのは、『万人で代替可能』という名称か。

その通りなのだから腹が立つ。

だから特別になりたいと思ったのだが。

「へえ、料理とかも？」

「料理や物作りに関しては、一流だと自負しております」

勿論、『創造魔法』を使えばの話だ。

『世渡り』で物を持ち込むも良し、それで持ち込んだ百科事典と料理本を使えば何でも創れるだろう。魔法はイメージだ。

もしも料理人にされたら、誰もいない所でしか料理できないがな。

ここは科学の国、魔法はアウトだろう。

今の所、科学と言うのに触れていないので怪しいが。

そう考えると、俺はかなりまずい場所に来てしまったかもしれない。

俺が魔法を使って誰かを怪我をさせてしまえば、ラザウェル王国との戦争の引き金になるのでは？

それだけは避けたいな……。

というか、何故この二つの国は戦争になろうとしているんだ？

ギルバート帝国が世界統一を目指したから？

なんだか腑に落ちない。

「そつか……。じゃあ、ナナシを私専属の執事にしよう」

「は？」

「ちなみに、拒否権は無いから。何でも出来るんでしょ？ 別に最高を求めたりしないから、気は楽にしていいわ」

そう言つて笑みを見せるアイラ。

いやいや、教育係から執事つて。

ある意味好機だが、ある意味同じ轍を踏む結果になりそう。

また一力所に留まる事になってしまふではないか……。

「大丈夫。この国は初めてでしょう？ 一週間この国を見てくれば良いわ。その間、ここにいてくれて結構よ。ナナシを敵に回したくないから、変に飾ったりしないありのままのこの国を見て。勿論、ナナシの腕なら護衛も必要ないと思うから、一人で好きにどうぞ」

……あれ？

噂から予想していた国とはまるで違う。

薄ら暗い国だと思っていたのだが、これではこの国に非は無いと言っようだ。

どうなってるんだ？

「良いのですか？ 自分はお嬢様の教育係として雇われたのですよ？」

「良いの！ ……今のままじゃ、きっと何をしてもナナシには勝てないと思うから」

目をそらして、悔しそうに言うアイラ。

どうやら、一週間で自分の至らぬ点を直して、再戦を希望しているようだ。

プライドの高い事。

「……ところでお嬢様。お嬢様の家系は、この国で一体何をなさっているのですか？」

「どうして？」

「お嬢様は確かにお強いですが、家族全員がそう言う訳ではないのでしょう？ この家には剣や甲冑と言うものは飾られておりません。優れた文官ですか？」

「……へえ」

そんな物飾らないとかあるかもしれないが、今の反応を見る限り

それはなさそうだ。

文官の家系で戦いの才に恵まれた、もしくは文武両道か、どちらにしても羨ましい限りだ。

「知ったら執事として以上にこの家に縛られちゃうけど、知りたい？」

くすくす笑いながらそんな事を言うアイラ。

……予想以上に国に深く関わっている家かもしれない。
裏の部分で。

「……謹んで遠慮させていただきます。自分で調べます故に」

「あまり深入りしたら、ただでこの家から出られないから注意してね。最も、私に勝っちゃうなら、この家の誰も止められないと思うけど」

伊達に大尉の地位ではないな。

いや、実力主義でないこの国だから、大尉の地位までしか上がれなかったのかもしれない。

「というか、ナナシはもしかして何も知らないの？」

「はい。この国の事どころか、この大陸に関してはほとんど。田舎出身で」

「ふうん」

何故か勝ち誇った顔をするアイラ。
やっぱり負けたのは悔しいようだ。

「お嬢様、どうかこの下賤な私めに、解りやすいようにこの国の事を教えていただけませんか？」

「あれ〜？ 教育係が何を言ってるの？ ……でもいいわ。特別に！ と・く・べ・つ・に！ 私が教えて上げましょう！」

胸を張って機嫌良くアイラは語り出した。

なんだか子供っぽくて可愛らしかった。

迷彩服を着ていなければ、もっと良かった（その所為かどこか大人びいて見えるのだ）。

「まず、この国はギルバート家、今はガイアス・フォン・ギルバートが皇帝の専制君主制の国。彼と彼の信賴を得た貴族達が好き勝手に横暴にしていたわ。でも、最近は少し変わって来たかしら」

「変わったと言いますと、どのように？」

今の台詞を聞く限り、アイラはあまり今の皇帝を快く思っていないようだ。

「ある程度実力で地位が上がるようになったわね。あつ、別に私の家はそれであがった訳じゃないわよ。どうせすぐ解ると思うから言っちゃうけど、私の家はこの国の司法に携わる家系よ」

「……司法、ですか」

そういつのは皇帝が好き勝手にやると思っていたが、違うのか？

「今の皇帝の側近がかなり優秀で、これ以上民を虐げれば革命で国

が滅ぶと言って、今はその側近が色々国を動かしているの。皇帝は武力でその地位まで登った人で、政治に関してはからっきしだったから。その側近、皇帝のお気に入りだし、ちゃんと以前よりいい政治をしてるから文句は言えないのよね」

「どうりで、私が聞いた噂と違う訳です」

ニツとアイラは笑みを浮かべる。

「どうせ貴族が好き勝手やってる国って聞いたんでしょ？ 生憎、そうでもないわよ」

「それは、一庶民の私としてはありがたい話です」

「で、一部の優秀な貴族達に政を任せているのね。で、この家は司法を任された」

「なるほどです」

「じゃ、後は自分で調べてね。この部屋にお父様がいるから。……暗殺とかしないよね？」

そう言って立ち止まったのは、重厚な木製のドアの前。

ドアに埋め込まれたプレートには、『書斎』と書かれている。

目を潤ませて尋ねる所を見ると、どうやらアイラと父親の仲は悪くないようだ。

「ご安心ください。先に言っておきますと、私は平和主義者。戦争などの争い事は嫌いです」

「っ!？」

少々驚かれてしまったが、戦争反対は駄目なのだろうか？
いや、そんな事を言いながら戦いを教える依頼を受けたからか。

「私は、お嬢様みたいなお綺麗な女性が傷つくのは耐えられません
故に」

「そ、そう……」

顔を赤くして俯くアイラ。

単純だな。こういう齒の浮く台詞に慣れていないのかもしれない。
ん？

貴族なのだから、そういうお世辞は良く聞くのではないか？

「そ、それじゃあ、入るわよ。粗相の無いように!」

そう言つてノックして、アイラは入る。

「お父様、新しい執事を連れてきました」

「ん？ 執事？ 教育係ではないのかい？」

そう言つたのは、銀縁眼鏡をかけた三十中頃のアイラと同じ赤い
髪の優男。

整頓された本棚と机、椅子にゆったりと腰掛けた、醸し出す雰囲気
が、おだやかな男性だ。

「はい。優秀でしたので、私の専属の執事にしました」

「もしかして……、アイラ、負けちゃった？」

「……はい」

瞬間、男は立ち上がり、

アイラを抱きしめた。

身構えず、俺はそれを傍観する。

俺の立ち位置からは気恥ずかしそうに頬を染めているアイラが見えた。

「アイラ……良かった。怪我は無いんだね」

「お父様、私を誰だと思っているのですか？ 私はギルバート帝国軍第三師団隊長？？」

「アイラは他の何でも無い、僕の娘だ！」

アイラが階級を名乗ろうとし、男はそれを遮る。

………なんというか。

「自分は席を外しましょうか？」

「????!」

「おや、なかなか気が利くじゃないか」

頬を真っ赤に染めて男から離れるアイラ。赤面症だ。
男は胸に手を当てて、名乗る。

「僕はこの国の司法を任されたルイス・ジェイホードです。娘、アイラ・ジェイホードの件、どうぞよろしくお願いします。君のような人が仕えてくれるのなら、僕としてもありがたい」

「……………自分はナインと言います」

あまりの腰の低さに思わず沈黙してしまった。

「お、お父様。では、私は……………」

「うん。着替えてくると良い。夕食の席で会おう」

アイラはパタパタと小走りに部屋から駆け出した。
よほど恥ずかしかったようだ。

ルイスは俺を見て、少し笑みをこぼす。

「腑に落ちないかな？ 僕は君を過大評価しているつもりは無いよ。
……………役柄的に、僕達家族は命を狙われる事が多い。妻は毒殺されたんだよ。だから、君が娘の暗殺者でなかった、それだけで僕は十分だ。君の素性が何であれ、僕は君を歓迎しよう」

じつと俺の目を見て、ルイスは笑みを浮かべる。
人の奥底まで覗くような目だ。

「……………良いのですか？ 人は見かけによりませんよ」

「それは、まだ自分は本性を見せていないと言う事かい？ 生憎、

僕は人の隠し事を見破るのを生業としていって、過言ではないのですね。君の奥底にある本心、それくらいは解る」

「……聡明な旦那様でなによりです」

「君もなかなか賢いようだね。だけど、扉の前で本心バラしちゃ駄目だろう？」

「……………聞こえていましたか」

確かにアレは俺の本心だ。

平和万歳。

「僕も戦争は反対だ。立場的に何とも言えないが、君とは仲良く出来そうだよ」

「自分も、そう思います。ですが、どうにも裏が有りそうですね」

瞬間、ルイスは驚く。

話が美味すぎるんだよ。

「あなたは戦争反対と言いましたが、そこまで反対はしていないでしょう。まあ、娘が傷つくのは嫌だと言うのもあるので、本心と言えば本心でしょう。ですが、何か隠していらっしゃる」

ルイスは本当に驚いたと、口元を手で隠す。

どうやら、他人の隠し事を見破るのは日常でも、自分は別らしい。

「自分は平和主義者です。凄く、平和主義者です。その点を踏まえていただければ、自分としては結構です」

「……………ふふふふ。君は面白いね。君はきつと我が家の執事には相応しくない。だが、それでも、僕は君を歓迎しよう」

「これからしばらくお世話になります、旦那様」

ルイスは笑みを浮かべ、俺は笑みをこぼさなかった。

夕食の席、アイラは白いフリルの付いたドレスを着て来た。束ねていた髪は下ろしていて、その真つ赤な髪は腰の高さまで有る。

本当にお嬢様だったんだ、というコメントは止めて綺麗だと褒めると、アイラは頬を染めた。

どうやら、女の子扱いが嬉しいらしい。
出会い頭に剣を抜いて切り掛かって来るのだから、女の子扱いはされないだろう。

今日ばかりは客人として夕食に招待された。
長テーブルに三人だけ座ると言う、なんだか悲しい食卓。

「そう言えば、ナインはラザウェル王国から来ただろう？ 魔法は使えるのかい？」

不意にルイスがそう言つて、フォークに刺さっていた牛肉のステーキがぽとりと鉄板の上に落ちた。
魔法？

おいおい、科学と魔法が対立しているんじゃないのかよ。

「まあ、使えると言えば使えますが……」

「ナイン。別に我が家では魔法を毛嫌いしてはいないわよ。この国では魔法が使えない人が多い分、魔法を嫌っている人は多いけどね」

まずい。俺のギルバート帝国の想像図が崩れて行く。

魔法が使えない者が、魔法を使わない代わりに科学を発達させたのではないのか？

そして魔法を根絶させるため、戦争を仕掛けているのかと思ったのだが。

「……出来ないのかい？」

俺が黙り込んだのを見て、ルイスは心配そうに声をかけてくる。

「いえ、そういう訳ではなく……」

俺の『創造魔法』は、はたした魔法か？

ここでそれを見せておけば、今後の生活で惜しげ無く魔法を使えるのだが、しかし。

「あれゝ、何でも出来るんじゃないのゝ？」

黙れこの野郎。

その勝ち誇った顔がムカつく。

「そう言えば、料理は一流とか言ってた？」

「そうなのかい？ では、ぜひ食べてたい物だね」

「それはまた後日と言う事でお願いします」

どちらにしても、魔法は使わねばならないか。

「時にアイラお嬢様。お嬢様は魔法が使えるのですか？」

「私？ ちょっとだけならね。ほんのちょっと」

とてもちよつとには見えない。

天は二物を与えずというが、どう見てもアイラは別に思える。

「そうですか。そうでしたら……」

俺は少し考え、指先に炎を灯す事にした。

指先に蝋燭程の炎。

すごく虚しい魔法。

「……それだけ？」

「ぷぷっ」

ルイスはがっかりしたようで、お嬢様は馬鹿にして来たので俺は一言。

「失礼ながら、お食事中でしたので控えさせていただきました。それに、魔法は決して見せ物ではありません故に」

「そ、そうだな。すまなかつた」

「本当はそれしか出来ないんじゃないの？ ナインだけに」

「……ふっ」

アイラのシャレにルイスが吹いた。
色々沸点の低い親子だと解った。
というか、アイラ。凄く負けた事根に持つてる。

夕食後、ちゃんとした風呂にも招かれ、そして部屋へと案内された。

「ここがナナシの部屋。私の部屋の隣だからって襲わないでね」

「むしろお嬢様が襲ってきませんよね？」

「ど・う・い・う意味？」

いや、負けた腹いせに寝込みを襲ってきそうだと。

「なんでもありません。では、明日からは執事として」

「……好きな態度で良いわ。敬語使わなくても良い」

「いえ、はじめが必要でしょう。では、お休みなさいませ」

「おやすみ」

俺は与えられた個室（何故か広い屋敷にも関わらずアイラの隣室）には入り、亜空間を創り出す。

そこからパジャマを取り出して着替え、天蓋付きのベッドで横になる。

お嬢様の隣室だからだろうか、やたらと豪勢だ。

戸棚にしろ机にしろ、全てが月の光で輝いている。

そういえば、この世界の月と元の世界の月は同じだな。

やっぱり平行世界なのか。

夕食に出た料理も見慣れた物だったし、楽と言えば楽だが、新鮮味が無い。

星は空気が澄んでいるからか、別物の空のように綺麗に見えるが。

さて、明日からは執事だ。

経験は無いが、それっぽい事をすれば良いのだろう。

俺に恥をかかせようと執事なんかにしたのだろうか、残念だったな。

俺色に染めてやろうではないか。

「何はともあれ、これであの子にこの業を背負わせずに済みそうだよ、エリサ」

ルイスは写真に写った桃色の髪の女性に笑いかける。

顔立ちがアイラに良く似た女性で、写真の仲では微笑んでいる。

「罪には罰を」

第十六話 意地悪な教育（前書き）

10万PV&1万ユニークありがとうございます。

第十六話 意地悪な教育

「もう嫌だ〜！！」

そう言っただけアイラは逃げ出すように家から飛び出して行った。

軍服を着込み、軍基地へと向かったのだ。

しかし、何故逃げるように？

はて、一体何が悪かったのだろうか？

『世渡り』は元の世界の物そのものを持ち込む訳ではない。

物に宿る魂みたいな物を持ち帰り、具現化させているようなのだ。

そのため、元の世界でどれほど高価だろうが貴重だろうが、こちらに持ち込んでも元の世界で問題は起きない。

そのため、俺がこの世界に持ち込む物は出来るだけ価値の高い物を選んでいく。

今回持ち込んだのも、最高級のスーツ。

執事なのだから、ダークスーツが良いのではと思ったのだ。

が、これがどうにも気に喰わなかったらしい。

「……なんでナナシはそんな上等な服を着ているの？」

「そこまで上等ですか？」

「肌触りが良いし、縫い目も完璧。私の持つてゐるどの服よりも上等よ！」

との事だった。

技術的には作れるだろうが、繊維の質がまるで違うようだ。

そして、朝食。

「……何コレ？」

食材がそのまま食卓に並んでいるのだ。

「ほら、料理出来るんでしょ？ 作りなさい！」

何やら勝ち誇った顔をしたアイラと、苦笑いを浮かべているルイスが居る。

「……一応聞いておきますが、魔法を使ってもよろしいんですね？」

「勿論！ ナナシにそんな事でければね！」

という事で、俺は部屋に戻って料理本を持ってきた。

これは浴場の食堂にも一冊置いてあり、言葉が通じるのはずばらしいと思った一品。

写真に驚きこそ、そこに書かれた写真と文章から料理人ならちゃんと作れるのだ。

まあ、俺の場合は出来上がりを見るだけだが。

「では、魔法をご覧になりたいとの事ですので」

俺は食堂から皿を持って来てもらい、少し思索する。

朝食は何か良いか考えていたのだが、アイラはそれを魔法が出来ないと思いきや笑みを浮かべていた。

結構嫌な奴である。負けず嫌いだな。

まあ、それも一瞬で崩壊するのだが。

「では、ポテトサラダとサンドウィッチにしましょう」

食パン、ジャガイモ、酢と食用油に卵、ハムやレタス、ジャムなどを目の前に用意する。

この異世界、食材に関しては結構充実しているようだ。調理器具は一切無く、盛りつけ用の皿しかない。

「魔法は見せ物ではありません。また、争うための力でもないでしょう」

出来上がりを想像し、食材の上で右手を振る。

瞬間、眩い光が食材を包み込み。

「ざっとこんな物でしょうか」

「……………」「おお！」

綺麗に切りそろえられた、料理本にのったソレそのものが出来上がっていた。

アイラは呆然と突っ立ち、ルイスは感激して声を上げた。

しかし、まあ当然と言えば当然なのだが、味は普通だった。

マヨネーズがないようで、ポテトサラダに関しては舌鼓を打っていたが。

だが、基本的に庶民向けの本、料理は普通、食事は料理長に任せる事で一致した。

もっと色々驚かせて優越感に浸りたかったが、下手に魔法を使って腹を減らすのは嫌だったから止めた。

それに、ここの料理長の仕事を奪って逆恨みを買うのは避けたかった。

まあ、おやつくらいは作るかもしれないがな。

甘党ですから。

食後、俺はアイラの部屋に呼び出された。

アイラの部屋はお嬢様の部屋をそのまま再現したような部屋で（お嬢様なのだから当たり前なのだが、俺の中のアイラのイメージが未だ軍人のために起こった表現）、貧乏生活をしていた俺は部屋の物全て売り払いたくなる衝動に駆られた。

まあ、この世界では俺、『世渡り』で持ち込んだ物を売ればかなりの金持ちになれるけどさ。

天蓋付きのベッドに、赤いもふもふ絨毯、光沢を帯びた戸棚、曇り一つない窓ガラス。ベランダからは城壁までが一望できる。

「ナナシ。部屋、掃除して頂戴」

「かしこまりました」

全てを廃棄しろと、わかります。

俺が悪の魔法使いよろしく不敵な笑みを浮かべて両手を上げ、そこに魔力で出来た球体が出来た所でアイラが抱きついていきた。

膨よか……とは言いがたい胸が押し付けられたが、俺個人としては嗅ぎなれない香水の匂いの方が胸をドキドキさせる物があった。ホワイ？

「ちよっ！ 何しようとしてるのよ！」

「掃除ですが何か？」

「部屋を壊す気でしょ！」

「跡形も残さず綺麗になりますか？」

「どあほっ！」

ぶん殴られた。痛い。伊達に大尉を名乗ってない。
さて、「冗談はここまで。」

「冗談だったんですけどね」

「冗談には見えなかったわよ！ 薄気味悪い笑みを浮かべて！ 夥しい量の魔力を込めて！」

自分の部屋だからか、随分と焦っておられる様子。俺に取っては他人事。

「わかりました。ちゃんと掃除すれば良いのですね？」

「……そうよ。一応見させてもらっわよ？」

「どうぞ自由に」

俺は掃除道具を取つてくると言い、一度自室に戻る。

一度家を造った時に掃除道具は持ち込んでいて、今は亜空間にあるのだが、亜空間を生み出す魔法を見られるのはまずいと思った。

電氣が使えないこの世界、元の世界の掃除機は使えなかった。だから、改良してみた。

風の魔石を動力部分に使い、吸い込みを実現した一品。

部屋に有る物の大半は綺麗になっているので、それで十分だろう。驚かせれば良いのだ。

「……何ソレ？」

「掃除機ですよ」

「？」

何なのかさっぱり解らない顔をしているので、電源を入れる。
どうですか、みるみるゴミが吸い寄せられて行くでしょう！
という展開にはならない。

なぜなら、ここの屋敷仕えるメイドさん達が有能過ぎたからだ。
とりあえず、見た事の無い機械を見てアイラは驚いていたので良ししよう。

元々アイラの目的は俺が四苦八苦して何かをする所を見たいのだから。
一度驚かせ冷静な分析力を削いでしまえばいいのだ。

掃除機に関してはメイドさん達に譲り渡した。

俺の代わりに掃除をすると言う条件で。仕事を奪うのはまずいかな。

という事が有り、アイラは屋敷を飛び出して行った。
自分の家だと言うのに。

慣れない執事という仕事で四苦八苦する俺をバカにしたかったのかもしれないが、伊達に万能と揶揄された訳ではない。

「さて、じゃあ俺は街を見てくるかな」

スーツから学生服へと着替え、目立たぬようにマントを羽織る。
あまり変わっていないが、スーツはあまり汚したくない。
どうせ俺は貧乏性ですよ！

元の世界で名古屋に当たる都市である。

蒸気機関が発達していかないのか、車のようなものは見当たらない。代わりに、魔石を用いた技術が異様に発達していると言える。

大量生産大量消費の時代はまだ来ていないようだ。

科学というよりは、魔法学が発達したと言っべきだろう。

街の治安も良く、通日も綺麗な物だ。

国全体が豊かで、奴隷の扱いも良いのか、一通り街を歩き回ってみたが一目で奴隷だと解るような人は見なかった。

本当に良い国だ。

で、なんで戦争になろうとしているのか解らない。

ジェイホード家の人に聞けば良いのだが、それは非常にためられる事だ。

間違った知識を植え付けられたくはない。

軍基地へ赴き、戦闘じゃまだ負けると言ってトレーニングしているアイラに、俺は銃の扱い方を教えると言った。

勿論、裏があつての事だ。

そして??。

「どうよ、ナナシ！」

弾け飛ぶ木片を見ながら、俺は溜息をついた。

場所は軍基地の射撃訓練場。今は俺とアイラしかない。

木でできたターゲットの中心をライフル銃で撃ちぬき、アイラは自慢するように俺に言った。ターゲットに当たるが真ん中には当たらない俺に勝てて嬉しいのだろう。

射撃は、今の特性ではどうにも出来ない事だ。

まあ、また『創造魔法』で特性付加の魔法を創れば良いのだが、それは労力を使うので却下。それと、何もしなかった時の自分の強

さを見たくなつたのだ。

結果は、やはり平凡な物だった。

しかし、銃を持って喜ぶ姿はお嬢様としてはよろしくない。

お嬢様はお嬢様らしく、家督を継ぐ勉強をしていれば良いのだ。

軍人だったら、いずれ争う事になりそうだからな。

「お見事です。……時にお嬢様、お嬢様は人を殺した事がありますか？」

「唐突に何よ……。今の所は無いけど？」

それは良かった。

それならば、簡単にこの教育を切り上げられる。

「では、お嬢様は何故軍人になられたのですか？」

「何故って、強くなりたから」

「強くなってどうするのですか？」

「国民を守るためよ」

志は良し、だが覚悟が足りないな。

俺はターゲットがある方に歩いて行き、未だ壊れていないターゲットの横に立った。ちょうど俺の頭の高さにある。

「ではお嬢様。俺の横にあるターゲットを撃ってください」

「えっ!？」

アイラは声を上げて驚いた。

人を撃った経験は無い、実践の経験も皆無かな。

となると、ジェイホード家の地位はそこそこか。

いくら強くても実戦経験皆無の人間だ。強さだけで大尉まで上げたりはしないだろう。

「くれぐれも外さないくださいね。お嬢様も知っているでしょう？ その銃はいとも簡単に人の頭を吹き飛ばす威力を持っていますから」

この世界の銃は火薬を使っておらず、風の魔石を用いた風圧で鉛玉を飛ばす。強力なエアガンだと思えば良い。いや、人の頭を飛ばして尚そんなネーミングはアウトか。

「わ……解ったわ」

アイラはライフル銃を構える。俺の強化された視力で、アイラのライフルを持つ手が震えているのが解った。

実に軍人には向いていない少女だ。

戦いのセンスだけでその地位まで登っているのだから、未恐ろしくも有る。

だからこそ、ここで諦めてもらおう。

力なんて、自分と大切な物さえ守れば不必要な物だ。

俺は微かに笑みを浮かべる。

そして、弾ける音が響き??。

ナナシに撃てと言われて驚いた。

もし間違えば、ナナシは怪我をする。いや、死ぬかもしれない。たかが練習で、命を駆ける必要など無いはずだ。

ムカつく奴だけど、……私には何故だか憎めない。だから、きつと死んでしまったら悲しい。だから、こんな危険な事はしたくなかった。

だけどこれはナナシが私を試しているのだ。

簡単に人を殺す銃を手にとって、敵と味方が入り交じる戦場で、敵だけを撃てるのかと。

やってみせるわよ。今まで一発も外した事は無いんだから。

けど。

どうしてか、嫌な予感に体が震えていた。

この引き金を引いてしまえば、何か取り返しのつかない事になりそうなの……予感。

引き金にかかる指が震える。ふと見れば、ナナシは笑みを浮かべている。

これ以上バカにされたくない！

私は震える指に鞭打って、ナナシの隣のターゲットに銃口を向け、引き金を引いた。

そして、銃声が鳴り響き??。

「え……?」

ターゲットではなく、ナナシの頭が弾け飛んだ。真っ赤な火花が打ち上げられた。

ナナシの体が、重力に従って力なく崩れ落ちた。
地を血が染め、動かない肢体は死体にしか見えない。

「いやあああああああああああ！！」

嘘だ！ 嘘だ！ なんて……どうしてこんな事に！
銃を放り投げ、私はナナシの元へと駆け寄る。

「ひっ！！」

だけど、そこは近寄りたいたいと思えない惨状だった。
砕け散った頭骨からはみ出た脳みそ、ぐじゅぐじゅな液体が穴から溢れ出ている。思わず一瞬怯んでしまう。

吐きそうになりながら、それでも私はナナシの元へ辿り着きその
体に触れる。

「……な、ナナシ？」

二度と答える事は無いと解りながらも、聞かない訳にはいかなかった。

ナナシの体は温かい。当たり前だ、つい先ほどまで生きていたのだから。

そして、立った今私とその命を奪ったのだから。
だんだんとその体も冷たくなって行く。

「……うつ、ひっく」

視界が霞む。目頭が熱い。どうして？ たった二日しか一緒では
なかったのに。

それでも、何故か鮮明に、ありありとその記憶が目の前に広がって。

そうか、私は??。

「どうですか？　これがお嬢様の傲慢なさっていた事ですよ」

へ？

「お嬢様。あなたが振るう力は、人の命を奪う力です。銃とは兵器です。そして、人の命は失われれば、決して戻る事は有りま??。げふ」

ぶん殴られた。本日二度目。

いかん、すぐ横に立って居たのは間違いだった。

『創造魔法』で作り上げた幻覚は、少々リアル過ぎだったかもしれない。

俺の横には、しつかり破壊されたターゲットが有る。

本当に、妬ましいくらいの才能だ。

「痛いです。おじよ??」

「???死んだと思った!」

瞬間、アイラの瞳に小さな雫を見た。

あれ？　なんで？　俺ってそんなに愛されるような奴だったか？
……ああ、そういう事が。

「ナナシの頭が弾け飛んで、力なく倒れて！　動かないし冷たくな
って行くんだもん！　死んだと思った！」

「……すいません。心配かけましたね」

俺はそつとアイラの頭を撫でてやる。
久々だな、優しさに触れるのは。

「ですがお嬢様。もし、これからも銃を手に取り続けるのであれば、
覚えていてください。あなたが奪う人の命は、戻ってきません。お
嬢様が俺を心配してくれたように、命を奪われた人にも同じような
人がいる事を、忘れないでください。人が死ぬのは悲しく、そして
辛い物です」

コクコク頷くアイラに、小さく笑みを作って頭をもみくしゃにし
てみる。

「ただ、時には奪わなければならない時もあるはずですよ。お嬢様が
守りたい物が冒されたとき、殺さなければ殺されるような時がある
でしょう」

「……その時は、どうすればいいの？」

目に涙をためて上目遣いは、なかなか俺の心に突き刺さる威力が
あった。

急に子供っぽくなったな、と内思いながら俺は答える。

「今は考える必要は有りませんよ。その時、自分の素直な思いが出るはずですから。本能のまま行動して下さい。まあ??」

俺は不敵な笑みを浮かべてみせる。

「俺がお嬢様の執事をしている限り、そんな事はありませんけどね」

勿論、それは長くはない。

情報収集にこの地位はちょうどいいから居座っているだけなのだ。だが、将来的にも一つの拠点と出来そうだ。

司法と軍事、それは俺の介入したい事である。

そのため、せいぜい俺色に染まってくれ。

悪いようにはしませんから。

第十六話 意地悪な教育（後書き）

スランプです。

書きたい事が書けませんでした。

あと、そろそろ賞に応募する作品を執筆しなければならないからです
ね。

そのため、更新はかなり不定期になります。
すいません。

第十七話 決断は銃声と共に

魔法と科学の対立、それは単なる比喻でしかなかった。

二つの国が戦争になる理由は、魔法が妬ましいという事ではなかった。

むしろギルバート帝国は人体実験をしてまで、魔力が無い人間にも魔法を使えるようにしようとしていた。

魔力は生まれた瞬間からその有無が決められており、努力でどうにかなるものではないと言う。だから、細胞レベルでの問題と判断し、人体実験を行なった。

魔法を使えるようになるなら、と人々は協力する訳だ。

その成果は知らないが、とにかく魔法は両国で認められているのだ。

ならば、戦争は、何故起こるのか。

それは??。

「ナイン……」

深夜、俺の目の前には一人の少年が居る。背後にはアイラが、部下を引き連れて銃を構えて立っている。

場所は街中の袋小路。少年の背後には絶壁。

昼間、国境付近をうろついていた少年は、見回りをしていた軍人に怪しまれ、問いつめようとした所逃走。現在、俺達に追いつめられている。

そして俺は、選択を迫られている。

「ナイン殿、お決めください。我々はあなたをこの国の人間として正式に迎えたい。だから、その薄汚い魔族を！ 我らが敵を血祭り上げてください！」

俺の目の前にいる少年は魔族。

この国は、魔族を嫌悪していた。

それが、二つの国が戦争になろうという理由。

ラザウェル王国は魔族と共存しているが、ギルバート帝国はそれを許さない。

人種差別ではなく、種族差別。魔族は人ではなく、魔物だと。共存すべき生き物ではないと。

俺は問われている。

ここでこいつを殺さなければ、俺は背後から撃たれ、完全にギルバート帝国の敵となるだろう。

ここでこいつを殺せば、俺はこの国の味方となって魔族討滅に加担する事になるだろう。

だが、それでいいのか？

魔族と人間の違いなど、耳が尖っていて不思議な力を放っているか、その程度のものだ。

ウサギや地竜を殺し、それでも人だけは殺さないと俺は言った。だから俺に問われているのは、こういう事だ。

魔族は人であるのか？

……答えは、決まっている。

俺は右手に銃を創造し、それを握る。

少年の顔は強張り、膝は震えている。死ぬのは怖いんだろう。
引き金は、酷く重く感じた。

いずれにしろ、人は死ぬ。

種族差別が根源では、戦争なんて止めようも無い。
そろそろ俺も割り切らねばならないのだ。

銃声。

もう、決めた事だ。今更引き返せない。
準備万端ではないが、それでもいい。

少年の頭が弾け、その体は倒れた。

「お嬢様、これでよろしいんですか？」

「……………ええ。よくやってくれたわ、ナイン」

その声を聞き、アイラの部下はほっと溜息を吐き、銃を下ろす。
幕が開いた。

アイラの泣きそうな顔が、印象的だった。
下準備くらいは整っているようだ。

第十七話 決断は銃声と共に（後書き）

この調子だといつまで経っても作者の書きたい部分に辿り着けないので、ストーリーのスピードアップ。

急展開すぎるかもしれませんが、時間が空いた時に付け足して行くことと思いますので、あらかじめご了承ください。

感想、意見、指摘お待ちしております。

第十八話 未来への下準備

「やっぱり、行くの？」

朝日が昇ろうかと言う時刻、俺はジェイホード家の自室に居たはずだ。

なのに部屋にはアイラもいて、悲しそうに俺を見ている。

それにしても、一度見せた幻覚、やはり気付いていたか。

銃弾をペイント弾にし、睡魔の魔法を掛け、後ろの人間に幻覚を見せたのだ。

死体は丁重に扱いたいと言って少年の体を引き取っておいた。元々情に熱い男としてアイラの部下には知られていたので、問題なかった。

俺は未だに寝ている少年を袋に積める。多少息苦しいかもしれないが、それで死なずに済んだのだから良いだろう。

「すみません。俺には魔族と人間の違いが解りませんでした。何故共存出来ないんだ？」

「……一般的に人間に害を成す者が多いからだと思う。吸血鬼は血を吸う、獣人は野蠻、サキュバスは人を騙す。それに、彼らは人間より強いから。いつ牙を剥いて襲ってくるか解らないからだと思う」

なるほど。よく考えてみれば、元の世界でも吸血鬼や狼男は嫌われていたしな。

異世界のためか、俺の感覚も狂ったのか。

「だからと言って、彼ら全てがそういう訳じゃないだろう？ 俺はや

っぱり平和主義者。皆仲良くが良いんだよ」

「……ふふっ。ナナシはそういう喋り方の方が好きね」

「ありがとうございます。……と、最後に教育係として一つ良いですか、お嬢様？」

「……いいでしょう、何？」

「情けは人のためならず。間違った意味に取らないでください」

キョトンとした顔を見せるアイラは、新鮮だった。

「あと、これは教育係としてで無く、俺個人の事で」

俺はペンダントをアイラに渡す。

「これは俺が作った物だから見栄えは悪いけど、効果はあるはずだから。良かったら付けてくれ。悪い効果ではない」

作ったと言っても、元の世界からだいぶ前に持ち込んだ、スターサファイアに紐を通しただけの物だ。いや、だけとか言ったらスリランカの国宝に悪いか。

それにちよつと『創造魔法』で小細工している。

状態異常に耐性を付ける、という効果を付けておいた。アイラの母親が毒殺されたから作った物だ。

「……良いの？ 高そうだけど」

高いも何も国宝で、この世界では考えられていないタイプの魔石

だ、という事は言わず素直に頷く。『創造魔法』にも限界があるように、思ったより付加効果が弱くなってしまった。本当はついでに命の危機も救うような効果も付けたかったのだけれど。そもそも、今現在この世界にはそういった付加効果を生み出す魔石は存在しないとか。戦乱時代にはあったという、貴重品である。

正直、こんな物で俺の代わりにしようというのが間違いなのだ。俺の魔法の異常さは見ている事だし、敵に回られたら溜まらないと言って拘束されるかもしれないも思っていた。

まあ、色々と教育したから大丈夫だろうけど。

せっかくの教え子と別れるのは辛いし、もう少しバカに??じゃなかった、お嬢様相手に優越感に浸りたかったが、それはお楽しみにしておこう。

素直にプレゼントとして受け取ってくれ。

「ありがとう、ナナシ。大事にするわ」

そう言つて早速首に掛けてみるアイラ。赤い髪に青の宝石か。まあ、良いんじゃないかな。

「それじゃ、ルイスにもよろしく言っておいてくれ。もしかしたらまたお世話になるかもしれないしな」

「わかった。……気をつけて」

「おいおい、今度会う時は敵だぞ？」

「解ってる。また会えるって」

これ、ポジティブシンキング？　なんか違う気もするけど、まあ

いいか。

「じゃあ、アイラが元気でいる事祈らせてもらっよ」

「ナナシも、元気でね」

俺は少年の入った袋を手にとって振り向かずに手を振り、そして瞬間移動。

俺はギルバート帝国を飛び、ラザウェル王国、チヨダの森に有る自分の家へと飛んだ。

「行ってしまったのかい？」

「……ええ、お父様」

先ほどまでナインの部屋だった客室の扉を開け、ルイスがアイラに尋ねた。

全てを悟っているような、そんな口調だった。

「彼とはきつと、また会えるだろう。その時は敵でありたくない物だね、アイラ」

「……大丈夫。次は私が倒して、ナインの教育係になりますから」

「え？ 何を言ってるんだい、アイラ？」

「なんでもありません」

娘が言うには樂觀視出来ない台詞が聞こえた、とルイスは焦った。しかしアイラはしれっと誤摩化してしまった。ルイスは溜息をつきながら、それでも続けた。

「まあ、僕には少しばかり彼の未来は心配だけだね。出る杭は打たれてしまうから。特に、変わらないラザウエル为重鎮は、どうだろうか」

「？」

そう言えば、お父様は一度ラザウエル王国に行った事が有ると言っていたな、とアイラは思い出した。

そして、その言葉の意味は、不吉にしか思えなかった。

「さて、僕らものんびりとはしてられない。戦争は起こる。絶対に。その結果はどうあれ、きっと彼は大舞台に出る。そのとき、胸を張って仲間でいられるように努力しようか」

「……はあ？ お父様、一体何を考えているのですか？」

ルイスは眼鏡の位置を直し、遠くを見つめて言う。

「なに、私の直感が物を言っている。論よりも証拠よりも直感、それが私の裁き方。それで慕われるのだから、この直感に間違いは無い。それならきっと、彼は……」

「彼は……何ですか、お父様」

ルイスは、白い歯を見せながら言った。

「彼はきっと、英雄になるだろうね」

アイラは父親の頭が心配になって来た。

まさか裁判を直感で行なっているとは思っていなかったのだ。

そして、その英雄になる人物の事を考えると、少しだけ胸が痛かった。

第十八話 未来への下準備（後書き）

あまりにも短かったので更新。

今の状態は第一部。書きたいのは第二部。

どんどんストーリーのペースを上げて行こうと思います。
第二部の方が設定がしっかりしているので。

第十九話 魔族の少年

「おっ、気付いたか？」

「おっ、お前は！」

見た感じではどの種族か解らないが、耳が尖っているので魔族だと解る少年は、目を覚ますと同時に後ずさりを開始。

無理も無いだろう。自分が意識を失う前に銃を突きつけていた男が立っているのだから。

「あゝ、安心しろ。ここはギルバート帝国じゃないから。ラザウエル王国だからな」

「ッ！？ ……て、天国の間違いじゃ……ない？」

お前、人の事まで勝手に殺すなよ。そして地獄とは言わない辺りが図々しいと言うか、悪事は働いていないと言う事か。せつかく助けたのに、獄悪魔族でした、みたいなオチは勘弁である。

「一応助けてやったんだ、感謝しろよ？」

お前の所為であんな急展開になったんだ！ そうじゃなきゃ今頃俺は、アイラに道德だとか倫理だとか、きやつきやつうふふのお勉強タイム中だったんだよ！

道德や倫理を教えて、どうして桃色の展開になるのだろう。なんでだろう、疲れているんだろうか。そう言えば、最近アイラが部屋に忍び込んで来ていて『世渡り』どころか満足な睡眠も出来ていなかったっけ。俺、あと数日あそこに居たら睡眠不足で死んでたか

も。というか、なんであいつは俺の部屋に入り込んで来ていたんだ？
まさか、寝首をかくためか？

あつはつはつは、あり得そうだな。変にプライド高いし。あり得ないと願うけど。考えによっては、こいつは俺の命を救った事になるのか？

だからといって、態度を変えようとは思わんがね。

「あ、ありがとう……」

「素直でよろしい。……んで、なんで戦争間近のギルバート帝国に行っていたんだ？」

「それは……」

長かったので割愛。

要約すると、母親が病気にかかり、薬草を取りに行ったら検問で怪しまれた？？という事だった。ちなみに、ギルドに出ていた依頼はコイツが出した物らしい。

「薬草ねえ……。魔法じゃ駄目なのか？」

「呪いを打ち消す魔法なんてないですよ」

何言っただこいつ、と言った風にジト目で見られた。

知らなかったんだ、では済まされない事も有るから注意しよう。

俺は悪くねえ！

「そっか、じゃああんまりここにいるのも良くないな。さっさとお家に帰りなさい」

「無理矢理連れて来たくせに何を……」

「おいおい、助けてやったんだぞ」

「最後まで責任を取ってください！ 泥舟に足をつっ込んだと思って！」

意味解らん。

大船に乗ったつもり？？じゃないよな。乗りかかった船？？か。泥舟って、そのまま泥沼に嵌りそうな言い方だな、おい。

「なしてだよ、少年。自分でギルバート帝国の京都まで行けたんだろ？ それなら帰りも大丈夫だろ。まさか、行きは楽々、帰りは地獄なんて言わないよな」

「少年言うな！ 僕はシュウ・ヘイグ。埃被ったヴァンパイアー族の出来損ないです！」

何一つ威張るポイント無いでないか。

埃被った？？じゃなくて、誇り高きだろ？ 出来損ないという点には、異論は無い。語学が特に駄目なんじゃないかな。

「僕はヴァンパイアの中でもとりわけ魔力が小さいから、ヴァンパイアーの欠陥品ですよ！ 誰も僕をヴァンパイアとは見抜けないんです！」

凄く悲しい事を自慢するでない。

しかし、言われてみればヴァンパイアに見えなくもない。フードを被って直射日光を避けているのか肌は白いし、微妙に伸びた犬歯が見受けられる。

「あゝ、もしかして、襲われたら死んだふりしてたのか？」

「な……何故ソレを！？」

いやいや、ヴァンパイアで魔力が無いなら、不死以外に取り柄が見つからなかったんだよ。

変身能力とかあるか怪しいし。

「実力皆無、運だよりで生きて来たのか。で、死んだふりも面倒だから俺に護衛しろと？」

「そうそう、おまけに行きはドラゴンで送ってもらったんですよ。ね、コレも何かの縁ですから」

男に『ね』とか言われても嬉しくないんだけど。

いくら中性的な見た目でも……ねえ。なんかムカつく。

そして、縁って何だよ。縁だろ、縁。

確かに字面は似ているが、間違えるな。お前は脳内で一度手書きして、それを読んでいるのか？

「あゝ、どうすっかな」

俺はこのあと、浴場の皆に顔見せて、それからリースや姫さんに会って、どうにか戦争に勝つ方法を探したかったんだけど。

ここで魔族の一人と絆を結んでおけば、後々便利なパイプラインが出来上がるのは間違いないな。自称欠陥品で多少まずいかもしいないが、欠陥も穴埋めすればどうにかなる。

「うゝん」

「ほら、助けてくれたお礼に、魔族に伝わる魔剣とかプレゼントしますから」

「よし乗った！ ちょっと待っていてくれ、明日には出発しよう」

そうと決まれば、今日中に顔見せしてこよう。

え？ 別に物に釣られた訳じゃないんだよ？ そんな、魔剣なんて……ねえ。

見てみたいに決まっている。

正直、城下町に売っている魔剣は、俺が作った地竜の武器以下だ。というか、地竜の武具であそこまで儲かったのだ。魔族に伝わる魔剣を見せてもらって、俺が大量生産すれば戦争も楽勝ではないか。まあ、創れるか創れないかは置いておいて、俺が創ったようなパチモンではなく、本当の魔剣を一度見てみたいと言うのが本音だ。魔族と信仰深めておきたかったのも本音。

「うわあゝ、めっちゃ簡単に釣れたよこの人。大丈夫かな……」

「声に出てるぞ、シュウ」

「あつ、僕ら魔族は戦乱時代で荒廃した北の土地に住んでいるんで、生半可な気持ちで行ったら死にます。あの土地は魔族でしか統治出来ないんですよ。元は平野だったんですが、今は戦乱時代の遺跡が土地の大半を占めていて、劣悪な土地なんです」

もの凄く重要そうな事を慌てて付け足すシュウ。誘ったお前がもの凄く生半可な気持ちにしか見えないのだが。

それと、そういえばこの世界は戦乱時代という過去の方が文明が発達していたんだったか。

過去の遺産を持ち出せば、不利な状況も打破出来るか。
変な物掘り出さなければだが。

「ここから行くには、どうやっても山脈越えをしなければ行けなくて、おまけに豪雪地帯で、寒さに弱い人間じゃ暮らせないんですよ。おかげで米の生産量は世界一ですけど」

世界（日本）で有名な米所、山脈越え、豊富な積雪、元の世界では平野。

新潟はどうやら、魔族が統治する土地と化しているようだ。

それより北はどうなってるんだろう。

気になるな、出身地北海道。

予想では、未開の土地。ドラゴンなんて便利な生き物が居るのだから、上空から大陸の形を見て、地図には出来るもんな。

そういえば、ギルバート帝国では米を食べる事はあまり無かったな。魔族が作った米など喰えるか、という事だろうか。

「まあいいさ。じゃあ、ちょっとここで待っていてくれ。あ、風呂入るか？」

「入ります。宿屋ではほとんど入れなかったのさ」

ちなみに、ギルバート帝国の宿にはお風呂が付いている。温泉ではなく、ただのお湯だが。

久々に戻って来た我が家の浴槽にお湯を満たし、シユウに好きなように使って良いと伝え（シャンプーやシャワーの使い方はあえて説明しなかった。少し時間がかかるから、せいぜい楽しんでくれたまえ）、俺は浴場へと向かった。

「よっ、グレン。繁盛してる？」

「だ、旦那！　いつ戻ったんですか？」

どうどうと玄関から入り、そこで接客（どちらかというと目利き）をしていたグレンに軽く声をかける。時間は十時頃、一番客の入りが悪い時だ。ぱつと見た感じ、ホールには誰もいない。

「ついさっきだな。ただ顔見に来ただけだ。……悪い事してないよな？」

「勿論でさあ！　旦那に頂いた金貨がまだ大量に残ってまさあ！」

「ん、ならいい。従業員も健康？」

「へえ。毎日仕事上がりに風呂に入ってますから、町人よりよっぽど綺麗でさあ。何人かは求婚されたほどですぜえ！」

「そりゃ良い話じゃないか。勿論、自由にさせてるだろ？」

「ただ、光の魔石が最近暗くなって来てまして……」

「だろうと思った。今は日が昇ってるから大丈夫だろう。回収してくれ。あと、フーを呼んでくれ」

光の魔石は長持ちしない事に定評があったからな。最も、『創造魔法』で一度分解し光のマナを取り込ませ創り直すだけで簡単に復

活する。本来ならば特別な神殿だとかで光を集めなければならぬが。フーに渡しておいた『創造魔法』で作った治癒の魔石もそろそろマナが切れる頃だろう。

幸い、シユウを連れて来てから『世渡り』で栄養ドリンクを持ち込んでいる。

光の魔石と治癒の魔石にマナを注ぎ、俺は城へと向かった。

久々に来たトウキョウの街は、随分と寂れているように見えた。ナゴヤの町並みと比較すると、凄く残念だった。石で舗装された大通りに、街灯は無い。技術なら後にでも上げられる。差別が無い方が良い。

大通りを真っ直ぐ行けば、城へと辿り着く。そう言えば、城に来るのは初めてだな。

シルフェイド城というらしく、某ネズミの遊園地の城そっくりだ。城にどうやって入るか悩んでいると、たまたま見慣れた顔を見つけた。

「ナイン！」

「おっ、リース。元気にしてたか？」

「はい！」

出会い頭、突然抱きついて来たリースを受け止め、俺はその頭を撫でてやる。

どうやら今日は休日らしく、街で買い物をしていたらしい。

しばらく見ないうちに、可愛くなったなあ……って、俺はロリコンじゃない。

「……ナイン？」

と、その名前を不思議に思っているのは、リンだった。そう言えば、俺は名乗った覚えが無い。

「ああいや、俺の名前……の一つ」

今現在、三つも名乗る名が出来てしまった。言い逃れに便利かとも思っている。

「まあいいや。アンタ、どうしたの？ どっか行ってたんじゃなかったの？」

「帰って来たら一度顔を見せておこうと思ってな。またすぐ出かけるけど」

「ナイン、今度はどこに行くんですか？」

「新潟」

「「……………」」

不意に黙る二人。

あれ？ 新潟って地名は無いのか？ いや、違うな。コレは既視感がある。

「……アンタ、死ぬ気なの？」

「ごしゅ?? ナイン、やめてください！ あそこに行くのに通るエチゴ氷山は、魔獣の巣窟です！」

リースがご主人様と言いつことになると言つ事は、よっぽどの事だな。

「いやあ、ヴァンパイアの護衛を頼まれてな」

「ヴァンパイア!? ……の護衛? 何ソレ。ヴァンパイアって魔族の中でも強い方だし、大分前に絶滅したって聞いているけど」

もしかして騙された? いやいや、本人があそこまで言うんだから、本当だろう。まさか電波ではないだろ。

「いやいや、俺は大丈夫さ。問題は、戦争になろうとしている騎士の方だよ。今のままじゃ間違いなく負けれると思うが、何か秘策でもあるのか?」

「そんな事言つて、帝国に情報漏らすんじゃないでしょうね? ……まあいいわ。ちょうどいい、アンタを王様に会わせるわ」

「なして?」

「アンタに会いたいつて言つてたのよ、王様とお姫様が」

……丁度良い。

この国の上層部がどれほどの物か、見せてもらおうか。

このとき、俺はまだ知らなかった。
この国の暗部を。

第十九話 魔族の少年（後書き）

やはり駆け足です。

第二十話 忠誠の結晶騎士（前書き）

1 / 2 8 若干付け足し。

第二十話 忠誠の結晶騎士

「ほお、君が噂の木こりか。娘から話は聞いているよ」

「恐縮です。自分の事はナインとお呼び下さい」

リンに案内されシルフェイド城内、謁見の間へと俺は通された。
真つ赤なふかふか絨毯に膝を付き、大臣や騎士などが見つめる中、
玉座に座る王様に頭を垂れる。玉座の横にはレーン姫が座っており、
俺の横にはリンとリースがいる。

しかし贅沢な絨毯なこと。俺だったらここで寝られるね。土足で
上がりたくもなかった。

そして、どうやら最初に木こりだとか言ったのを信じていて、名
前は無いとちゃんと理解していたようだ。しかし、今となってはナ
インを名乗る以外に道はない。

ラザウェル王国国王、グラス・リア・ラザウェルは人の良さそう
な顔をきつと引き締め、威厳を込めて俺に言う。

「うむ、ではナイン。突然で悪いが、我が国の騎士となってくれま
いか？」

「断らせてもらいます」

迷う必要は無い。そう言った瞬間、レーンが嬉しそうにしたのは
何故だ？

まあ、可愛いからいいけど。

「貴様ッ！」

「よい、レーンも断られておるのだ。理由だけは聞かせてくれぬか？」

一刀両断に大臣の大半が切れたが、王様が落ち着かせてくれた。その王様は何故だか目を潤ませているが。全然魅力を感じない。

理由？ そんなの、決まっている。

「俺はこの国の事を良く知りません。だから、忠誠を誓う事は出来ません。……ですので、傭兵としてならば、この国に仕えてもよいかと考えております（戦争参加と戦果を上げるだけなら、忠誠なんて誓う必要ないからな）」

「なんと、本当か！？」

「はい」

さすがの俺も王様相手に面と向かって嘘をつく気はない。というか、王様。少々顔に感情を出し過ぎだ。一人の人間としては惹かれる要因ではあるが、一国の王としては駄目だな。

王と言うのは苦渋の決断をする時が必ずある。アンタはそれが出来そうにない。

「そうか……良かった。実はな、レーンに聞いておったのだよ。おぬしの実力とやらをな」

「……そうですか」

げっ、能ある鷹は爪を隠す、失敗した。こりゃ、出る杭は打たれるな。先ほどから大臣らしき人物達が高圧的な視線を投げてくるし。まあ、打てる物なら打ってみろ。打てるのは打たれる覚悟の有る

奴だけだ。

「グラス王、お言葉ですが、この者は本当に強いのですか？ 魔力もほとんど感じませぬし、剣技に冴えているようにも見えません。そのような者を傭うなど……」

と、一人の男がそう進言した。恰幅の良いおっさんで、恐らく大臣などの重鎮だろう。

む、結構見る目が有る奴も居るのだな。俺の本質は平凡。『創造魔法』が無ければ、そこらの一般人と変わらないのだ。万が一、魔法を完全に無効化する能力があれば、俺は一瞬で雑魚になる。

この調子で俺の前評判を落としてくれると助かる。ギャップが大切だ。

というか、それが本当の俺な訳で、あまり期待しないでほしい。戦争を犠牲無く終わらせようとする幻想を抱いた生き物だから。

「ゼイル、貴様は僕の娘の言葉を信じられぬと言うのか？」

ギロリとゼイルと呼ばれた大臣を睨みつけるグラス王。当のレインはどこ吹く風と言ったようだった。どうやらグラス王、親バカみたいだ。

と、グラス王がちらりと俺を見た。

「しかし、ゼイルの言う事も最もだ。そなたが本当に強いのか、試させてもらっても構わぬか？ 騎士の一人がおぬしに興味を持っておつてな。一戦交えたいと言っておつたのじゃ」

「……………」

どうすっかな。

実力を隠しておきたい、というのではない。

正直、勝てる気がしないのだ。

俺の実力は平凡、Ｃランクだ。戦いの経験だって無いに等しい。いくら『創造魔法』でチート特性を付与しているとは言っても、それは付け焼き刃に過ぎない。

現に、俺が今まで戦った（？）奴らは、全員が不意打ち紛いの先手で負けている。それが今回も通用すれば良いのだが……、凄く不安がある。

話を聞く限り、その対戦相手、俺の噂を聞いているようだ。

銃や瞬間移動、俺の勝利は全て不意打ちだ。タネが解れば対処も可能だろう。何より、興味を持って一戦交えたいと言っただから、勝算あつての事だろう。

負けてもいいが、ここで負ければ後々の計画（戦争で前線に立たせてもらい秘策を用いて犠牲無く武勲を上げて、この国の上に居座る。そこから魔族を認めさせ国を一纏めにする計画）に何かしらの影響が出そうだ。具体的には、戦争の前線に立たせてもらえなさそう。

その秘策を使えばこの一戦もまず勝てるだろうが……。

「わかりました。良いでしょう」

考えてもどうしようもない。最低限、こちらに付くと明言しておかないとまずい。新潟に行く以上、戦争に最初から参加は無理だろう。飛び入り参加して、両方を相手にするのは避けたい。というか。

期待と信頼の眼差しで俺を見ている奴の視線が痛い。

一体どうしてこんなに好かれたかな。好みのタイプだから文句は言わないが。

いっちょ頑張りますか。

ああくそ、俺って惚れっぽかったかな。

城内にある100平方メートルはあろうかという広場、そこにそいつはいた。

エメラルド色のショートヘア、輝く銀の鎧、そして……手ぶら。その男が、俺に気付き近づいて来た。

「貴殿が噂の木こりか。私はジウド・クリアス。ジウドでいい。騎士隊長だ」

「ジウド、か。俺はナイン。今は旅人兼傭兵と言ったところかな」

ジウドが手を差し出して来たので、俺も手をさし出し握手する。おかしな事に、ジウドの手はまめがなかった。騎士なのに、剣を握っていないのか？

「では早速、手合わせ願おうか」

「ちょっと待った。ジウド、武器は要らないのか？」

そう言った瞬間、俺とジウドの戦いを見に来ていた大臣っぽいおっさん達の間から忍び笑いが漏れ出した。

あれ？　もしかして超有名人？

「情報も武器の一つだぞ、ナイン殿」

「……あつそ。じゃ、早速始めますか」

審判はレーンが勤めるらしく、俺個人の意見としては公平な判断がされるか心配だった。うぬぼれているのかもしれない。そうであ

って欲しいと言う願望かもしれない。

「始めっ」

そのレーンの声と共に、俺は懷に手をやり、エアーガンを取り出した。

秘策は使わずに倒そう。

所詮銃は高速で魔力を放つための補助アイテムに過ぎない。碌に照準を合わせず、俺は引き金を引いた。

ダンッ！ と音速を超えて発射された魔力が、固い物に着弾した音が聞こえた。

「それがギルバート帝国の武器、銃か。私の放った間者は優秀でな、一応情報だけなら聞いていた。実物を見た事は無いが……大した事は無いな」

「……すごいな」

ジウド・クリアスは腕を組んでいた。『鉄壁のグレン』を軽々と吹き飛ばした銃弾を受けて一步も動いていない。

それもそのはず。

ジウドの前には、黄緑色の半透明な六角形が無数に浮かんでいる。拳程の大きさの結晶で、それが盾の役割を成し、魔力の銃弾を弾いたのだ。その六角形、例えるならそれは、エナジーバリア。絶対守護領域と表現したい。こいつ、チートだ。

「私の名前はジウド・クリアス。結晶魔法騎士だ」

ああ、やばいな。

俺の手駒に欲しい逸材だ。これは負ける訳にはいかなかった。

この手のタイプは、自分より強い奴に従属する傾向にある。競争心を燃やすか、忠誠を誓うかどちらかだろう。騎士なんて忠誠心の塊をしている以上、こいつは間違いない後者だ。

あの銃弾すらも弾けそうな魔法、ぜひと欲しい物だ。それがあれば、俺の秘策も万全を期して使えると言っ物だ。

用が無くなったエアークンを懐にしまい瞬間移動、それと同時に拳を振る。

が、拳も呆気なく結晶に阻まれる。殴った感触は、壁でも殴りつけたようなものだ。痛い痛い。

「それが瞬間移動、か。戦乱時代以前には普及していた技らしいが、便利な物だな」

「……俺としては、アンタのその魔法の方が便利に思うがな」

俺は現在、逃げに回っている。走って飛んでしゃがんで瞬間移動して、とにかく一カ所に留まらないようにする。

結晶魔法、思った以上に厄介……否、便利だ。

ジウド自身は一步も動いていないが、その代わりに結晶が迫ってくる。手裏剣のように飛んで来たり、目前に現れて進路妨害をした。りする。満足に立ち回れない。

「つとー！」

考え事をしている間にも、目前に結晶が飛来した。さらに、俺の進路を塞ぐように結晶が俺を取り囲んだ。まずい。戦闘中に使う瞬間移動は、どちらかというと高速移動だ。塞がれば使えない。

「つくそ！ 物は試しだ！」

飛来する結晶に手を伸ばし、俺は『創造魔法』を発動した。
想像するのは、結晶。飛来する結晶と俺の間に、盾のように展開する結晶。

結晶には、結晶を！

瞬間、『創造魔法』使用時に生まれる光が放たれ、青く澄んだ結晶が俺の前に出来上がる。

そして??。

「何っ!？」

飛来したジウドの結晶が砕け散った。

おっさん達の間から動揺の声が漏れる。ざまあ見る。そして審判、何惚けている。

「……ナイン、どこで結晶魔法を」

「今さっき、アンタが見せてくれただろ？」

砕け散った自分の結晶を見て、ジウドが驚愕を隠さずに俺に尋ねた。

そして。

「参った」

「は？」

「降参しよう、ナイン殿。いや、ナインと呼んでも構わないか？」

「それはいいが、どうしてだ？」

「私ではナインに勝てない、それが解ったからだ」

ジウドがそう言うと、展開していた結晶は葉が散るように消えて行った。

こちらとしては、『創造魔法』を使えば使う程お腹が減るので助かるが、少々腑に落ちない。潔すぎる。それが騎士と言つものなのか？

そんな呆気ない幕切れであつたが、大臣達は納得したのか、俺は無事傭兵として戦争参加が約束された。

そして、グラス王に戦乱時代の遺産を見つけ出し持ち帰る事と、魔族との交友を深めに行く二つの件を話しておいた。そして、ジウドに静岡辺りを守らせるように進言。正直、あの結晶魔法は便利だ。了承を得て、これで明日から、心置きなく新潟に迎える。

俺はシャンプーで涙目になっているだろうヴァンパイアがいる家へと、ゆっくり旅の準備をしながら帰宅した。

ジウド・クリアスは驚きと動揺を隠せなかった。

銃という武器に関しては、全く恐るるに足らずだったが、ナインが最後に見せた結晶魔法、アレは異常だった。

自分の結晶を簡単に砕いたあの青い結晶。距離が離れていたとはいえ、姫様も自分も気付いていた。

あの魔力の密度、あれは異常だ。

元々ギルドではCランク判定だと諜報員から聞かされていた。実際に会ってみても、その判定を覆す材料は何一つ無かった。治癒魔法などと高度で大量の魔力を消費する魔法を使える者とは、到底思

えなかった。

だが、それは違った。

見ただけで結晶魔法を成功させ、さらには自分よりも密度の高い物を作り上げた。その技量、まさしく噂通りの人物だ。

治癒魔法の条件に、敵の兵士も回復する事を条件にするような優しい人格者。攻撃も全て死には到ら無い物だった。

この方なら、自分が真に忠誠を誓っても良いかもしれない。姫様も気に入られ居るようだし。

何より、この国の上層部は危うい。

そうジユドは思っのだった。

「まったく、姫様には困った物だ。王族としての意識が足りん。どうにかならんものか……」

「そうは言っても、これで三人目であろう？ 最初は平民、次は底辺貴族、そして今度はこの馬の骨か解らん奴だ。皆、腕は確かだ。今回ののは今までで一番姫様が気に入っておる。見た感じ、相思相愛にも見える。おまけに隙がない。ジユドを倒すような男だぞ？ どうする？」

「まあ待て。儂の手に入れた情報では、奴はこれからニイガタへと向かうようじゃ。いくら腕の立つ男でも、さすがに生きては帰れんよ」

「……ああ、『魔神伝説』ですな？」

「そう。魔剣ディアモンドと漆黒の鎧、魔神の怨念を相手に、生きて帰れる訳は無い」

「ふふつ。それでは、我ら誇り高き貴族のどの一族が姫を手に入れるか、勝負は長くなりそうだな」

第二十話 忠誠の結晶騎士（後書き）

スランプでした。現在進行形かもしれません。

面白さを見失っていました。見失っています？

その間、思いつきで『これは罪ですか？』という新作を書いておりました。

よければ、読んで拙作共々感想を頂けるとありがたいです。

一体何作掛け持ちするんだろう、この作者。

第二十一話 弟子と旅立ち

家に帰ると、シユウは死んでいた。

服を着て、廊下で倒れている。ピクリとも動かない。

それはまあ、見事な死んだ振りだった。

「アホか。……お前、本当にそれで生き抜くつもりだったのかよ」

俺は倒れたシユウを起こし、デコピンを喰らわせる。

「くっっ！ だって！ すっごく痛かったんですよ！」

シユウは目を擦りながら、涙ながらに事の顛末を語る。

シャンプーが痛くて死んだ、という話だった。

死んだ振りではなかったらしい。

「あのな、お前男の子だろ？」

「当たり前です。女の子に見えるんですか！？」

何やら挑発的なシユウを見つめる。

シユウは肩程までの白髪に、日に当たった事のなさそうな白い肌。中性的な顔立ち。それと正反対な黒い服で身を包んでいる。俺より一つか二つ若いだろうか。ヴァンパイアなので見た目と年齢が一致しない気がするが、精神年齢が低いからきつと合ってるはずだ。

目を潤ませて膝を揃えて俺を上目遣いで見てくる。

「指をしゃぶってそんな目で見るな！ しゃきつとしろ！ しゃきつと！」

「きゃふん！」

小突くつもりで蹴飛ばしたら、ゴロゴロと転がって壁にぶつかる
シュウ。

これは……。

「痛いですよ！」

「……………」

「……痛い……です、よ？」

「……おい」

ひっ！ とシュウが身を震わせた。俺はゆっくりとシュウに近づいて行く。

「お前には強くなってもらわなくちゃ駄目みたいだな。さすがにこんな腑抜けを守っていくのは俺でも無理だ。主に精神的に」

「ふえっ」

「修行だ修行！ お前の腐った根性叩き直さなきゃ駄目だ！」

ヴァンパイアの落ちこぼれだと知った時から考えていた事だ。

魔族の中にも、適度に使える駒が欲しい。その駒にこいつは丁度良いと思った。

しかしこいつ、今のままじゃ足手まといでしかない。素直な性格は高評価だが、ヘタレ属性は要らない。それと、戦力にもなっても

らねば困るだろう。

新潟までの道中、話を聞いた限りではもの凄く危険そうだが、元々俺に戦闘能力はあまり無い。『創造魔法』は便利だが、あまり多用出来たものではないだろう。基本的に、『創造魔法』は物を創るのに秀でた力だ。ペンダントに魔法を付加したりとか、本来は加工が大変な竜の牙を剣にするとか。例外として、新しい魔法を創るとか。

……ん？

ああなるほど、その手があったか。

「シュウ、一つ聞くんが、お前魔法は出来るよな？」

「馬鹿にしないでください！ これでも埃被ったヴァンパイア！ 人間風情が調子に乗る？？痛い痛い！ 死んじゃう！」

調子に乗ったシュウに拳骨をぐりぐりさせる。

「……えっと、一番魔力の弱い僕で、普通の人間の五倍……です。属性もだいたい全部使えます。脚力とかも、二倍くらい。そんな怖い目で見ないで！」

そうか、巫山戯なければかなり使えるじゃないか。だが、まずはその根性を叩き直さねばならないな。

「ギャーーーーッ……！」

その日の夜。

チヨダの森に木霊した悲鳴は、地竜に次ぐ新たな恐怖になったとかならないとか。

「おはようございます、師匠！」

「ん。お前、日の光は大丈夫か？」

「フードを被ってるんで問題ないです！ それより師匠！ 今日は何の魔法を教えてくれるんですか！」

「……いやお前、今日から新潟に向かうだろ。というか、何？ 随分熱心だけど」

師匠と呼ばれるのは悪い気はしないが、なんと言つか、やけに熱心だ。

「僕は……嬉しいんです！ 今まで駄目駄目だった僕でも、ちゃんと戦えるって解って……。何より、師匠、師匠の凄さを知りました。僕より全然だめなのに、頑張って……」

「……そりゃ良かったんだが、お前、強さを過信してないか？」

軽く馬鹿にされているが、真実なので何とも言えない。

「大丈夫ですよ。師匠の言いたい事は解ってます。所詮これは魔力

あつての戦術、仮染めの力、そう言いたいんですね」

「……解ってるなら良いがな」

たった一日で、こうまで変わるか。教えがいもあるし、何より俺より上の才能の持ち主。俺に出来ない事を、こいつはやってくれる。

『創造魔法』において気をつけなければならないのは、物を創る（剣や建物、魔石に魔力を取り込むなどの物質構成）と、魔法を創る（特性付加魔法、治癒魔法など理解を超えた現象を起こす）のは、圧倒的に魔法を創る方が疲れると言う事。

それは、体内の魔力を使うか空気中のマナを使うかの違いだろう。魔力がCランク程度の俺は、すぐにへばってしまう訳だ。魔力が枯渇すると、何らかの状態異常にでもなるのだろう。特性で『自動魔力回復』とか創ってみるかな。

「じゃあ出発しましょう、師匠。道案内は僕がします」

「ん、頼んだ」

といって、俺は亜空間から絨毯を取り出す。

ペルシャ絨毯。

いや、一度やって乗ってみたかったんだよね、空飛ぶ絨毯。

宙に浮くイメージで創り、空気中のマナを勝手に使用して宙に浮く。俺の魔力を使わずともだ。一家に一枚、魔法の絨毯の時代が来るかもしれない。

しかし、絨毯である必要性は無いがな。戦争が終わった頃に、商人としてここに来たかった。きつとぼろ儲け出来ただろうな。

「し、師匠！ 飛空石なんて持ってたんですか!？」

「飛空石？」

なんだ、空を飛ぶ魔石も存在しているのかよ。昨日の戦いで見栄はって空飛ぼうかとも思っていたが、しなくて良かったな。まあ、空に逃げても結晶を踏み台にして追っかけて来れそうだな。硬度、速度共に申し分無い魔法だった。だから、シュウに教えたんだが。恐らく、ジウドの使った結晶魔法とは別の物になっているだろうが。

「し、知らないんですか？ えっと、数年前にギルバート帝国で見つかった魔石で、それを持ってるだけで宙を自在に舞えるって噂なんです。本当だったんですね。ギルバート帝国が国外に出さないようにしてるって聞いてました」

……時折思うんだが、魔法と魔石は少々便利すぎる。

飛行機やモノレールはすぐにでも出来そうだな。そう言えば、戦乱時代では今より技術が上だったか。もしかすると、当時はあったのかもしれないな、地形を変える程の技術があったわけだから……、もしかすると、俺のやろうとしている事はまずいのか？

制御不能の古代兵器を発掘したら、どうしよう。

「まあいい。行くぞシュウ。ちゃんと道案内しろよ」

「師匠。どうやって操作するんですか？」

「いや、お前が引っ張るんだよ」

「えっ？」

空飛ぶ絨毯は宙に浮くだけだ。そこから水平移動は外部の力を使わなければならない。絨毯が高速で動けば、振り落とされるだろう

が。風が冷たいだろ。

俺は絨毯に疊んで、ほれさっさと行くぞ、とシュウに命ずる。師匠って良いな。当然のように弟子をこき使える。

「し、師匠……」

「フード被ってたら日差しは大丈夫なんだろう？ 体力付けると思つて、頑張れ。多分簡単に引つ張れるから」

拗ねるシュウを押して家を出る。またしばらく家を空ける事になるな。

「……し、師匠」

「ん？ どうした……って、あれ？」

「おはようございます、ナイン」「……はあ」

見れば、家の前にはレーンとリンがいた。

「おはよう。えっと……」

「レーンと呼び捨てにして良いですよ。不敬罪で処刑されたりしませんから」

そう言つて微笑を浮かべるレーン。背後の朝日が後光に見える。いやあ、朝から良いもの見た？？ではないか。

「レーン。どうしたんだ？ またウサギになりに来たのか？ それとも、食べてほしいのか？」

と意地悪な笑みを浮かべる。不敬罪で訴えられないのなら、敬語を使う必要も無い。最近敬語ばかりで疲れてたんだよな。

「ちっ、違います！ 何言ってるんですか！」

「……レーン、前から気になってたんだけどさ、ウサギって何の話？」

「師匠……凄いです！ 姫様に何の躊躇いも無く、普通なら処刑ものの台詞をさらっと吐けるなんて。寛刑物です！」

「尊敬じゃないんだ。寛大だけど刑に処されるんだ」

閑話休題。

「で、何の用だ？ 見送りとかはやめてほしいな、なんか死にそうだ」

「見送り、といえば見送りですけど……実は、リンと一緒に連れて行ってほしいんです」

「……そう言う事だ！ 魔法騎士隊長様がありがたく付いてっやるんだ！ 感謝しろ！」

あゝ。

「シュウ、行くか。お前の母さんの病気早く治してやらなきゃ駄目だもんな」

「えっ、師匠。何無視してるんですか。一緒に連れてってほしいって、言ってるのに……」

なんでこういう時だけ察しが悪いかな。

「あゝ、要するに監視みたいな物だろ？ そりゃいらんよ。俺ってそこまで信用無い？」

「そうじゃありません！ あなたは、国として失う訳にはいかない存在です。あなた無しで戦争に決着が着くとは思えませんから」

おいおい、この国どこまでやばいんだよ。

「ナインと昨日戦ったジウドは、この国の最強の騎士です。それを負かした以上、あなたがこの国で一番ですから」

道理で強かった訳だ？、じゃないよな。要するに、不本意ながら王国最強になってしまった訳か？ ちょっと早い。もう少し後、牙を剥いてくる奴を倒してからそういう称号は欲しかったな。多分、快く思わない連中が少なからずいる。まあ、それは絶対に付いてくるものだし、まあいいか。

これで戦場で常に前線に立てるだろ。そして、多少の我が儘も聞いてくれるはず。うん、とりあえず良しとしておこう。

『能ある鷹は爪を隠す』、『出る杭は打たれる』の二つが残念な事になったが。

「あゝ、理解した。けど、いいのか？ 戦争近いってのに魔法騎士隊長さんが来ちゃって。俺の事なんか心配要らないって」

「ちがうちがう。確かにアンタの強さだったらエチゴ氷山くらい心

配ないけど、問題は戦乱時代の兵器を発掘しよう、っていう方。下手に扱って暴発させないように、っていう意味で私が付いて行くの！」

それはありがたい。正直、そっちはあまり理解出来ないからな。歴史を知らないし。間違つてドロドロ状態の巨人とか発掘したら大変だからな。

「んじゃ、リンもどうぞ絨毯へ」

「……………」

さつと絨毯を空中に敷くと、呆れたように見つめられた。もう慣れっこである。

「アンタって、いつ会っても驚かしてくれるわね」

そう言つて恐る恐る絨毯に乗るリン。絨毯は垂直抗力と浮力を生む。そのため、人が乗っても落ちない。代わりに、推進力が無い。

「ナイン……、気を付けてくださいね？」

「ありがと。レーンも、食べられないようにな」

意地悪く笑みを見せると、ぷくつと頬を膨らませるレーン。

……………。

「師匠……、もしかして僕は馬の役目ですか？ 犬や豚ならわかりますけど、馬はちょっと」

「むしろ犬や豚がアウトでしょ、アンタ」

「新入りが調子乗るな！ 僕を誰だと思ってやがる！ 埃被ったヴアンパイア一族の欠陥品だぞ！」

「誇れる所が一つもないでしょ……」

……はっ、いかん、放心してた。

しかしこの二人、出会ったばかりなのに随分と仲の良い事。道中が騒がしそうだ。

「じゃあ行くか。レーン………、行つてきます」

「いつてらっしゃい」

レーンの言葉に、ぐらつと心が揺れた。

その言葉は???奇しくも???俺が一度も言われた事の無い、普通の言葉だった。

そう言えば、元の世界で俺は、こういった言葉をかけられた事が無かったな。

帰る場所が無いから、変えようと思ったんだ。

本当、これは罰ゲームだ。

これじゃあ、帰りたくなっちゃまうだろ。

第二十一話 弟子と旅立ち（後書き）

なんか、色々見失ってます。

……第二部から本気出します。

第一部は序章のようなものです。

主人公の能力が強いのか弱いのか、かなり判定しにくいなと思った
今日この頃。

第二十二話 結晶と赤（前書き）

今回、試験的に作風を変えてみました。
気に触るようでしたら、書き換えようと思います。

第二十二話 結晶と赤

お昼でした。

三人の旅立ちを歓迎するような、晴れ渡る空でした。それはもう、ぎんぎんきらきらお日様燦々といった日でした。おかげで東京から北へ向かった三人は、あっという間に埼玉に到着していました。そして、ヴァンパイアが溶けるような、そんな一日でした。

「……ぐうつ、日が……火が、目をおおお」

「欠陥品とはいえ、ヴァンパイアか。ちょっと日に当たっただけでこれか」

「なんでわざわざ日に当てさせたのよ……。まあ、普通に進むよりかなり速いから休んでも良いと思うけど」

木陰で三人は休んでいました。正確には、休んでいるのは二人で、一人は苦しんでいました。

ナインが試しにシュウのフードを取ったのが事の発端で、あっという間にシュウは地面を転げ回り始め、うつ伏せで動かなくなったのでした。突ついてもピクリとも動きません。

「いや、確かめておかないとまずいだろ？ 昼間の戦闘で役に立つか立たないかは死活問題だ」

「それにしても、もう少しやり方があったんじゃないか……」

「くどいぞ、リン。後悔先に立たず、一応反省はしている」

馬がダウンしたため、三人は街道沿いの森で立ち直るまで休憩と洒落込んでいました。そもそも、誰かが引かなければならない空飛ぶ絨毯は、本当に空飛ぶ絨毯なのでしょうか？

「……一つ聞いていい？」

少し躊躇いを見せて、リンは尋ねました。

絨毯の上で寝ているシュウ、に座っているナインに。

「アンタは、戦いが嫌いだって言ってなかった？ 人が死ぬのも殺されるのも見たくない、って言ってたでしょ？ それでどうして、戦争に参加する事にしたの？」

ナインは少しだけ唇を噛み、小さく笑みを浮かべて言いました。

「師匠、重いです」

違いました。シュウでした。

本当に空気の読めない奴です。ここは黙って話を聞く場面です。ナインは空気の読めない駄目な弟子から降りてやり、リンに背を向けました。

「……嫌いだな。戦争だろうが何だろうが、人が死ぬのは嫌いだ。だからこそ、戦うんだよ。より少ない犠牲でこの戦争を終わらせるために」

「だけど、アンタはこの国の人間じゃないんでしょ？ この国の人間に義理立てする理由なんてないはず。だからと言って、あちらの国に付くのも変。一体何が目的なの？」

「答えなきゃ駄目？」

ナインは振り返りながら、小首を傾げて上目遣いでリンを見ます。駄目、と反射的に言いそうになったリンでしたが、そこは抑えて肩を竦めました。反射的に否定しようとするリンは、もしかするととてもSなのかもしれまーちよ、やめ、何をす……。

「いいわよ。アンタが信用出来るか出来ないか、もう決断してるから」

「へえ……、それじゃあ期待に応えなきゃならないな。けど、忘れてもらっちゃ困るぞ。俺が何を下のか……」

「？」

ナインの言いたい事が解らず、リスのように首を傾げるリンでした。

同時刻。

レーンは一人、チヨダの森最深部、魔女の住む家へと向かっていました。

魔女の住む屋敷はレンガ造りで、ナインの家と比べると一回り程小さい物だが、それは立派な建物だった。レーンは深呼吸し、その建物のドアを叩く。

ほどなくして、銀髪の少女がその戸を開けた。

「懲りずにまた来たの？　今度はウサギじゃ済まないわよ」

少女は長い銀髪をツインテールにしており、その目つきは鋭い。背の高さは二人とも同じ位だ。少女の陰悪なムードに対して、レーンはキツと気を引き締めた。

「エリス姉さん。話だけでも聞いて頂戴。もう時間は余り無いの」

エリスと呼ばれた少女、レーンの姉はじつと彼女を見て、そして家の奥へと消えて行く。

「立ち話もなんだから、さっさと入りなさい」

「はいっ」

エリス・リア・ラザウエルは、また来てくれた妹に見えない所で、小さく笑みを浮かべていた。

「どうせ戦争が近いから、私に戻って来てほしいって話でしょ？」

「……………どうしても戻って来てくれないの？」

エリスの出したお茶を飲みながら、上目遣いで聞いてくるレーン。うつと息を詰まらせるエリス。どうやら、シスコンのようである。

「……………嫌よ。一度は追い出したくせに、ちょっと都合が良すぎるんじゃない？」

「それは解ってます。だけど、このままじゃこの国は滅びます！」

「私一人が戻ったくらいで、何が変わるって言うのよ？」

「姉さんは優秀な魔法使いです。私なんかよりも、よっぽど強いし」

エリスは皮肉っぽく言うが、レーンが机を壊さんばかりに叩いて反論した。

しかし、エリスの態度は変わらない。むしろ悪化した。

「何？ 馬鹿にしてるの？ 謙遜のつもりかもしれないけど、嫌みにしか聞こえないわ。アンタが私より優秀だから、私はこんな森の奥に住まなきゃ駄目になったのよ！」

「違います！ それは、父上が勘違いをして……」

「違うじゃないわよ！ アンタは文武両道、おしとやかで人当たりも良かった。で、私は？ おてんばで人に迷惑かけて、魔法が使えただけ。父上の判断は間違ってるわい」

「うっ……」

「出てって！ 何が遭っても、私は戦争になんて参加しないわ！」

突き飛ばすようにレーンを追い出し、エリスがボタンと扉を閉じた。

前回とまるで同じだった。前はレーンがこの後もしつこく食いが下ったら、ウサギにさせられたのだった。

考えを変えてくれるまで待つしかない……。これは諦めなければいけないかも、とレーンは俯き足取りを重くして森を後にした。

レーンが森を出るのを魔法の鏡で覗いていたエリスは、それを見届けてから一枚の紙を手にとった。そこには、筆記体でcommunicateと書かれており、エリスはそれを口元に寄せる。

「ジウド。とりあえず今まで通り、アンタの言ってた鎧を作っておく。結晶魔法を秘めたミスリルの鎧。材料はいつもの場所に置いておいて」

と、紙に書かれた文字が光り、声を伝えてくる。

『助力感謝する。しかし、何故妹君の意見を聞かれぬのだ？』

「下手な詮索は身を滅ぼすわよ、ジウド。お前は知る必要の無い事」

『申し訳なかった。では、材料はいつものように。鎧もその時に』

「頑張つて頂戴」

そう言つてエリスは紙を口元から離れた。

その時の表情は、どこか悲しげな物であった。

「おい……起きろシュウ！」

「ひあつ！？ し、師匠……怒鳴らないでくださいよ。ヴァンパイアは聴力も優れて……」

「だったらこの状況もすぐ察せるわよね」

「いつ!？」

シュウが飛び起きたのを見て、俺は視線を周りへと戻した。

周りには、オオカミを思わせるモンスターが、軽く三十程以上いる。付け足そう、体長二メートル弱のモンスターが、俺達を取り囲んでいた。

リンが気付いてくれたから良かった物の、俺一人だったら気付かなかっただろう。こいつら、めちゃくちゃ速い。気付いた時にはもう囲まれていた。

ぐるる、とうなり声を上げながら、じりじりと迫ってくるモンスター達。

「魔狼、Bランクのモンスターよ……。どうするの？ 策があるのか言ってなかった？」

そう言うリンの体は震えており、どうやらこれは異常な事態だと判断出来た。

まあ、シュウの力を試すのに丁度良いか。

「策なら有る。シュウ！ 頼んだぞ」

「了解です、師匠！」

シュウがそう言うのと、魔狼が襲いかかって来るのは同時だった。

瞬間、襲いかかって来た魔狼達は土の壁にぶつかり、体が燃え、

水中に閉じ込められ、雷に打たれ、風に刻まれた。
色彩豊かな半透明の結晶が壁のように俺達を囲っていた。

突っ込んで来た魔狼の三分の一が今のでやられ、残った三分の二はその動きを完全に停止させた。

「初めての実践にしては上出来だ、シュウ」

「はい師匠！ 残りはどうしますか？」

「俺も試したい事があるから、ここでリンを守っててくれ」

そう言っただけで俺が一步前に出ると、結晶が横にずれて道を開ける。
結晶の壁から出た俺は、『創造魔法』であるモノをイメージする。
これが成功しなければ、俺は戦争なんかに参加はしない。これが出来なければ、俺はランクの一般人、満足に戦えもし無いのだから。

俺がイメージするのは、者。

想像完了、イメージ補完、『創造魔法』発動！

瞬間、赤き閃光が生まれ、刹那、静寂が辺りを満たした。

俺は魔狼を全で一瞬で地面に叩き伏せた。

第二十二話 結晶と赤（後書き）

試験的に作風を変えてみましたが、どうでしたでしょうか？
感想・意見・指摘をお待ちしています。

例えばシリーズと銘打って、今回初めてリンクしたかも。

第二十三話（前書き）

ランキング上位になってびっくりしました。
いや、本当に、驚きました。……どうしてこうなった？
感謝です！

第二十三話

「うっ、腹減った……」

一面に見えるのは、地面に顔を埋めた魔狼。一瞬、一瞬で全ての魔狼を叩き伏せた。

やはりというか、あの『創造魔法』は魔法という扱いになり、俺の体内で魔力と思われる何かが消費され、現在空腹状態である。まずいのである。

予想以上に反動が大きい。目の前がクラクラ、足はふらふら、お腹はぺこぺこ。

速度を持った瞬間移動の連続、これほどとは……。

所詮俺は平凡で、真似は不可能という事か。しかし、まがい物なにも出来てしまいう辺り、やはり俺は『平均』に呪われているのだろうか。

「さすが師匠、すごいです！ そんな隠し球があっただんですか」

結晶を解き、シュウが駆けて来た。

シュウに教えたのは、結晶魔法もどきだ。

各属性のマナを圧縮し、固体レベルにしたのだ。各結晶にその属性の能力が付加され、触れた物にその効果を与えと言っ、盾兼剣といった魔法。

一定間隔を空けて使わないと、自分も巻き込まれると言う危険性も孕んでいる。そのため、ヴァンパイアと言う不死身属性を持ったシュウに教えた訳だ。

また、マナを結晶化するのにも大量の魔力を有する。結晶の形に留めるのに、想像以上の魔力を使うのだ。

まったく、欠陥ヴァンパイアのくせに出来過ぎな弟子である。

嫉妬しなくなった。

「一応な。けど、こりゃ俺には無理だ。反射レベルの判断力に大量の魔力を費やす駄目魔法だ。お前にも教えようが無いし、教えても実践では不可能だな。切り札には使えるかもしれないが、長期戦には向かない」

「……………」

顔を引きつらせたリンがこちらを見ているのは知らんぷり。

どうせまた規格外な事をしでかしたのだろう。

日も暮れて、夕焼けと薄い月が見える空。

地図を見る限り周辺に街や村などは無い。お腹も減った。

と言う訳で、森の一角を陣取る。

「んじゃ、全行程の三分の一に達したし、夜も近いから今日はここで休むか」

「師匠、ヴァンパイアは夜行性ですから、大丈夫ですよ」

「なんだ、馬車馬のようにこき使われるのに慣れたのか。んじゃ、ボロ雑巾のようにこっぴどく扱ってやる??」

「疲れました！ 足が重いですが、今日はここで休みましょう！」

ザ・手のひら返し。

こき使うと言っても、絨毯を引っ張って歩くだけの簡単なお仕事だ。まあ、昼日中にヴァンパイアがやるのだから、簡単なお仕事ではないかもしれないが。

しかし、さすがヴァンパイア。常人なら五日はかかる距離を半日

程で来た訳だ。このペースで行けば、エチゴ氷山がどんな環境かは知らないが、三日で新潟に着くのではなからうか。

何故シユウに休ませるかと言うと、のんびりこそ出来ないが、一応初めての旅なのでゆっくりしたいからだ。というのは建前で、本当は移動中の空飛ぶ絨毯上で『世渡り』をするのが嫌だったからである。

「リンもそれで良いか？ …… って」

いかんいかん、女の子を野宿させるわけにはいかないか。
二十一世紀を生きる日本人として、それは駄目だろう。

「え？ 勿論、構わないけど」

「ん？ 良いのか？」

「むしろソレ以外にどうするって言うのよ」

うむ、カルチャーショック。そう言えば、この世界の文化レベルは低いんだった。いや、騎士なんだから野宿くらい普通にするのか。

「だがしかし、うら若き少女を野宿させる訳にはいかんでしょ」

と言う訳で、森の木を伐採。『創造魔法』で平屋を建築。

おおよそ十二畳程の広さの、壁と屋根に床だけの簡素な建物。この際、野郎と同じ部屋なのは我慢してほしい。うむ、創った俺が言うのもなんだが、風が吹いたら倒壊しそうな簡易な建物だな。

「……これって野宿って言うの？」

「知らん。家とは呼べないから、そうとも言えるだろ」

空飛ぶ絨毯をそのまま建物内に入れて、これで木の固い床で寝る心配は無くなった。

さて、晩ご飯である。魔力消費＝空腹のため、のんびり支度はしてられない。

マントの袖に手を突っ込んで、重ねられた皿に鍋を取り出した。鍋には人参、ジャガイモ、タマネギ、鶏肉が入っている。鍋の底には少々の塩胡椒もあったりする。

「……ねえ、アンタそれどこから出したの？」

「魔法の袋」

「袋なんて持って無いでしょ」

「目に見えないから、魔法の袋」

ゴリ押し。呆れたように天を仰ぐリン。異次元魔法は、きっと驚かれるだろうから伏せておく。存在しているかどうかも怪しいし。

調理、食材に手を添える。光が手から溢れ……。

「ナニソレ」

「調理。何片言になってんだ？」

「……これは調理とは言わないかも」

以前披露した調理魔法である。最近この調理魔法は使っても空腹にはない事に気付いた。当時は一日に何度も『創造魔法』を使って

いたため、何が原因で空腹になっているのか解らなかったのだ。

調理と呼ぶかどうかはさておき、完成したのはポトフだ。牛乳があればシチューにでもしたかったが、生憎牛乳は所持していない。水は基本的に魔法で代用するため、異空間に液体を入れた事が無く、非常に不安だったのだ。牛乳臭い異空間とか嫌だ。

「師匠、見た目は良しとして、味はどうなんですか？」

「おい弟子、若干上から目線じゃないか？ 弟子なら弟子らしく、師匠の出した物は文句言わず喰え」

味はと言うと、まあ、普通だった。

調理方法が方法だったため、味にも何らかの期待を寄せていたリンが落胆していたのは余談である。

食後、今後のプランと言うか、エチゴ冰山について今更ながら情報収集開始。手遅れの気がしないでもない。

「エチゴ冰山は文字通り極寒の地です。生半可な装備で行ったら凍傷になります」

「ふーん、それで？」

「寝たらそのまま永眠してしまいます。……師匠、随分と余裕ですね。何か対策でもあるんですか？」

「あるにはある。使えるかどうかは知らないがな」

魔法で強力にしたカイロとか、どうよ？

というか、吹雪軽減の魔法とか無いのか……。無いなら創るだけだが。

いよいよもって、俺は来る時代を間違えたようだ。戦争の後に来たかった。

新しい魔法の開発とか、カイロの持ち込みとか、凄く儲かりそうだな。

「それで、これが一番肝心なんですが、良いですか師匠？」

「勿体ぶってなんだよ」

「それはですね……」

「魔神伝説よ！」

「……魔神？」

勿体ぶっていたため、肝心な所を取られて頂垂れるシュウ。無い胸を張ってリンが続けた。

「戦乱時代に居たとされる魔神、その装備がエチゴ氷山の奥地、すなわち新潟の側にある訳。で、その装備なんだけど、魔神の怨念が籠ってるらしくて、エチゴ氷山を徘徊しているらしいのよ。それと、なんか凄く失礼な事考えなかった？」

無いよ。事実なだけだ。しかし……らしいとは、随分と曖昧な言い方だな。

嫌な予感がひしひしとする。

「これまで、エチゴ氷山を超えて帰って来た者はいないわ。行きか歸りに、死んでるのよ」

ふうん。おいシュウ、俺はそんな危ない場所だとは聞いてなかったぞ。何故目を逸らす。

「ちなみに、その装備って言うのが、魔剣ダイヤモンドと漆黒の鎧らしいのよ。噂どおりだとしたら、最悪の組み合わせよ」

「……どういう事だ？」

「魔剣ダイヤモンドは、使用者によって形を変え魔法を纏う剣ね。例えば、閃光魔法っていう目つぶしを目的とした魔法があるんだけど、それを纏わせると使用者以外には常に閃光を生み出す剣に見える訳。で、極めつけに絶対に壊れない」

「漆黒の鎧って言うのはですね、ありとあらゆる魔法を無効化する鎧なんですよ。ん？ ああ、間違いました。ありとあらゆる魔法を塗りつぶす鎧です。魔法を使えばそれ以上の魔力でもって押し返されるらしいです」

「ついでに、魔獣の巣窟よ」

そうだな、そんな話聞いた以上、魔獣なんてそりゃもうついでだな。

剣が絶対に壊れなくて、鎧に魔法が効かない？
普通にやばくないか？

「あゝ、シュウさんリンさん。一緒について来てくれたんだから、何か秘策あるんだよね？」

「まっさか！ 私はアンタを信頼してるもの。大丈夫でしょ？」

「僕も師匠を信じてます！ 師匠は凄いですから！」

大丈夫な訳あるか！ と怒鳴りたいが、信頼を失いたくはない。二人とも本当に俺を信頼の眼差しで見ている。なんでかな、なんでこんな信頼されるんだろ。特にこの弟子。俺はお前をこき使つてばっかだぞ？

……………、秘密兵器を持ち込むか。

正直、『創造魔法』によるとある人物の模写が失敗した以上、秘密兵器の持ち込みは確定だ。

もう出し惜しみはしない、俺の持てる全ての策を講じて生き残ろう。

それと、あわよくば、その魔剣は欲しい。多分、俺の策にちょうど良すぎる一品だ。

とりあえず、そんな奴がいるのが解った以上、万全の状態で戦いに挑みたい。

と言う訳で、魔力と疲労回復のために、粹な計らいをしようではないか。

異次元魔法で大理石を出し、それを分解から構築し、簡単に風呂桶を作る。

さらに追加で木を伐採して、なんと言う事でしょう、水気も無い森の一角に、簡易な温泉が出来たではありませんか。女性のために壁で周囲を覆う配慮もしていますよ。巧みの粹な計らいです、……自演乙。

「……………」

「さっすが師匠！ 僕には思いつかない事を颯爽とやってのける！ 猫も師匠も出来る事じゃないですよ」

「杓子だ、シユウ。意味の分からん間違いだから、宿題」

『創造魔法』、風呂に温泉を満たす。エメラルドグリーンの水面に月が映る。

「この温水を創れるようにしておけ」

「うええ!？」

「何、簡単だ。俺に出来るんだ。お前に出来ないはず無いだろ？」

「頑張ります!」

ちよろいな。シウは間違いなく褒めて伸ばすタイプだな。間違えた、叩いて伸ばすタイプだ。俺がこの温泉を創れるようになるまで、一体どれほどの試行錯誤を繰り返したと思っているんだ。

ただの水じゃない、多種多様のマナを内包した温水だ。

これが出来るようになったら、恐らく結晶の硬度、すなわち魔力の密度はジウドのソレを上回るだろう。あとき結晶が砕けたのは、それくらいしか理由が浮かばない。

それと、リンが何やら驚きやら喜びやらで顔が変な事になっていたのは蛇足。

「まさか旅に出て温泉に入れるなんてね」 アンタ最高っ!」

一番風呂から上がったリンはご機嫌だった。……女の子の湯上がり姿、悪くないな。

俺は一度水を分解して、シウに目配りをする。

「やってみろってことですか……」

「一度きりだ。俺はもう眠いからな」

「僕が絨毯引つ張ってたとき散々寝てたじゃないですか」

「あれは寝転がってたただけだ。寝てはいない」

ぼやきながらも、シユウは風呂桶の前に来て、腕を掲げる。
簡単に出来るように呪文は教えておいた。

「え〜と、ス、『spa』」

瞬間、湯気と共に風呂桶に大量のお湯が流れ込んだ。
まあ、魔法である。

この世界の呪文、それは英単語だ。実に簡単だが、実は呪文と言
うのはこれまた戦乱時代に失われたようで、魔法の発動は詠唱か魔
法陣が現代では主流らしい。

アルファベットは失われた言語、だが英語の辞書を持ち込んだ俺
に死角は無かった。これで簡単に過去の優れた魔法を使えると言っ
た訳だ。

最も、呪文を言うのが恥ずかしいから『創造魔法』の派生として
無言で扱っているのだが。

「じゃ、ちゃんと出来てるかどうか入って確かめるから、お前はど
っか行つてろ」

「一緒に入りましょうよ!」

「断る。俺は優雅に寛ぎたいんだ」

目を潤ませるシユウを一蹴し、俺は風呂に浸かった。

……うん、出来てんじゃねーか。

あゝ、もしかして俺も羞恥心を放り投げて呪文を唱えれば、あんな栄養ドリンク付けの生活をせずにも温泉は創れたのか？

…… 真実って、時としては残酷な物だな。

風呂から上がって、分解し、入りたければ勝手に入れと言って、小屋へと戻った。

リンがぼけーっと上気した頬で明後日の方角を見ていた。うむ、魔力回復の効果は十分すぎたようだ。

「あゝ、リン。俺は寝る。起こすな触るな覗くなよ」

「覗くなって何？ それってどっちかというのアタシの台詞」

「俺は寝顔を曝したくないんだ。ナインだけにな」

若干浮いている絨毯の隅で横になり、眠りにつく。
それは眠りと言う、旅立ち。

『世渡り』発動。

第二十三話（後書き）

久々の執筆だったため、若干おかしい部分があるかもしれません。
評価、お気に入り登録ありがとうございます！

感想・意見お待ちしております。

活動報告にて、少しでも重要なお知らせ有り。

第二十四話 夢と現実の狭間（前書き）

残酷描写あり。

第二十四話 夢と現実の狭間

それは、本当に一瞬の出来事だった。

「ほら、ここなら星がよく見えるでしょ？ だから私はここが好きなの」

彼女はそう言って俺に笑みを向け、俺はそれに答えるように、夜空へと視線を向けた。

町から少し離れた丘に有る展望台。曇りない夜空に星達が輝いていた。

「確かに星はよく見えるけど、それだけが理由なのか？」

「ええ。都会じゃ見られない景色でしょ？ 都会では、街明かりが空気中の粒子に乱反射して空を明るくしてしまうから、あまり星空は見えないの」

「……へえ、物知りだな」

「まあ、田舎の空は空気が澄んでいて星がよく見えるってことよ」

「それで、君はどうしてこんな田舎に来たんだ？」

何気なく気になっていた事を訊いてみると、彼女は俯きしばし考えて、多少の照れを見せて答えた。

「……最期に綺麗な星が見たかったから、かな？」

「……え？」

「冗談。そんな困ったような顔をしない。……さてと、遅くなっちやうから帰ろう」

「……………そう、だな」

俺は彼女の名前を知らない。何も知らない。

きつと彼女は、俺でなくてもこんな風に話しかけただろう。

たまたま、席が隣だったからこうなったのだ。

俺以外の誰でも、彼女の取った行動は同じだろう。

それでも、俺には特別だった。

あの日、二人で見た夜空が、一瞬だが脳裏に甦った。

そして俺は知った。

世界は誰にも優しくなど無いと。

神様は非情に非道だと。

踏切。

俺と彼女は、遮断機を間に向かい合っている。距離は十メートルにも満たない。

だが、その距離は永遠に埋まりはしない。

「????????!!」

俺の叫びは、警報機の音によってかき消される。

彼女は泣いていた。

そして、俺に向かって笑いながら何かを語る。

だけど、それは、俺には聞こえない。

聞こえない。どうしてそんな悲しそうな顔するんだよ。

笑ってるのに、悲しそう。

俺は、??????????。

グ、シャ?????????????????????
??????

俺の目の前を、当然の如く列車が通過した。

一瞬、全ての音が消えた。

びちゃびちゃと、俺の身体に赤い液体と何かが降り掛かった。
視界が真っ赤に染まる。顔に手を当てれば、べとべとした何かが
手に張り付いた。

それは、酷く温かった。

名前を知ったのは、新聞の広告だ。
朝起きて、少女の名前と、二度と会えない事実を知った。
もっと彼女を知りたいと思った。
たったの一日だけ一緒にいて、楽しいと思えた。
もっと星空を見ていたいと思った。
ただ、一緒にいるだけでも十分だと思った。

だが、それすらも、世界は叶えてくれなかった。

彼女の葬式に参列して、始めて人の死と向き合った。
初めて知った新しい心の痛みに、体が震えるのを感じた。

だが、涙は流れなかった。

彼女が何故死んだのか、俺は調べて知った。

あの頃が、生涯で一番努力した日々かもしれない。
あまりにも理不尽過ぎて、納得出来なかったのだ。

彼女は大手薬品会社の社長令嬢だった。

だった。

彼女の家は、後進国のアフリカなどに無償で技術支援をしていた。
そして、技術を売って資源を得ようとしていた国から恨みを買った。

彼女の両親はアフリカへの旅路で消息を断ち、未だ見つかったのは居ない。

身よりの無くなった彼女は、親戚の家へと移った。

しかし、その移った親戚の家でも不慮の事故に遭い、彼女は一人になった。

その後、親戚の家をたらい回しにされ、ここに行き着いた。
そして、その間にも彼女の身近で何人も人が死んでいた。

解ったのは、彼女は精神的に相当病んでいたと言う事。

俺の怒りは、理不尽な国へと向かった。

こんな国は間違っている、と。

仕事に就いて、金を稼いで終わるような普通の人生を送りたくはなかった。

けれどそれに具体性はまるで無く、どうしようかと考えていた。

嫌な言い方になるが、彼女の死は渡りに船だった。

俺の決意と理想が、そのゲームへの参加を可能にした。

これはゲーム。

理想を叶えるための、人生ゲーム。

第二十四話 夢と現実の狭間（後書き）

問題の先送りばかりで、今の政治家は何がしたいのかよく分かりません。

私腹が肥やしたいなら社長でもやれば良い。
国民の税金を使わないでほしいです。

感想・指摘お待ちしております。

第二十五話 考察×2（前書き）

久々なので、文体がオカシイかも。
また、第二部は三人称視点なので、その練習も含めて後半は三人称です。

第二十五話 考察×2

目を開ければ見慣れた、慣れない世界が広がっている。

全ての物質が動きを止め、ありとあらゆる生物が排斥された世界。

『世渡り』で戻って来た世界は、いつもとまるで変わらない。

何もかもが動かない世界。動いているのは、俺だけだ。

持つ、という意識が無ければ、壁抜けだろうとなんだだろうと可能だ。

この世界には質量と物体の概念しか無い。

どれだけ思い入れのある物であろうと、俺が持てる質量であれば、勝手に手に入れる事が出来る。それが現実世界に影響を与える事も無い。

そう、だから俺は気兼ねなく国立博物館だとかに入り込んで、国宝級の物品を持ち出せるのだ。他人の物であろうと、そんなの関係ない。俺には持ち主の顔を見る事も出来ないし、奪うと言う訳でもない。

複製して異世界に持ち込んでいる??そんな感じだ。

今回は、現代兵器の持ち込みを試みた。

自衛隊の基地に潜り込み、兵器をかつさらって来た。9mm機関けん銃、M4カービンなど、比較的持ち運びの簡単な物を選んだ。当初にエアーガンを持ち込んだのは、弾が無くなって困らないようにするため。

しかし最近では、弾の代わりに放っていた魔力の方が貴重になってきた。そのため、銃弾が威力を持つ現代兵器に鞍替えである。どうせ自分の相手は魔物だ。

『世渡り』で持ち帰った物は、異次元に自動で入るようにした。突然現れると、面倒事になってしまっからだ。隣で寝ている奴も居る訳だし。

紐で銃器を釣って、弾薬や手榴弾はリュックに詰める。

あくまでこれは、エチゴ氷山攻略のための武器だ。戦争でこれらを使う気はない。これがギルバート帝国に流出しないように細心の注意を払うつもりだ。

俺が求めるのは、犠牲無い戦争終結。だが、戦争は俺の手のひらで起こる事ではない。無血はさすがに不可能だろうが、俺が参加した戦いは少なくとも誰一人殺す事無く終わらせたい。現代では不可能だろうが、幸い、俺には魔法と科学の知識がある。

戦闘を回避したい時、主に攻撃を受けたくない時、常套手段があるではないか。科学の力では実現不可能だろうが、魔法の力ならば可能だろう。大量の魔力の消費はその際仕方がない。人の命と空腹比較するのも馬鹿らしい事だ。

戦争が終結したとして、問題は魔族と人間が共存出来るか、という点だけだろう。それについては、これからシュウの故郷で話せば良い。共存が不可能であるのなら、別の土地に移ってもらえば良いだけだ。

と。

「不可能だな。今のままじゃ、絶対に不可能だ」

突然だった。

初めて。この空間に入って俺は声を聞いた。いや、音と言う者を初めて聞いたかもしれない。

二度目。俺がこいつの声を聞いたのは、このゲームに参加する前の一度のみだった。

「……何が言いたい？」

姿を見せない??否、姿など存在しない××に俺は尋ねる。

「使いこなせていないのだよ。せつかく私が『創造魔法』を与えたと言っのに、お前はまるで使いこなせていない」

「使いこなせていない？　なら教えろ」

せせら笑う××に、俺は素直に協力を仰ぐ。俺達の間で取り結ばれているのは協力ではなく、契約だが。

「気付いていない訳ではないだろう？　どうしてお前は魔法を使えば、空腹などになる？　まさかお前、私がそんなちやちな力を与えたなどと考えていた訳ではあるまい？　それは唯単に、お前が『創造魔法』を使いこなせていないから生まれる副作用に過ぎないのだよ。というか、私の力で『創造魔法』を発動しているんだ。使いこなせていれば、お前には一切の負荷はない」

「……『創造魔法』は物を作る魔法じゃないのか？」

俺の『創造魔法』の使い方は物質・魔法の構成だ。

物質を構成する原子が結合するイメージを想像し、それを『創造魔法』で具現化させる。魔法も同様に、マナと言っ原子に似た粒子を想像し結合させるイメージだ。

確かに、新しい物を作っていない。

「そうだが、違っ。『創造魔法』の真髄は、魔法を創造する事だ」

魔法の創造？

それは、まさか……。

「オリジナルの魔法を生み出す事だよ、我が主。『創造魔法』は零から一を生み出す魔法だ。本当に『創造魔法』を使いこなせれば、

いくら魔法を使おうとも、何の副作用も起こりはしない。お前がやっていることは、先駆者のコピーだ。『平均』に呪われたお前だから故に、只の魔法も使えるのだろう」

俺は平均だ。

誰か一人でも一であれば、他の皆がゼロでも、俺は零ではない。その点は、平凡ではない。平均だ。誰か一人でも使えれば、不完全だろうが俺は使える。

……薄々気付いてはいた。

俺の使った魔法は、今でこそあり得ないらしいが、ことごとく戦乱時代の魔法と一致した。

「その只の魔法は、『創造魔法』の原理こそ使えど、使いこなせてはいない。だからお前の魔力を消費し、空腹状態に陥らせる」

要するに、俺自身が考えついた魔法であれば、魔力の消費が無くなるという事か。

これは有益な情報を聞いた。

「解った。考えてみる。……が、お前は俺を手助けてしていいのか？」

これは俺の心を折るゲームだ。手助けなんて、敵に塩を贈るようなものだろ。

と、××はくくくと気味の悪い笑い声を上げた。

「なに、より高い場所から落とした方が壊れやすいだろう？ 物も、心も」

「師匠、この風呂桶どうするんですか？　??って、もう寝てる」

シュウがナインの支給したタオルで頭を擦りながら小屋に入ると、ナインは寝ており、リンがジト目でシュウを睨んでいた。

「……ちょっとアンタ、話良い？」

「五月蠅くしたら師匠に怒られるんでパスで」

一切迷う事無く断るシュウ。そのまま夜の散歩とでも洒落込むのか、小屋から出ようとす。が、がしりとリンに肩を掴まれた。

「騒ぐな、とは言わなかった」

事実、ナインはぐっすりと就寝中の様で、こちらに背を向けて何の反応も見せない。駄々をこねるシュウを、リンは小屋の隅に追いやり問いつめる。

「アンタ、あいつに何を教えてもらったの？」

「黙秘権を行使」

リンがボカツと殴った。脅ではなく、ただ単にちょっとムカついただけで。

「なんですか、いきなり殴るなんて！ 意味わかめです！」

「何それ……。まあいいわ、とにかく、一体全体なんなの、あの魔法」

ナインが使った魔法は魔法ではなく、どちらかと言うならば超能力に近いのだが、超能力という言葉を知らないリンには関係のない事であった。

魔法はイメージを媒介とし、それを空気中の各属性のmanaで具現化させることだ。

例えば、火の玉を生み出す魔法。まず火の玉を想像する。それを構成するのに必要な火のmanaを魔力で魔術反応させると、火の玉が出来る。後は魔術反応に使った魔力の残滓で火の玉を操作する、といった感じだ。

ナインの使った力は、manaを一切消費していない。『創造魔法』と自身の魔力で作り上げた、半オリジナル魔法と言った所である。リンが気になるのは、シュウが使った魔法だ。

ジウドの使う結晶魔法に酷似しているが、全然違う魔法。ジウドの結晶は、触れても何も起こらない。が、シュウが作った結晶は、触れると効果がある。

「魔法……？ ああ、師匠が教えてくれたあの魔法ですか」

ポンとわざとらしく手を打ち、シュウはしばし黙った後、

「あなたも師匠に教えてもらえばいいじゃないですか……。もし
かして、恥ずかしい？ きゃは！」

底意地の悪い笑みと、気持ち悪い笑い声を上げた。

「ッ！！」

やけに人をムカつかせる反応であり、リンの腸が煮え繰り返った。

……………その後、しばらく何があったのかをリンは覚えてい
ない。

気がついたら、ぼろぼろで床に転がるシュウがいた。所々焼け焦
げたマント、怯えるようにぶるぶると震えてる。それが子犬みたい
で可愛いのでリンが微笑むと、ビクツと縮こまり、頭を抱えて部屋
のシミにでもなろうとするように壁に寄っていた。

リンは何故だか胸がすつとしていた。

「……………で、どうなの？ あの魔法は何？」

「ひっ！」

寄って行って肩を掴めば、顔を引きつらせて怯えるシュウ。
罪悪感なんて微塵も感じず、リンは問いつめる。

「答えなさいよ」

「し、師匠に聞けば良いじゃないですか……。なんで、僕が答えな

きや?? 答えます答えます! 模範解答しますから、どうか、許して!」

リンがちよつと指に火を灯すと、シュウは簡単に態度を翻した。

「えつと、各属性のマナを魔力で圧縮して、固体化させてるんですよ。それで、敵がぶつかったりしたら、その圧縮していた魔力を解放して、圧縮していたマナで攻撃、って感じですかね。魔法使いでも何でもないんで、詳しい事はさっぱりです」

リンはシュウの後半の言葉を、まるで聞いていなかった。

マナを圧縮して、固体化させる? 水が冷えれば氷となるように、マナも何らかの操作を行えば固体化する事が出来る?

そのような原理、リン達魔法使いは思いつきもしなかったことだ。リンは深く考え、自分も本当にナインの弟子になった方が良いのは、などと考え始めていた。

「えつと、じゃあ、僕からも一つ聞いていいですか?」

「……え、ええ」

その時、リンは別の事を考えていたため、シュウの台詞になんとなくで返事していた。

だから、シュウの行為は、リンをとて驚かせるものだった。

シュウは、ナインを絨毯からたたき落として、こう尋ねた。

「あなたは師匠の何を信用しているんですか？」

ドサリとナインの身体が死体のように力なく床に落ちた。受け身を取る事も無く、人形のように意志無く転がる肉体。ピクリとも動かない。

「ちよつ……嘘、え？」

シュウの思いがけない行動にも、ナインの不自然な肉体にも驚き、リンは混乱する。

ナインの身体は、ぴくりとも動かない。散々こき使ってきた弟子に、人形のように扱われる師匠。その歪な関係に、リンは目眩を感じていた。

ナインの身体は、まるで魂でも抜けたように生気がない。

「もう一度聞きます。こんな師匠の、何を信賴しているんですか？」

シュウは何を思ったのか、乱暴にナインの身体を持ち上げた。ぶらりぶらり、とナインの身体は力なく宙で揺れ動いた。

「師匠は何も語りませんが、僕は知っています。師匠は普通の人間ではありません。未来人とか、戦乱時代の生き残り、宇宙人……異世界人かもしれませぬ。何であれ、僕らの生きる世界より高度な

文明を持った世界で生きた人でしょう。だからこそ、僕らには思いつく事の出来ない魔法を創り出せる。最も、これは僕の勝手な推測ですがね」

ナインが使った魔法、教えた魔法。

マナを圧縮して音速で放つ、ものの数日で豪邸を建てる、マナを内包した温水を作り上げる、転移魔法、何百キロも強制的に移動させる力、異空間の創造、マナの固体化。

その推測は十分にあり得る、そうリンは思った。

「僕から師匠について確信を持つて言えるのは、普通程度の能力しか持たないと言う事です。師匠は何らかの魔法でもって肉体を強化していますが、それを解いたら全てに置いてあなたに劣るでしょう。だからこそ、今は昏睡状態になっています」

ナインは圧倒的な力を披露した。そして、疲労もした。

ギルドの情報では、ナインは間違いなくCランクだ。

そこでリンは気付いた。

そうなる……、

「師匠が僕に魔法を教えてくれるのは、なるべく自分は魔力を使わないようにするためでしょう。少々リスクが大きすぎるんですよ、昏睡と言っつのは」

「けど、そもそも魔法を使わなければいいだけでしょ？」

「生き残るのに、出し惜しみする人が居ますか？」

その通りかもしれないけど……、とリンは納得いかないようだった。

それに構わず、シユウは続ける。

「で、仮に師匠が異世界人だとして、では一体何故この国のために戦うと思いますか？ 何が目的でこの世界に来たと思いますか？ 師匠が危険を冒してまで叶えたい願いとは？」

「……そんなの、解る訳ないでしょ」

「そうです。僕も解りません。……だから聞きます」

「……………」

シユウは持ち上げた時の乱暴さから一転して、優しくナインの身体を絨毯に横たえる。それは、ちゃんとした師匠と弟子の関係に見えるもなくもなかった。

「あなた方は、師匠の何を信じますか？ 何が目的で来たのかも解らない、一度大量の魔力を使えば昏睡状態に陥るようなこの人を、どう信用しているんですか？」

「……………」

「……………」

二人の間に、しばし沈黙が流れ、そしてリンが口を開いた。

「……アンタに答える義理はないわ。それに、どうせアタシ一人の答えになるわよ」

「……………」

しばし二人は睨み合い、シュウが溜息をついた。そして、
「やっぱり僕じゃ聞き出せないか」と口にした。実にあっさり
と。

その様子を見て、リンは首を傾げた。

「何？ 二人揃ってアタシに鎌かけてたの？ それなら凄い迫真の
演技だったわよ。……アンタがボロを出すまでは」

リンがキツと目を細めたが、シュウが首と手を振ってそれを否定
した。

「師匠は関係ないですよ。本当に昏睡状態です。触ってみますか？」

そう言って、人形のようにナインの身体を扱うシュウに、引きつ
った笑みを浮かべるリンだったが、ちゃっかりナインの身体を弄く
り回していた。

「呼吸も脈もある。……なのに生気がない？」

「だから言ったでしょ、師匠はどうか別の世界から来たって。魂が
引き戻されている、とかなんとかじゃないですかね」

「……あれ、本当にアンタの推測なの？」

「そうですよ。師匠と過ごした時間は少ないですが、僕は師匠を良
く知ろうと思いました。こんな僕でも、師匠は真摯に色々教えてく
れましたから。それに僕、本当だったらギルバート帝国で死んでま
すからね。助けてくれた師匠には、忠犬のように尽くしますよ」

至極真面目なことを言うシュウに、リンは溜息をついた。

「……呆れた。アンタって、とんだ道化ね」

「それは勘違いですよ。僕、一つの事に集中すると後が全部駄目になるんです。師匠が死なないように考えに考えてるだけです。師匠、僕と似た所がありますから。自分の事のように思っちゃうんです」

シュウはどこか遠くでも見るように、そう答えた。
まるで、未来の自分でも見るように。

「さっきの質問、アンタはどうなの？ アンタはこいつの何を信じてるの？」

「僕ですか？」

シュウはくすくす笑って答えた。

「師匠は、甘い物好きなんです。その所為か、考えも甘いんですね。信じるって言うっておけば、期待を裏切らないような甘い人なんです。なにせ、世界平和を本気で実現しようとしている人ですから」

第二十五話 考察×2（後書き）

なんだか思ったように書けない日々が続き、更新が遅れてしまいました。

感想・指摘・意見・評価などは、作者のモチベーションが上がるので、お手数でなければ。

次回辺り、例えばシリーズの一つ目の謎が解けるかも……。

第二十六話 邂逅

夏休み最後の花火大会とでも洒落込んだような、大量の硝煙が鼻にこびり付いている。

雪が微かに積もり始めている道に、赤い花を大量に咲かせた。

『特性付加魔法』で強化された肉体は、銃の反動を殺す事が出来た。銃器に関しては素人の俺だが、照準を合わせて引き金を引くだけの簡単なお仕事はこなせた訳だ。

エチゴ氷山に近づくにつれ、魔物の数は増えて来ていた。リンとシウウには魔力温存しておいてもらい、魔物は俺一人で片付けている。

その代償が、硝煙と頭を吹っ飛ばされた魔獣の死骸だった。

一撃必殺を試みたため、頭蓋骨が派手に弾けている。脳漿をぶちまけ、目玉を転がし、もの言わぬ口が何か言いたげに開いている骸達。

キモチワルイ。自分でやっておいて、ちょっと後悔していた。

そして、そんな惨状に対してはまったく狼狽えない二人に、ちょっと引いていた。

「……これが銃。正直、怖いものね。ジウドでなければ止められないわよ、こんな攻撃」

「速度、威力、共に申し分無しですね……。特筆すべきはその速度でしょうが」

と二人はあご髭でも撫でるようにして、討論していた。

……うん。こんなの間違ってる。コイツ等、まだ十……あれ、何歳だっけ？ まあいいや、とにかく、子供がこんなのを見ても平然としていられるような世界は間違ってる。

魔獣が身近に存在している所為かもしれないけどさ。

……止めた、止め。俺は自分が死体を見たくないから戦争を止めるんだ。断じてこの世界の人達のためじゃない。更に言うなら、この罰ゲームを楽しむためなんだ。偽善だよ。

「安心しろ。ギルバート帝国の銃は、これほどの連射性能と命中精度、威力もない。所詮エアーガン、当たりどころが悪くない限り死なない」

「でも師匠、師匠の知らないところで、その武器が開発されてるかもしれないじゃないですか」

どこの世界も、兵器開発は以外と簡単に飛躍するのもかもしれないしな……。俺達のいた世界にはない魔法って便利なものもあるし。

「そうなったところで、俺がいれば大丈夫だ。それに見た所、ジュドの結晶魔法も破れるか怪しいからな。あいつが前線で結晶魔法を張っておけば、何事も無いだろ」

「広範囲で張れる訳ないでしょ」

「それなら壁を創り出せば良いだけだろ。銃弾は直線的な動きだからな」

そもそも、俺の作戦がうまく行けば、戦いすらも起こりはしないのだけだ。

戦力よりも戦術だよ。
と。

ガシャン。

甲冑が動くような音が、他の全ての音を割いて耳に飛び込んで来た。

視界の端に、Gを思わせる黒い物体が見えたような気がした。

「あつ……、あ……」

「おっと」

気丈なリンが突如崩れ落ちそうになり、慌てて支える。むう、軽いな。何故が無償に高い高いをしてやりたくなるような体軀だ。ますます、リンを戦場に置いておきたくなかった。そのリンの視線の先、俺達の道の先には？、

「噂は噂、嘘だと思ってたんだけどな。……いや、噂や嘘だと思いたかっただけかもな」

二メートルに及ぶ漆黒の鎧に、身の丈と同じ長さの禍々しく黒ずんだ剣。

脳裏を霞む噂、伝説。

「リン。……あいつになんか魔法攻撃してくれ」

「えっ！？ ……わかったわ」

俺は一応、真偽とやらを確かめてみるためにリンに魔法攻撃を促す。一瞬驚いたような顔をしたリンだったが、頷き杖をそいつに向けて振った。

「はあっ……！」

瞬間、橙色のバケツサイズの火の玉が鎧目がけて数十発飛んで行った。

無詠唱魔法、だろう。さすがの魔法騎士様だ。
けどごめん、多分無駄だー！。

「……嘘」

ガシャン、ガシャン。

鎧は、今の攻撃で一步もひるみはしなかった。
否、あれは攻撃を喰らっていないのだ。火の玉が着弾したとするならば、相手へのダメージの有無に関係なく、火は拡散するだろう。だがそれが見えなかった。ということは……。

吸収。

ガシャン、ガシャン、ガシャン。

歩くことになる甲冑の音が、リンとシュウの恐怖を倍増させているようだ。

がくがくと生まれたとの子馬みたいに震えるリンを後ろに隠し、俺は一步前に出た。

男児たるもの、女の子の一人や二人、守ってやりたくなるもんだ。いや、シュウは男だけでも。

「師匠！！」

目を見開いたシュウが叫んだ。

この野郎、まるでこれから俺が死に行くような展開に持ち込んでんじゃねーよ。

俺はまだ英雄にもなっていないんだ。負けるつもりはないぞ。
俺は更に一步、すぐに一步と進み出す。

「師匠……」

歩みを止めない俺にシュウは泣きそうな声を出した。

……ああ、くそ！

俺にシヨタの趣味はねーんだよ！

俺は振り返ると、シュウに向かって師匠らしく悟らせるように話しかけた。

「シュウ、俺とお前は似ている。俺もお前も、何でも出来るがそれを極められはしない」

尤も、俺の方がお前より弱いんだけどな。

俺は上を目指せないが、お前は頑張れば上を目指せるんだ。

お前は『平均』に呪われていないからな。

「そんな俺達が、他の優秀な奴らに勝つにはどうする？

簡単な話だ。その優秀な奴らが駄目な分野で戦えば良いんだ。

自分の土俵で戦うって奴だ」

オンリーワンになりたかった。だから俺は契約したんだ。

そして決めた。自己満足の世界を作り上げると。

「戦争を誰も殺さずに終える。それって、誰もやった事ないだろ？」

そんなもの戦争でもなんでもなく、ただの茶番だろうさ。本当にそれが可能なら、その時戦争はただのシステムに成り果てる。俺と言う人間を英雄に昇華させるための。

俺は頑張る。

誰かが死んで、泣きたくないから。

「それを叶えるためには、俺は戦うべきなんだよ。魔神伝説を打ち倒す、それだってまだ誰もやった事ないだろ？」

俺はそれだけ言って、早足で二人の元を離れた。
ここからは人外バトルだ。俺は人間だけれども。

二十メートルの距離を開け、俺とそれは対峙した。

兜の狭間から覗くのは、虚無。中身はいませんよ、ってか。本当に怨念のようだな。

噂は噂、だからこそその真実。

魔神伝説。

魔神が創り上げた武器に、その怨念が宿り徘徊していると言う噂。
絶対に壊れない魔剣に、魔法を吸収する鎧。

随分といいもん装備してるじゃないか。一つくらい俺に譲ってくれたって罰は当たらんذار。

さあて。

『魔王』の契約者の俺と、『魔神』の亡霊。

王と神、どちらが格上だろう？

第二十六話 邂逅（後書き）

心持ち駆け足です。

第二十七話 魔神の鎧

対峙した黒の鎧は、ただの動く鎧だ。??そう思っていた時期が、俺にもあった。

だが、実際に対峙してみた感想を一言で言うならば??あり得ない。

魔法を吸収する、それは聞いていたさ。

リンの炎の魔法を開戦の狼煙とし、俺は魔神装備にあえて魔法を放った。

「……thunder!」

お手並み拝見、俺は羞恥心に苛まれながらも呪文を唱え、雷撃を放つ。ジグザグな軌道を描き、天から見ていられない程の光量の雷が落ちて、奴を直撃した。

結果、雷は吸い込まれて行くように、拡散する事も無く消滅した。

「wind cutter!」

適当に思いついた風の呪文により、半月型のカマイタチが奴を襲って行った。カマイタチは奴に触れた瞬間、触れた面だけ消滅し、消滅しなかった部分が大地を削った。

「flash flood!」

魔力がわずかばかり消費されるのを感じながら、激しい水流で奴

を押し戻そうとしてみた。が、水は奴に触れた瞬間霧散していった。

「rock cannon!」

地面を蹴り付けると、サッカーボールのような大きさの土の塊が奴に向かって飛んで行った。けれどこれも、奴に触れた瞬間ぼろぼろに崩れ落ちた。

「……rock spear!」

ふと気になった事があり、新たな呪文を唱える。空中に岩で作られた槍が出現し、それが奴目がけて飛んで行った。が、これはぶつかった瞬間消滅した。

「……はっ」

思わず苦笑いが漏れたが無視し、俺は懷に手を伸ばす。

俺は『世渡り』で持ち込んだ手榴弾を奴に放り投げる。その爆炎が収まる前に、立て続けにロケットランチャーでもぶち込むかとも思ったが、それはそれで敗北フラグな気がしたので止めたのだが……。

爆発は確かに起こった。大地を吹き飛ばし、もくもくと煙を上げた。

が、奴の立っていた場所だけは無傷だった。当然のように、奴も無傷だった。

「……っ!」

俺は、所持する銃器のなかでも高火力なマグナムを引っ張り出す。そして。

ダン！ ギン！ ガシャン。
弾かれた。傷一つついてない。動きは止まらなかった。

「……………まずい」

魔法は吸収された。自然現象に似た魔法も無意味だ。爆撃も無効化された。銃器も効いてない。

俺に残された手段は肉弾戦しかなかった。

計算が狂ったぞ。

肉弾戦って、俺のベースは凡人だぞ？ 『異世界召還補助効果魔法』なんて、さっきの魔法が全て無効化されたように、鎧に触れた瞬間無くなるだろ。そうになったら、ただの凡人。仮にも魔神の怨念に勝てるかよ。

やばい。

魔法を吸収するなら、科学の力はどうだろう？ これは効くだろう。

そう思って近代兵器の爆弾を使用したけど……。手榴弾の爆発をも吸収するって、それはないだろ。魔法を吸収するって、魔法を構成するマナを吸収するんじゃないのかよ。

だから雷や炎、水は消滅したし、風や土は触れた瞬間乖離した。だが何だ？ 魔力で構成される炎も、化学反応で生み出された爆発も等しく処理する？

おいおい、それじゃあまるで、マナなんて未知の力じゃなくて、エネルギーに対して吸収作用が働いているようじゃないかよ。

百歩譲って魔法の吸収は認めよう。だが、エネルギーの吸収なんて認められるかよ。

何が魔法を吸収するだ。というか、なんだその機能。

これが魔神装備……。

まるで『魔法』の装備じゃないかよ。
ん？

『魔法』？

俺は、何か大きな間違いを犯していないか？
もしかして、これが本当の『魔法』？

「???と！」

怨念に空気を読む事は出来なかったようで、思考最中でも切り掛
かれた。

両手剣の魔剣を上段に構え、まっぴたつにでもしようかと言わん
ばかりに振り下ろされた。身体能力が上がっているので後ろに飛ぶ
だけで簡単に避け???られない！

鎧は剣を下段に構え直し、突っ込んでくる。二メートルもあるか
らか、えらい速く感じる。

後ろに下がるには下がるが、あまり下がるとリン達の場所ま
で行ってしまう。

「???ああくつそ！」

奴の攻撃に耐えうる剣を想像、『創造魔法』発動。

お前だけ良い武器持つてるなんてずるいぞ！ 一つくらい俺にも
寄せ！

はたから見れば酷く滑稽だが、俺は剣を持っている仮定で奴の攻
撃を迎え撃った。

キーン！

と、鉄同士が激しくぶつかり合うのとは少し違った、鈴を鳴らす
ような音が響いた。

俺の手には剣。

奴のどす黒く禍々しさを放つ剣と対照的な、透き通るような神々しい剣だ。魔王の契約者のくせに何を創っているんだかな。

見た目はどうであれ、実はこれ、普通の『創造魔法』で創り上げたもの。いわば、零から一を生み出した。要約すると、純度百パーセントのmanaで出来た剣。

恐らくも何も、先ほどの槍同様、鎧に触れれば消滅するだろう。だが、この攻撃を受け止められた、か。

「……ふむ」

俺はどんな剣でも弾き返せると自己暗示し、それを実行。

そして、鎧を吹っ飛ばせると更に自己暗示し、鎧を蹴り付けた。

瞬間、身体から何かを奪われる感覚、虚脱感が襲って来た。が、

鎧は十メートルほど吹っ飛び、地面を何度か転がった。ビンゴ。

そして、ボキリと。

「いつぎいいい！」

俺の足も盛大な音をたてて折れた。

痛い痛い、遺体になるくらい痛い！　あまりの痛さに足を抱えて

地面を転がったが、涙目になりながらもなんとか、健康状態の自分を想像し、『創造魔法』で治療する。

「師匠！」「ナイン！」

「来るな！　……出来るだけ遠くに逃げろ。振り返るなよ？」

俺は立ち上がり、リン達を五月蠅そうに追い払った。

心配してくれるのは凄く嬉しいが、涙目なのは少々対応に困ると

いうものだ。

「師匠の命令だ！ シュウ！ リンを連れて出来るだけ遠くに逃げろ」

「……………」 「ちよつ！」

俺の言葉に真摯さを感じたのか、シュウは何も言わずリンをお姫様だっこしかけ出した。土煙を上げて突っ走るシュウは、腐ってなんかない、妬ましいくらい立派なバンパイアだった。そして、ぎゃーぎゃー騒ぐリンはやっぱりお姫様じゃない普通の女の子だった。しかし痛かった。泣くくらい痛かった。だが、鎧の吸収の法則性が見えて来た。

それに、勝機は見えた。

この手の一見無敵に見える機能には、おおよそ二つの攻略パターンがある。

一つは、それが作用しない方向の攻撃を加える方法だ。

例えば、どんなものでも反射するシールドがあったとする。だがそれも、使用者の頭上、または足下から攻撃すればどうだろう？

これはジルドの結晶魔法に言える事だ。

触れたものの全てを反射しようと、それは毒物などの内側からの攻撃には耐性がない。

もう一つは、それが耐えられない攻撃を加える方法だ。

例え、ありとあらゆる攻撃を吸収すると言われていようが、ものには限度というものがある。この場合、『こいつを壊すだ！？』

そんな馬鹿な！？ 貴様、化物か！』なんて武器を過信した奴が、それを超越する力を持った奴の攻撃で敗北する。掃除機に目一杯ゴミを吸わせたような結果だ。

さて、この鎧は……。

立ち上がり、ガシャンガシャンと甲冑音を響かせてこちらに向かってくる鎧。

一つだけ、良いだろうか。

俺は昔から平凡だった。いや、平均だ。だからこそ、絶対に超えられない才能と言う壁をよく見て来た。そんな俺は負けず嫌いだ。だから、才能のある奴を負かしたいと思った。

その手段は簡単だ。

自分の土俵で戦うだけだ。

「skyscraper！」

瞬間、俺と奴の足下に亀裂が入り浮上した。エレベーターに乗った時のような浮遊感が襲うが、体勢を崩す程じゃない。

鎧の吸収法則一つ目、自然エネルギー及びマナを吸収、もしくは無効化する。これは手榴弾の爆風と魔法から導き出した解だ。手榴弾は化学反応で爆発を起こす。魔法はマナの結合で構成される。その両方はイコールで結べない。となると、起こった現象がイコールで結びつけるしかない。

つまり爆風は風、熱、音、光エネルギーによって構成されている。雷や炎は熱、光エネルギーによって構成されていると解釈するのだ。そうすることで、手榴弾の爆発と魔法の攻撃が吸収されたことに一応の收拾はつく。勿論、マナを吸収すると言うのもあるだろう。それゆえ、マナで結合されていた水と土は乖離したのではないだろう。

か。

塔??? いや、ビルだ。窓も入り口も何もないただの縦に長い立方体が、俺たちを乗せてどんどんと高くなつて行く。質量保存の法則に乗っ取り、周囲の土がどんどん飲み込まれ行き、大地が軽い変動を起こしている。

鎧の吸収法則二つ目、間接的なエネルギーやマナの働きは吸収出来ない。これは槍と塊では処理が違った事からたてた仮説だ。槍は零から一を生み出した。塊は一の形を変えた。純度百パーセントの土は乖離し、マナは消滅した。そして剣は、鎧に触れなければ消滅しなかった。

以上の点から、鎧は触れたものしかマナを吸収出来ないと判断出来る。

このビル。こいつは足下を浮上させて作っている。イメージとしては、俺と奴が乗っている台を、土を盛り上げて浮上させる感じだ。Skyscraper、『摩天楼』は雲を擦る程の高さまで伸び、止まった。

空気が薄く、気温も低い。いやはや、高度3000メートルはやりすぎたか。富士山に並びそうな高さだ。だが、富士山のような安定感はない。

簡単に崩れるだろう。

いや、崩すだけどさ。

そして突破口、攻略法、鎧の吸収法則三つ目、力学的エネルギーは吸収出来ない。

これは銃弾を弾いた事と、俺自身の蹴りが通用した事から求められた。銃弾の運動エネルギーを吸収出来たのならば、銃弾は鎧に触れた瞬間弾かれず落ちたはずだ。

そう判断し、蹴りを放った。蹴りの場合、触れるまでに人外の運動エネルギーが生まれる。それを吸収されたらされたでまずかったが、そのときは少し離れて『転移魔法』で離脱だ。

結果、鎧を吹っ飛ばすだけの蹴りを放てたが、蹴りが当たった瞬間に補正が消滅、凡人の足はその威力に耐えられなかったのだ。

要点をまとめると、この鎧を止めるためには、

「魔法が駄目なら、物理で倒すまでだ」

ということだ。

鎧を倒すには莫大な力学的エネルギーによる『破壊』が必要だ。

俺自身の補正でその威力の攻撃が出来るかというところ、かなり微妙だ。出来るかもしれないし、出来ないかもしれない。そんな危ない橋は渡りたくないの、この手を使わせてもらった。

高度3000メートルから落下したら、鎧はどうなる？

ただの硬い鉱物なら無事かもしれない。だが、これは鎧の形をしている。関節部分は脆弱になる。おまけに中は空洞、外から掛かる強い圧力に鎧は内側へと曲がるだろう。

さあて、飛ばうぜ。

俺は震脚、それと自らの重さに耐えられず、『摩天楼』は崩壊した。

俺と鎧は大量の瓦礫と共に空中に投げ出され、鎧は落下し、俺は宙を舞った。

翼。

俺の背中から粒子のようなものが溢れ出て、翼を形成している。

『創造魔法』は実に便利だ。

実のところ、重力の操作であるから翼なんぞ必要ないが、空を飛

ぶイメージはやはり翼あつての物だろう。

空を仰ぎ見ながら落ちて行く鎧を見下ろしながら、俺は呟いた。
「物でも心でも、より高い所から落とした方が壊れやすいんだっけ？ 魔王」

壊れないかもしれない。そうなった時はこれの逆、地中深くまで埋めてやるだけだ。

だが、絶対に壊れる事は確かだ。横には絶対に壊れない剣があるのだから。どちらもあわせて絶対に壊れないのではない。剣だけがそう言われているのだ。ならば、鎧は壊れるのだろう。

大量の瓦礫と共に鎧は小さくなっていた。

魔神伝説、これからはこの瓦礫と共に俺の英雄譚のページにでもなってくれ。

「魔王つて、堕天使がなつたんだから、滑稽な話だよ。翼を持たぬ神が墜ち、翼を奪われた天使が天に居るんだから」

俺は転移魔法で大地に降り立ち、

瓦礫と共に残骸に成り果てた漆黒の鎧を見つけた。

その横に突き刺さるは、禍々しさとかけ離れた淡白でオーソドックスな剣。

これまで魔剣にはまったく触れなかったが、それは魔神の怨念が鎧に定着しているからだ。だが、俺の思い入れは魔剣の方にある。

絶対に壊れない、魔法を纏う剣。

使用者によつて形を変えろという、魔法の剣。

言つただろ？ 一つで良いからくれよ、と。

英雄には丁度良い武器じゃないか？ 英雄の武器つてのは、受け継ぎやすい物じゃないと駄目だろ。その点、鎧は少々無骨だ。

俺は剣を拾い上げた。

一瞬、光が溢れたかと思った間に、剣は形を変えていた。

黒光る刀身に、漆黒の柄。

日本刀だった。

形状記憶合金、って奴じゃないんだろうな。

黒、ね。魔王の契約者にはお似合いじゃないか。

第二十七話 魔神の鎧（後書き）

現在、例えばシリーズの二つを足して2で割ったようなファンタジー作品を、どこかの賞に応募するため執筆しているのですが、この賞に応募するか悩んでいます。ここで意見を求めたいとも思いますが、どこの賞も基本的に未発表作品に限るという条件があります。ここで掲載した場合、上記の条件を満たさないように思え、掲載出来ません。Arcadia様に掲載するというのも考えていますが、どうなのでしょうが。

どなたか、アドバイスを頂けるとありがたいです。

第二十八話 魔神の鎧・後（前書き）

本文はあってもなくても変わらない内容と言う駄文。
あとがきが本文と言ってもいい内容です。

第二十八話 魔神の鎧・後

「冗談じゃないわ！ 信じられない！ 何考えてるのよ、馬鹿なの？ 死ぬの？ そのまま天国行っちゃって、アタシ達を見守ってくれちゃったりするの!？」

リンにこっぴどく怒られた。

やはりというか、狙ったのだから当然と言うか、俺が死ぬんじゃないかと思っただけらしい。

「心配してくれてありがとな」

「ーッ!! 解ってない! アンタ何にも解ってないでしょ! アンタが死んだら、アタシの友達が泣くじゃない! その友達に頼まれてるんだから、当たり前でしょ!」

「何? お前は泣いてくれないの?」

「アタシは泣かない」

「酷いな」「酷い女ですよ」

何故かシュウがあわせて来た。何か思い当たる節でもあるのだろうか。

「アンタ等、本当に女心が解ってない。……レーンがアンタ達と一緒に居たら、なんて言うかな」

「安心しろ。その時はその時、お前のように粗忽に扱わないぞ」

「アンタなんかこの瓦礫に埋まって死ねば良かったんだあ!!」

どうやらリンの俺達への好感度はあまり高くないようだ。

リンがひどく暴れたらしく、シュウの顔には引つ掻き傷と齒形が付いていた。

引つ掻き傷はともかくとして、顔に齒形が付いているのは何と云うか、羨ま??けしからん。リンも可愛いタイプの女の子だ。シュウの顔に齒形、ってことは??ねえ。

俺が必死で戦ってる間に、何をやっているのだこの弟子は。

まあ、シュウもシュウで戦っていたようだけど。逃げると言った俺の命令と、戻れと五月蠅いリンの命令の間で。

で結局、『摩天楼』が崩壊するのを見た後、急いで戻って来た。

倒壊に巻き込まれないように逃げると言ったのが解ったようだ。探しに行く手間が省けて良かった。

「……で、これどうするつもりよ?」

呆れたようなリンの言葉が指し示すのは、『摩天楼』の瓦礫。高さ三千メートルの塔の残骸。

勢いで作ったが、改めて見てみると、凄く邪魔だな。

「いや、どうしようもない。魔神伝説の記念にこのままにしておこう。邪魔にもならないだろ?」

「そりゃまあ、そうだけど……」

街道は地盤沈下、木々は倒れ、地震でもあったような（実際『摩天楼』が倒壊した時はかなり揺れただろう）状態だ。だが、元々通行する者もないのだ。あってないような道、良いじゃない。

「だけどそれじゃ、どうやって先に進むのよ？」

「……俺が無事な道まで空飛んで行くか」

「は？」

「師匠！ また新しい魔法創ったんですか！？」

新しいのかどうかは知らないが（恐らく戦乱時代には存在していたんじゃないかと思う）、どうやら空を飛ぶ魔法とやはは知られていないらしい。

「まあな。ちよつと休んで体力回復したら出発するから、それまでに荷物まとめといてくれ。二人を抱えて飛ぶから」

何故だか歓喜の声を上げる二人を尻目に、俺は鎧の残骸を見に行く。

魔神伝説、そう呼ばれるだけあって、魔王の契約者の俺よりもより『魔法』を理解していたのだろう。俺にはエネルギーを吸収する『魔法』などはないしかなかった。

砕けた鎧の破片を拾い上げるが、鎧に触れた時に感じたあの虚脱感は無く、どうやらもはやただの物質に戻ったようだ。

……魔王が言いたかった事がわかった。

ああ、なんていうか本当、『創造魔法』はチートだよ。これだけの力を与えられたら、無血で戦争終わらせられなかったら俺が無能みたいじゃないか。

魔王の語った本当の『魔法』。

それは、『魔の法則』だ。

第二十八話 魔神の鎧・後（後書き）

例えばシリーズに置ける超常現象の概要。

《スキル》、《魔術》e t c

未知のエネルギー要素、マナの存在を仮定し、それを使用したエネルギー保存則が適用される現象。

例えば、火をおこしたり、雷を生み出したり、風を生み出す現象。

《『魔法』》、《能力》e t c

マナの存在を仮定しようと、エネルギー保存則以前にこの世のいかなる法則にも捕われず、独自の法則にのみ縛られる現象。

例えば、相手の容姿をコピーする、絶対服従の命令を下す現象。

ただし、魔法は大域的な意味で用いられる。
そのため、魔術と『魔法』が混在している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5888p/>

例えば名無しの英雄譚

2011年7月29日00時43分発行